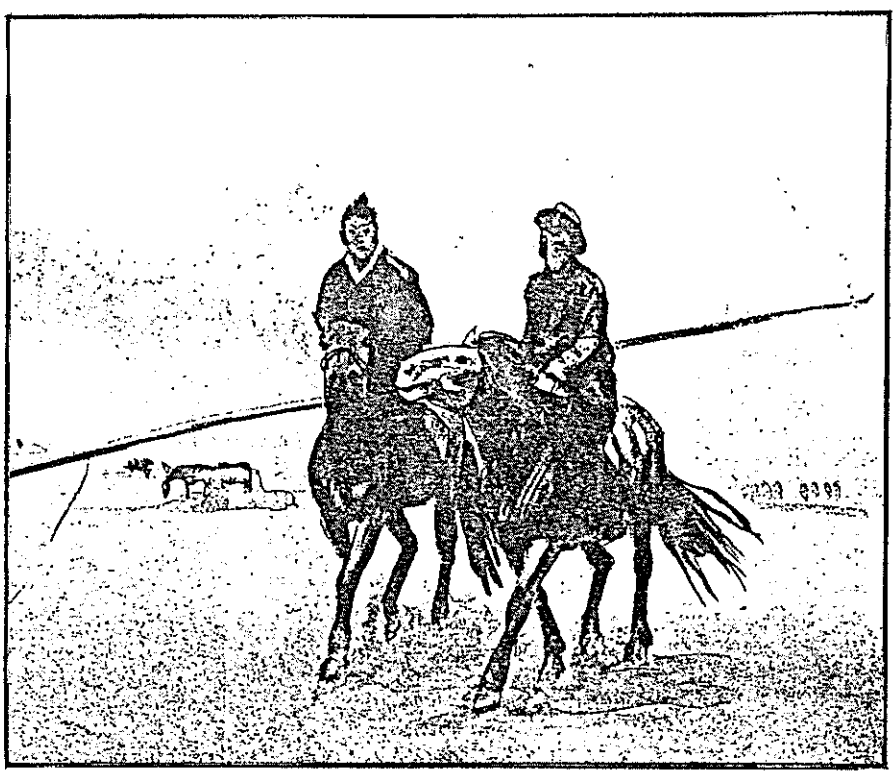
大草原のモンゴル紀行

（ソ連・ハバロフスク～イルグツク経由）

平成元年６月３０日～７月１４日
（１５日間）



寺　前　信　次

大草原モンゴル紀行　目次

まえがき　・・　１
６月３日　・・　３
新潟空港よりハバロフスクへ　・・　３
変化の少ないハバロフスク　・・　４
西欧・ソ連の覇権侵略の過程　・・　５
中ソ和解と日本　・・　８
ハバロフスクの概要　・・　９
７月１日　・・１０
ハバロフスクの観光　・・１０
ハバロフスクを発つ　・・１３
７月２日　・・１３
ウラン・ウデ　・・１３
シベリア出兵の概要　・・１４
イルクーツク　・・１５
７月３日　・・１６
愚弄されたイルクーツク　・・１６
７月４日　・・１８
歴史博物館　・・１８
イルクーツク～ウランバートル　・・１９
ウランバートル到着　・・２０
蒼い狼の国モンゴルの伝説　・・２１
蒙古の名称　・・２１
モンゴルの歴史の概要　・・２２
７月５日　・・２６
ウランバートル早朝の独歩　・・２６
テレジ（村の名称）の見学　・・２７
ウランバートルの概要　・・３２
７月６日　・・３３
ウランバートル市内観光　・・３３
ラマ教とモンゴル　・・４０
７月７日　・・４２
ホジルトへ　・・４２
ベースキャンプのゲル　・・４２
遊牧民を訪ねて　・・４４
カラコルム遺跡　・・４６
モンゴル帝国　・・４９
７月８日　・・５２
ホジルト～ウランバートル　・・５２
国立博物館　・・５３
日本人墓地　・・５４
７月９日　・・５６
ゴビ砂漠の町ダラン・サダガド　・・５６
ゴビの意味　・・５７
ゴビ砂漠のホルホン砂丘　・・５８
遊牧民を訪ねて　・・６０
満天の星が輝く草原の夜空　・・６２
７月１０日　・・６３
イリヨン・アム氷河　・・６３
ゴビの想い出　・・６６
７月１１日　・・６８
ナーダム祭　・・６８
広く美しい心の
モンゴルの人達へ　・・７３
７月１２日　・・７４
バイカル湖　・・７４
７月１３日　・・７６
イルクーツク～ウラン・ウデ
～ハバロフスク　・・７６
７月１４日　・・７６
ハバロフスク～新潟　・・７６
２１世紀の民族開放運動　・・７７
あとがき　・・７８

まえがき

干支も一巡以上続いた昭和の御代は終わりを告げて平成元年を迎えた。

忍び寄る老いの自覚は一年が実に短く感じる。老齢は治るあてのない病気、旅だけが年齢を忘れさせる私の友である。友のない人生のわびしさは太陽が雲に覆われた曇天のようで、今や旅の知識欲以外に何の欲望もない。

頼山陽の「蒙古来たる、北より来たる」と詠まれた名詩、「１２７４年の文永の役、８１年の弘安の役」「忽必烈（フビライ）の蒙古襲来」「亀山上皇、北条時宗（鎌倉幕府第８代執権）」など、戦前は小学校時代から神国日本の歴史を教えられた。歴史云々は別として毎年北九州地区にはビルマ戦線の慰霊に訪れ、特に対馬・壱岐の元寇の古戦場をたずねて以来、モンゴルは幻想の地、夢誘の旅路だと憧憬の的となっていた。

中国戦線に従軍し、９回に及ぶ訪中は中国の歴史に興味を抱かせた。その行き着くところは漢民族と異民族との葛藤の歴史、特に北方の騎馬民族・遊牧民族から満州民族との興亡・征服・衰運・崩壊であった。

私と大陸との出会いは半世紀を経過し、昭和１３年に北満州のチチハルに滞在した時から始まった。大興安嶺から遼々としたホロンバイル高原を望んで若い血潮は騒ぎ、ノモンハン事件は我が札幌・歩２５聯隊は甚大な犠牲を蒙り、幾多の英霊の眠る鎮魂の地はモンゴルとの国境だ。「去る者は日に疎し」と戦没者のことは日が経つにつれて忘れがちである。

モンゴルと云えば蒼い狼のふるさとが思い浮かぶ。果てしない曠野で草を食む羊の大群、荒野を疾駆する馬の群れに騎馬軍の雄叫び、彼等の放った矢のうなり、さまざまな北狄軍団の勇壮なロマンも、モンゴル草原で営まれた牧羊の生活が母胎となっていた。それにも拘らず蒙古の戦乱や英雄たちの史実は余り知られていない。

内陸アジアの想像に絶す自然環境の多様さ、山岳と草原と砂漠にオアシス、それにともなう生活の厳しさ、そして何よりも資料が残りにくい遊牧という生活形態のため、彼等は自らの生活の痕跡を自らの手で遺そうとしなかった。

体験は馬鹿でも利口にすると云われるが、今次モンゴルの旅は遊牧生活の実体を知り、零細な史料を深めながら新知識をひろめ、歴史に対する興味が一段と高まった。

出発当時の内外の情勢は、国内ではリクルート疑惑から竹下内閣は宇野内閣に更迭。国外では中ソ和解が緒についたものの、中国では民主化を叫ぶ学生蜂起から戒厳令が施行され、戦車までも繰り出した大部隊の乱射、引き続く弾圧処刑に思想の引き締め、列車爆破にテロ行為等と混乱の波紋が拡大中であった。

一方、ソ連に於てはゴルバチョフのペレストロイカ宣言以来、バルト三国の民族運動は遼原の火の如く拡がり、グルジョア共和国の暴動を始め中央アジア諸民族の対立、ウクライナの炭田等と大きな変動期を迎えていた。東欧もまたハンガリーはマルクス主義の破棄を宣言してソ連圏から離脱する雲行き、ポーランドの「連帯」は選挙で大勝を博し、ソ連の前途もイバラの道が続く脅威に迫られていた。

ロシア革命に便乗して真先に衛星国の第１号となったモンゴル人民共和国を、この情勢下に訪れたことは又とない機会であった。社会主義経済では繁栄がないと自覚する改革派と教条的保守派との執拗な闘争が時の流れと共に熾烈化する鯨波の中で、独立基盤の脆弱なモンゴルは如何に対処するか、誠に興味深いものがあった。

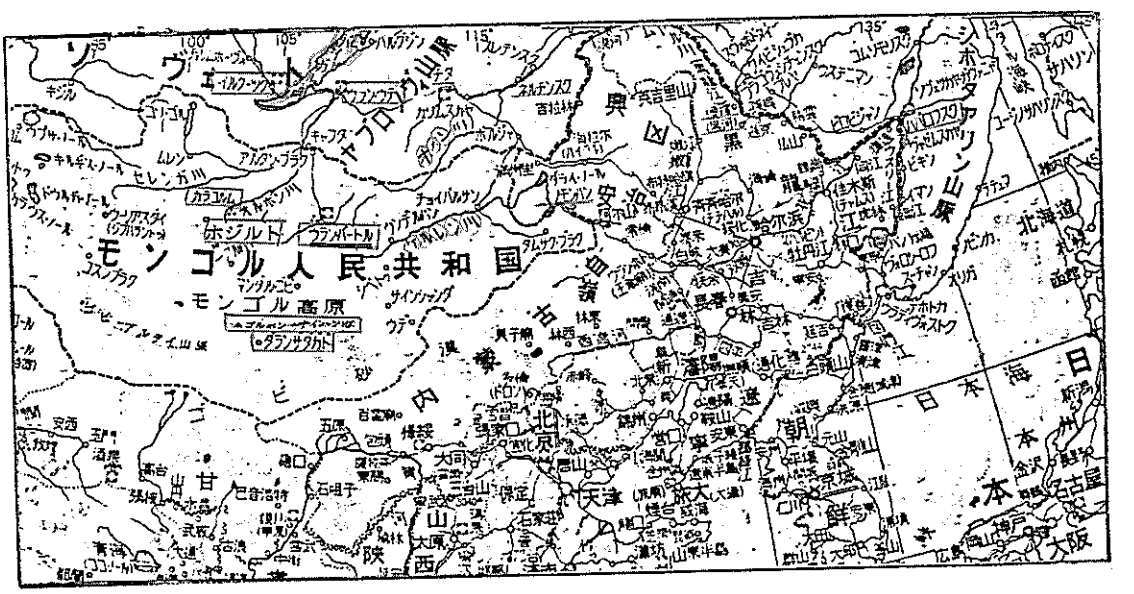
中ソの長期対立から正常化の歩みの中で、モンゴルの対中接近は紛れもない事実だが、更に南に位置する経済大国・日本への関心はモンゴル最大の焦点であろう。

１９７２年に我が国と国交が樹立し、１７年目にして初めて実現した宇野外相（当時）のモンゴル訪問（本年５月６～７日）は、彼等の期待は並々ではなかったという。日本の技術、経済力に学ぼうとする熱意は実に真剣そのもの、そこにはペレストロイカの為だけとは言い切れない。長期間押さえられて来たものを解き放つような思い切りの良さを感じた。恐らく今次動乱前の中国の日本への接近政策の成果に夢を馳せたのであろう。

昨年末の交通事故（フランス・マルセーユ）から体調は優れず、老いの木登りだと家族の警告も馬の耳に念仏、盲へびに怖じずと病身に鞭打って執拗に旅心をかき立て、思い立つ日が吉日とばかり旅立った。或る種の鬼気に似たものであったかも知れない。

平　成　元　年　７　月

（下図は訪れた地点を示す）



6月30日　（金）晴

新潟空港より日本海を飛翔

新潟空港はソ連一周旅行以来すでに１５年を経過し、歳月は駿馬の駆けるように素早く「年は塞ぐべからず、時はとどむべからず」の感がする。

モンゴル紀行は３社が企画して北京経由とソ連経由に分かれていた。丸腰の市民・学生に発砲した北京の民主化要求の動乱から、我国は中国経由の旅行を中止し、催行されたのはソ連経由の此のツアーのみ。予感が的中したのは僥倖であった。

週２便のハバロフスク行きの乗客は小さな空港を埋めつくしていた。ナオトカで開催される国際見本市に参加する１５０名は特別機で先に飛び立ち、引き続く我々のアエロフロート・ソ連航空ＳＵ６９６便も定刻の１５・００に悠翔の旅へと離陸した。

梅雨寒の薄黒い層雲を抜けると雲海は夏の陽に映えて眩しいほど白かった。何故こんな白い雲が空に浮かんでいるのだろうか。人間の力など及びもつかない造形の凄さ、眺めていても飽きない雲波は大変な芸術家だ。

アエロフロート機は国際線とはいえ我が国の離島航路よりも数段と劣悪だった。シートのクッションのバネは折損して非常脱出の説明書や地図もなく、スチュワーデスの呼び出しボタンもない。日本航空と同額運賃とは乗客を愚弄するのも甚だしい。軍事が凡てに優先して生活レベルの低級は一目瞭然、競争のない社会を如実に物語っていた。

一行１５名は数十回の海外旅行経験者ばかりで同気相求むという雰囲気が漂い、老年ほど素晴らしいものはないと云った顔付だ。未だ生きる墓石ではなく、人間は老衰死するまで若返る能力を持っている。老いを恥じること自体が老化の現われ、冬の訪れ始めた人生を美しく送るには、旅で心の調整をしなければ幸せになれない。

やがて八重雲の中に滄茫とした海がひらけた。澎湃とした海には艨艟（いくさ舟）の遊戯する影は見えず、居心地の悪い鵬翼から沿海州の陸地を瞰下すると、此の地方の数々の歴史が想起されて来た。

ウラジオストクとナホトカ

ウラジオは極東の最重要軍事基地だという事を知らない人はいない。昔、ロシアの本国から遠い此の地方をダーリニイ・ウオストークと呼んだが、日本人はそれに「極東」という訳語をつけた。

詳細は後に述べるが、ロシアは北京条約によってウスリー川以東の沿海地方の領有権を獲得、清国名を「海参威」といった一漁村をウラジオストクと改名し、太平洋進出の一大軍事基地として建設を開始した。

ロシア語でウラジェーチ（略してウラジ）は占領支配を意味し、ウオストクは東あるいは東洋を表わす言葉であったことから、東洋を征服しようとしたロシアの意図を明白に示している。

赤色ソ連の時代になって帝政時代の都市名が改められた例は多いが、対外侵略のイメージの強いウラジオストクは今も昔のままだ。それにしても此の港町を浦塩と呼んだ我々の先人の絶妙な翻訳力は大したものだ。

ウラジオの東南１００㎞のナホトカ（正確にはナホードカ）は日本海岸の天然の良港でシベリア鉄道の終点。第２次大戦中は米国の対ソ援助物資の揚陸地で、１９４７年以降は抑留日本人の帰国乗船地として一躍有名になった。ロシア語のナホードカは狩猟の獲物、あるいは戦いに勝って取得したという意味である。

これらの都市命名法がロシア人の侵略性、好戦性を示しており、我々日本人は末長く記憶しておきたい。敢えて此処に記述したのも其の所以である。

ウラジオは昔から日本とロシアの接点として漁業・貿易関係者の出向する人は頗る多く、革命前には在留邦人は３０００人に及び、領事館も設置されていた。

革命後の混乱で無政府状態になった時、日本は居留民保護のもとに１９１８年４月、先ず少数の海軍陸戦隊が上陸し、その後同年８月、陸軍第１２師団を派遣して増強した。また４月には英仏軍も上陸し、帝政ロシアの白衛軍が革命軍の労農赤軍と戦うのを支援した。即ちシベリア出兵である。

国内戦の混乱を克服した赤軍が極東で最優先目標に選らんだのはウラジオであった。現在、艦隊司令部を置くソ連太平洋艦隊は、数隻の空母と百隻以上の潜水艦を始めとして大小の軍艦は約８００隻に及び（全ソ連海軍勢力の４０％強）、極東各地に展開する陸・空軍の強力な支援のもとに日本海、オホーツク海、西太平洋全域ににらみを利かせている。我々日本人は平和の叫びに麻痺しているが、深く注意すべきだ。

近々の１９８６年７月、ゴルバチョフは極東視察の途時、ウラジオで重要演説をしたことは記憶に新しい。環太平洋諸国に対するソ連の外交政策全体に言及した大風呂敷と思われるが、ことウラジオに関しては「この港をアジア太平洋に向けて開いた窓にしたい」と述べ、軍事基地から産業都市への転換と外国人の立入禁止撤廃などと謳い上げた。これから注目して行きたい。

変化少ないハバロフスク

飛行時間は約２時間、アムール川（黒龍江）の雄大な流れがデルタを形成し、搭乗機は湖沼の多い悠然とした大陸の上空を旋回した。濃いグリーンの中に組を２本並べたような細長い滑走路が走り、梅雨前線から遠ざかったハバロフスクは２６°ｃの快晴であった。

諸外国の１５年の歳月は奔馬のように駆け巡って発展した。しかし此の空港は旧態依然として未だに前と変わらず、田舎の駅舎に似た建物は極東の玄関口には不相応だ。東南アジアの何の国際空港にも劣るだろう。それに加えて入国手続、税関通過に２時間もかかった事は少しの進歩も見られない。ベルトコンベアも受け渡し場所のない事がネックとなっている。

汚いうえに狭い空港にひしめく乗客は熱気に汗ばんで四苦八苦の状態、見るにしのびず若い米人に扇子を提供したところ、破顔一笑して米ソ友好のバッジが反対に贈られた。シベリア開発に協力する米人技術者であろうか。

一方、寸分も日本人と違わない人たちの多いことに驚いた。ソ連国籍の北朝鮮系の人々で此の点だけが国際空港と云えるかもしれない。１２０以上の民族からなるソ連邦は一握りのロシア人が権力を掌握し、民族対立から民族独立運動が台頭する事は避

けられない現象だと思いつつバスに乗車した。

市街に向かう白樺林は昔そのままで懐かしい。新設された剥き出しの配湯管だけが異様な景観であった。天然ガスの宝庫だけあって極寒地の家庭暖房用、石炭のペチカの代用であろうか。

記憶の糸をたぐっているとレーニン広場が見えて来た。広場の一角にある黄色い建物は前回宿泊したホテルだった。日本のセイコウ時計を売ってくれと執拗にせがんだ少年の顔を思い出す。カール・マルクス通りに入って鉄道線路を横切ると正確に記憶は蘇り、左側にあった古い映画館は改築されていた。

坂を下り左折してアムール河畔に新築されたインツーリスト・ホテルに旅装を解いた。部屋には故障したおんぼろテレビが臆面もなく飾ってあるのには驚く。トイレット・ペーパは前回茶褐色だったのものが白色になっていたのは進歩と云えば進歩だ。世界最大の森林面積を誇るにも拘らずトイレット・ペーパは硬くて粗悪品、革命から７０年も過ぎてなお身近な日用品でさえ満足に作れない現状であった。

食卓上は相変らずの黒パン、食文化の贅沢の中に日々を送る日本人には食べられたものではない。毎年農業の不振が続き飢えの問題が表面化しているという報道を裏付けしていた。

食堂の支配人であろうか、制服の胸に沢山な略綬（勲章・記章の略式なもの）を付けた東洋系の老人が私の席に近寄り、笑顔で話しかけて来た。樺太で日本語を学び、日本の大都市にも遊んだ話を自慢そうに話し、日本人に逢うのが楽しみの一つだと語っていた。

会話の途中から後ろの席にいた青年が酒を奨めてきた。節酒の厳しい国柄でもインツーリスト・ホテルは別格なのだろうか。いづれにしても一般庶民の人間性は国情を超えて変わらず、青筋を立てて対立しているのは権力者だけであろう。

時差の関係も考慮に入れなければならないが、北緯４８°のハバロフスクは白夜現象が明瞭に現われ、日の暮れるのは１１時過ぎであった。

西欧・ソ連の覇権侵略の過程

戦後我が国の満州、中国本部、南方への進出に関して国の内外から集中非難を浴びている。然しそれまでの世界情勢の認識が不足すること大であると云わねばならない。ソ連の東シベリア・極東に足跡する前に、西欧・ソ連の世界侵略の概要を述べてみる事は無意義ではないだろう。

１５世紀の都市国家ヴェネチア（ベニス）の東地中海における通商上の覇権が衰え、それに代わってポルトガルがアフリカ南部からインド、中国、日本に至る海洋覇権を握った世界帝国となった。ヴェネチアとの２０年間にわたる戦争に勝利したからだ。

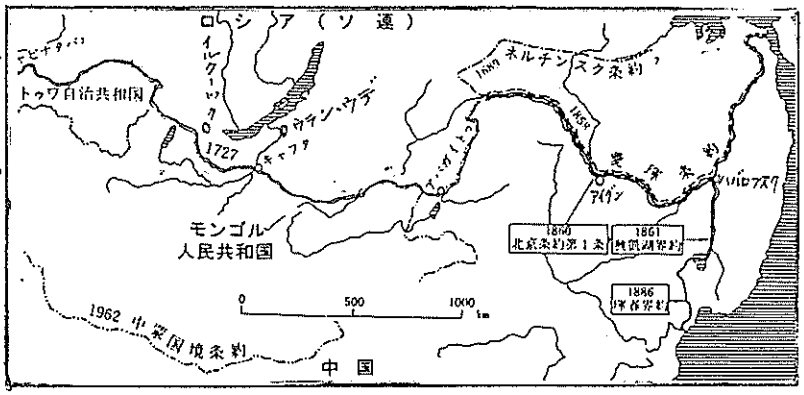
１６世紀後半になるとブラジルを除くラテンアメリカを植民地にし、メキシコやペルーからの銀の輸入によって巨大な富を築き上げたスペインが台頭し、１５８０年、スペインはポルトガルを併合して海洋覇権国となった。

しかしスペインが覇権国となったのも束の間、１５８８年のイギリスとの海戦に敗北して海上における覇権を奪われ、さらにオランダにおける独立運動が激化し、スペ

インはその鎮圧に失敗して急速に衰微した。
ここで台頭してきたのがオランダであった。オランダに幸いしたのは英仏がスペインに敵対的であったからで、オランダはスペインの貿易ネットワークを奪って栄えていった。アムステルダムを拠点にして地中海、北米、南米、東南アジア、日本に進出し、海上覇権国となって貿易を独占した。オランダも１７世紀に入るとフランスの挑戦を受け、対仏戦争に大きなエネルギを奪われて海上覇権はイギリスに移った。
イギリスは強大な海軍力を背景に海洋貿易を独占して、オランダとポルトガルの貿易ネットワークを吸収併合し、後にスペイン領ラテンアメリカとの貿易も独占、史上最大の海洋帝国となった。７つの海を制した強大な海軍力と、繊維工業を中心とした産業革命の成功によって永遠の繁栄が確立したと思われた。
しかしイギリスの覇権も１９世紀に入ると弱体化してきた。アメリカ、ドイツ、フランスなどが工業力でイギリスに追いつき始め、石炭と綿、鉄鋼と鉄道が世界経済を主導する産業になったからである。
２０世紀に入ると大陸で急速に台頭してきたドイツは、第１次、第２次大戦の２回にわたってイギリスの覇権に挑戦し、これでエネルギを使い果たしたイギリスは急速に没落していった。
戦後１９４５年、イギリスの覇権を引き継いだアメリカが覇権国として登場し、一時は永久的な覇権国のように見えたが、ソ連との冷戦が始まって国力の大きな部分を軍事費に投入、特にベトナム戦争以降は恒常的な財政赤字に苦しんでいる。

「シベリアがロシア領となった歴史的経過」
我々日本人は西欧諸国の東洋侵略の歴史には視野を開いているが、ロシア・ソ連の東洋侵略には概ね無知と云わねばならない。歴史は皮肉の連続だが眼を開いて北方ロシアの覇権主義に焦点を向け、過去を顧みて将来の極東戦略に資すべきであろう。
１５７８年から８０年にかけてシベリアの各地に残拠していた韃靼(ダッタン)人（タタールとも云う、南ロシア～シベリア西部のトルコ系種族の総称）や、蒙古人の領主が内紛によって勢力が衰えたのに乗じ、ウラル山脈に散在していたコザック（後記①）とロシアの猟師たちが義勇軍を組織して、ウラル東方へ遠征を企てた。
それにボルガ川（カスピ海に流れる川）の海賊までが部下を率いて加わり、これらの連合軍約１０００名が到る所の韃靼兵を破り、シビリ国（後記②）を陥れたのが１５８２年１０月２３日で、これがロシアの東亜侵入史の第１頁である。
我が国では本能寺の変があった年で、中国では清朝の始祖のヌルハチが挙兵した年の６年前であった。
①『コザックはカザークとも云う。キルギス草原（中央アジア）を本拠とするトルコ系の部族で回教を信奉し、強大な遊牧国家を形成して１６世紀末からシベリア開拓の先駆となった。帝政ロシア時代にはコザック騎兵として長槍集団の突撃で勇名を馳せた』
②『シビル国は１５５６年頃オビ河畔トボロスク附近（西シベリア）のシビルを中心にクチュム汗が建国し、これを８２年にコザックの長「エルマク」が征服して露帝イワン４世に献上した。このシビルがシベリアの名称の起源となった』
ロシア語のシビルは１６世紀まで西シベリア（ウラル山脈の近く）の一部を占めて

いたシビル汗国の名称に由来しているが、ロシア人の東進と共にシベリアという領域の概念も拡大した。



その後の通念としてはウラル山脈から太平洋岸までを指しているが、現在のソ連邦ではウラル山脈から太平洋側の分水嶺までを範囲とし、行政上は西シベリアと東シベリアとに分け、極東地方はこれに含まれていない。

当時、韃靼王として勢力のあったクチュム汗の軍隊は兵数ではロシアの数倍だったが、武器が弓矢だけであったのに較べロシア軍は火器を使用し、原始的ながら大砲まで装備していたため、我々の戦った大東亜戦争と同じく兵器の優劣が勝敗を決した。

コザックの長エルマクはモスコーのロシア皇帝に使者を送って勝利を報告した。それまで公式なロシアの軍隊でなかったが、ここで初めて皇帝は彼等を正規軍に編入し、続いてコザックの正規軍をシベリア各地に派遣した。

１６４９年にコザックの隊長ハバロフスクは、部下を率いて黒龍江とウスリー川との合流点まで侵入し、１６５２年に現在のハバロフスクを建設した。これがハバロフスクの起源である。ソ連ではハバロフスクを探検家と称賛しているが、実際はコザックを利用した極東侵略の第一歩であった。

当時ハバロフスクには先住民や中国民が住み、自国領だと思っていた清朝はロシアの侵略に驚いてロシア政府に抗議した結果、１６８９年バイカル湖附近のネルチンスク（漢名は尼布楚）で「ネルチンスク条約」を結んだ。（上図参照）

この条約は黒龍江から北の山脈をロシアと清国との国境と定めたものだが、清国の代表者は其の地方の地図を知らず、境界線は非常に曖昧なものであった。

後に実地踏査したところ黒龍江（アムール川）の北には山脈と云えるものはなく、結局、小興安嶺（黒龍江南方）が其の山脈に該当するとロシアが一方的に決めた。ロシア～ソ連の領土拡張主義の老獪さが窺われる。

後日の１８５８年１１月、黒龍江河畔のアイグン（漢名は瑷琿、現在の黒河）で「アイグン条約」を結び、黒龍江の北をロシア領とした代わりにウスリー江（ハバロフスク南方に流れる川、現在の国境線）以東を沿海州も含めて共有地としたのであった。この条約がロシアの極東侵出の基盤となった。

私が数回となく中国各地の歴史博物館を見学したが、清朝時代の地図ではシベリア～極東地域（沿海州一帯）は清国領として掲示され、この思想が今でも中ソ対立の遠因となっていることは確かである。

１８５６年１０月、イギリスやフランスによる中国への侵略戦争に抗議して、清国の官憲が英国旗を掲げた小帆船アロー号の中国人船員を逮捕した。イギリスは国旗が侮辱されたという口実で出兵し、これが「アロー号事件」である。

一方、広西省では仏人宣教師が殺害されて戦争は拡大し、広州を占領した英仏軍が天津に迫ると清国はこれに屈して５８年「天津条約」を結んだ。翌年、清の軍隊が批准使に発砲したことから再び武力衝突が起り、６０年に英仏軍に北京が占領されると清国は「北京条約」を締結した。（前頁地図参照）

清国内の太平天国の乱に加えて英仏との戦争に苦しむ時に乗じたロシアは、この調停の労をとった代償としてウスリー江以東の極東地域を割譲させ、共有地となっていた同地域を完全に自国領としたのであった。これが「琿春界約」で国境線を明確にした。まさに漁夫の利と云わなければならず、続いて満州、朝鮮半島に侵略の鉾を伸ばしたのである。（前頁地図参照）

膨大なシベリアがロシア領となった経緯は、以上の経過のようにそれほど遠いことではなく、アイグン条約や北京条約の締結は約１３０年前に過ぎない。東部シベリアの地域は昔から「粛真」あるいは「渤海」または「契丹」と呼ばれ、金、元、清の時代には明瞭に中国領であった。

ロシア～ソ連の南下政策、太平洋進出を目指す領土拡張の歴史を回顧すると、日本の遅い目覚めに慨嘆の思いがすると同時に、中華と自尊する中国の臍甲斐なさが悔やまれる。

このように燎原の火の如く白人侵略者の行くところ敵なく、アジア、アフリカ、中南米を席巻し、そこに住む有色人種は酷使され蹂躙されたのが１９世紀末までの世界の実情である。

我々日本人は白色人種のアジア植民地化は南方地域のみに眼を向けがちだが、ロシア・ソ連のアジア侵出は優るとも劣らず、我が北方領土の不法占領を考える上においても、彼等の太平洋侵出の歴史を知る必要は大である。更に中ソの現況に就いて若干記述してあく。

中ソ和解と日本

今次旅行の主目的はモンゴルである。モンゴルは昔は中国領土の一部、そして現在はソ連圏最初の衛星国となって６８年も経過した。険悪だった中ソは出発の前月に和解が成立したが、このことはモンゴルにとっても重大な関心事であろう。

ゴルバチョフの外交政策　は、アメリカ及び西欧諸国との関係に就いては相当の成功を収めたようだ。一方、アジア・太平洋地域諸国との関係が残されており、５月の中ソ和解に一歩踏み出した。

書記長就任後まもなくウラジオストクで行った演説で何よりも強調したのは、ソ連がアジアの国家であるという主張であった。古いヨーロッパ・ロシアには、ソ連に新しい力を与える何物もない。今この国の必死の窮状を救い得るものはアジア・太平洋の他にないと言うのであった。とりわけ現在のソ連にとって必要なものは、日本と大韓民国の高度な技術と巨大な資本なのだ。

しかし日本、韓国への接近に何よりも妨げとなっていた事は、中国との３０年に亘る厳しい対立であった。その中共を再びソ連側に引き付けることがソ連の明日を決定する大問題なのである。国の興廃を賭けた中国との和解復活の為に、書記長自らが中

国を訪問したのは５月１５日から４日間で旅行の前月であった。

中国では胡耀邦の死去に伴う民主化運動で学生が天安門広場を占拠し、５・４記念日も重なって１００万人のデモにまで発展した。加えて動乱に基ずく権力闘争と戒厳令下の北京での両国首脳会談は、相互の心中は穏やかでなかったと推察する。

両国首脳が一堂に相会して会談するのは１９５９年９月のフルシチョフ・毛沢東会談以来だ。毛沢東時代から幾度かの深刻な不信があり、中ソ国境に最近まで展開していたソ連の軍事力の存在は、それを如実に証示している。

またアフガニスタンからのソ連軍の撤退が中ソ接近の重大な機縁となったことも明白である。ゴルバチョフのアフガニスタン撤退の背後には、中ソ国交回復の深刻な願望と決断があったと云わねばならない。

このような世界情勢の中でホメニイのイラン革命以来、あらゆる術策を弄してソ連陣営への獲得に翻弄した中東もソ連の満足する結果に至らず、明日の活路はアジア・太平洋地域の他にないと判断したのであろう。

その一つに例えば中国の経済特区に類似した「特別合併企業地域」を、ソ連極東地区に特設するというものである。この設置地域としているのは極東シベリアのナホトカ港を中心とする沿海地区だ。さらにウラジオストクの北の中ソ国境に沿ったポクラニーチヌイ地区、北朝鮮との国境に接したハサン地区で、シベリア地域共同開発の呼び掛けである。

以上のことが我が日本及び韓国に対する明らかな呼び掛けである事は言を俟たない。しかしゴルバチョフの対アジア外交が、共産主義諸国の激しい反撃と批判を浴びていることも事実だ。昨年のソウル・オリンピックでは北朝鮮は不参加だけでなく、あらゆる妨害工作を施し、キューバも不参加と共に、ソ連及び東欧諸国の韓国接近に厳しい眼を向けている。

国際政治の焦点がいよいよアジア・太平洋地域に指向されている今日、我が国も中ソ和解・接近の動きを常に注視しなければならない。

ハバロフスクの概要

ソ連のシベリア開発の東部拠点でアムール川とウスリー川の合流点に位置している。

１７世紀にロシア人が初めてアムール河畔に進出した時、１６５１～５２年にハバロフが此の附近に堡塁を建設した事がある。しかし８９年のネルチンスク条約によって、アムール川の流域地方が清国の領土と決定されたのでロシア人は引き上げた。

１９世紀に再び此の川の沿岸にロシア人の植民が開始されると、１８５８年に現在のハバロフスクの位置にロシアの哨所が建設され、ハバロフの名を記念してハバロフカ哨所と呼ばれた。この哨所は８０年にハバロフカ市となり、沿海州の役所は此処に移り、８４年以降、新設されたアムール沿岸地方総督の駐在地となり、９３年に現在の名称ハバロフスクに改名された。

第１次大戦末期の１９１７年１２月には此の都市にもソビエト政権が樹立されたが、翌１８年（大正７年）８月から日・英・米・仏などによる連合軍のシベリア出兵が行われて此の政権は崩壊し、ハバロフスクには同年９月から２０年９月までの間、日本

軍が駐留した。

其の間に緩衝国として極東共和国が２０年４月、バイカル湖東方のウェルフネ・ウジンスク（現在のウラン・ウデ、７頁地図参照）を首都として成立したので（首都は１９２０年１１月にチタに移転）、ハバロフスクは極東共和国に編入したが、２２年１１月に極東共和国は廃止され、ハバロフスクを含む全土がソ連領となった。

第２次大戦後はソ連極東における重要な工業都市となり、水、陸、空の交通の要地となった。交通上の要地と共に中国との国境に近いことから、軍事上の要地としてソ連極東軍管区の司令部も置かれている。

第２次大戦後の日本人捕虜収容所が市の内外に設置され、其の司令部のあった事は我々日本人の忘れる事の出来ない地の一つである。

「ハバロフという人物」

１７世紀のロシア人のシベリア探検家と云われているが、詳細は前記した通りだ。生没年は不詳。１６３６年からイェニセイ、レナ地方に移住し毛皮商として産をなした。４９年にアムール地方の探検に出発し、レナ川とアムール川を結ぶ最短路を発見して翌年ヤクーツクに帰還した。

同年再びアムール川流域に赴いて拠点を建設し、下流してウスリー川の合流点のアチャンスク（漢語は烏札拉）に堡塁を建設した。これが後日のハバロフスクの起源であり、１６５３年、罪を受けてモスコーに護送されている。

7月1日（土）晴　ハバロフスク観光

９時から黒パン、ヨーグルト、エッグ、コーヒの不味い朝食をとり、１０時から市内観光に移った。社会主義国の旅行は計画通りに進行しないのが常識で早速第一発が放たれた。即ち午前イルクーツクに行く予定の飛行機は、イルクーツク空港が昼間拡張工事のため使用できず、夜の２３・３０発に変更になった。先進国では考えられないことである。

市内観光は前に訪れたこともあって意欲の湧かないまま随行した。先ずコモソモール広場（青年同盟の広場とか赤の広場の別称がある）であった。星のマークを天辺にのせ、下にソ連独特の労働者、農民、兵士の像が並び、この塔の立っている台上からアムールの大河を瞰下した。

隣接した新栄光広場は１９８５年９月に新設されたもので、幅５０ｍもある横に広い大慰霊碑が建っていた。中央にソ連国章と永遠の灯火、両側に独ソ戦で戦死した２０万人にも及ぶ戦没者名（ハバロフスク出身）を刻んだ黒い碑石、それに男女高校生の正装に身をかためた衛兵姿が我々の眼を注目させた。（右の写真）

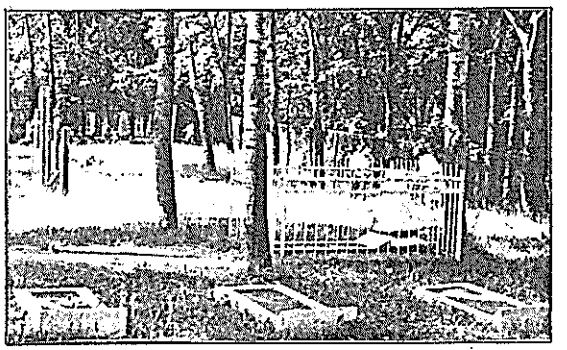
国の為に尊い生命を捧げた戦没者に対する敬虔な姿は誠意に帰依するもので、我が日本国民も見習って欲しい光景であった。慰霊すなわち軍国主義という一部の思想

は断じて肯定できない。
戦没者の慰霊追悼は人間自然の普遍的情感であり、国家及び其の機関が国民を代表する立場で行うことは当然だ。ソ連国民の熱誠溢れる仰慕の赤誠を目前にし、日本国民の戦没者に対する心に慟哭しながら立ち去った。
つづく旧栄光広場にも１９７５年に新しく建立した高さ約２０ｍのオベリスク（方形の尖塔）が立ち、独ソ戦の英雄たちの名前を刻んで功績を称えていた。塔の周りに小さな朝顔の花が咲き乱れていた光景は、何時までも網膜に刻まれている。
アムールの流れを見下ろす広場に赤や緑の旗を立てた数百名の若い女性が一角を占めていた。卒業式を迎えた女子高校生が慰霊塔に集り、無事に卒業が出来たのも戦没者のお陰だという感謝の集会で、何と健気な気持であろうかと眼を潤していた。
案内するインツーリストの通訳はウラジオストク大学出身者であった。前回訪れた時の通訳も同大学日本語学科の女性助教授（現教授）であったが、詳しく会話を続けるうちに彼は彼女の教え子であった。前回は帰国後に御礼の品を届けたこともあり、懐かしさのあまり通訳に名刺を渡して彼女に伝言を依頼した。
アムール河畔と別れて市の中心レーニン広場に行く。正面にレーニン像と赤い国旗を掲げた共産党本部、その右側に前回宿泊したホテル、広場の両側は共産党学校や医科大学、広場中央は大噴水塔となっていている。
何れの国でも国旗は国民尊敬の的となっいるがソ連では其の意識は特に強く、我が国の国旗掲揚問題で横槍を入れる風潮を嘆かわしく思いつつ眺めていた。
広場を後にして郊外にある日本人墓地に参詣することになったが、これを企画した旅行社に敬意を表したい。参拝の記事は別に一項を設けることにした。
墓地からの帰途、ハバロフスク駅前広場に立ち寄った。ハバロフスク～モスコ間の所要日数は６日間と説明されたが、列車や線路の劣悪もさることながら矢張り大陸は広大だ。広場中央に町の創設者のハバロフの像があり、小さなロシア正教の教会が建っている目抜き通りは、土曜日とあって賑わっていた。
甘い物に蟻が群がるような買物行列が眼に留まった。前回訪問したとき以上の長い行列である。今年末までに殆どの物資が配給制になるという新聞報道は誇張ではなく、現実にその現象を目撃したのであった。
米国の２・３倍もの財政赤字を抱えるソ連では、紙幣増刷で穴埋めしようとしてインフレを煽っていると云った記事を想起した。ソ連人は国外を見詰めるよりも足元、つまり国内に眼を向けたがる傾向が強烈で、物資の不足が国内騒動の一端であることを見せつけていた。
ソ連や共産圏諸国にも潮の流れが変わって新しい時代の大波が押し寄せ、特に豊かな生活と人間の自由は自然の摂理、避けて通れない運命だと感じながら午前の観光は終了した。
昼食後、ホテルの横手に建っている民族博物館の見学となった。私の脳裏には正確な記憶が刻まれていた。黒龍江に棲息する５ｍもの大魚やマンモスは特に注目に価する。原住民の生活用具から各種の鳥獣魚類が数多く展示され、シベリアに興味を持つ者にとっては貴重な博物館と云えるだろう。
博物館の裏手にはアムール川を眺望する展望台が新設され、川辺に沿って遊歩道が延々と続き、遊覧船や連絡船の発着場は昔のままの姿を残していた。酷寒の地だけあ

って短い夏の水浴を楽しむ群衆は岸辺を埋めつくし、娯楽施設の少ない此の地方では映画と水浴だけが大衆娯楽である。しかしながら大河特有の汚い水質では、日本人はとても水浴する気になれないだろう。

「日本人墓地」

墓地に向かったバスの中で混濁とした陰気な風が私の胸を吹き抜けた。敗戦後の息の根も絶えようとしていた我が同胞を有無をいわさず拉致して、生ける屍というような惨鼻きわまる重労働を強要し、氷雪の曠野で鬼籍に入られた方々のことを思うと、どうしてもソ連とは埋められない断層を感じるのであった。



白樺の林の中にひっそりと眠られる墓地は鉄柵で囲まれ、霊苑中央のコンクリートの小さな墓石に「日本人墓地」と刻まれていた。（上の写真の柵の中）

添乗員が持参した線香を各々が墓前に供えて合掌し、衷心から慰霊の誠を捧げて御冥福をお祈りした。この日本人墓地の参拝だけが通過したソ連での唯一の銘肌鏤骨の地となり、誠に嗚呼悲しい哉であった。

墓石の両側に５０体ばかりの個人の霊を祀った墳墓（上の写真の長方形）があり、墓地の鉄柵の周りには個人名を刻んだ墓石が並んでいた。人の訪れることもない霊苑に、異国の可憐な草花が霊を慰めるように咲いていた。忘れられない光景である

終戦時の国際俘虜協定及びポツダム宣言では俘虜の強制労働は禁止されていた。私なども苦役に就かずビルマから帰国した体験者の一人だ。しかし悪質なソ連は此の国際協定にも参加せず、ポツダム宣言をも無視した。自国の復興に無償の俘虜を酷使した歴史は悲惨きわまり、他国民の生命を紙屑同然と思っていたのだ。歴史の悪戯とは断じて言わせてはならない。

無理が通れば道理が引っ込むという諺があるものの、我々は理の通らない禍根は永久に忘却の彼方に追い遣ってはならず、誰が人の舌を押え人の口に戸を立てられようか。ソ連の現政権に反省を求めることは木に魚を求めるに等しく、怨み骨髄に徹す心境であった。

幽明、墳墓は異境の地にあっても霊魂は彷彿として一掬の涙をさそい、「弔え殉国の霊」と万斛の胸中に思いを遣りながら墓地を去ったのであった。

墓地を参拝して戦争を回顧する時、次のような事が頭の中に浮かんでいた。

学問のある馬鹿は無知な馬鹿よりもっと馬鹿だと言いたい。戦争という愚行は殆ど学問のある人達が始めたことで、世界の為政者は絶対に戦争に訴えてはならないと、声を大にして叫びたい。

また侵略の責任が侵略者にあるとする場合は、侵略者が負けた時だけに課せられる認定で、侵略者が勝利した場合には其の責任が課せられない事を忘れるべきでない。

ハバロフスクを発つ

前記したようにイルクーツク空港の拡張工事が昼間の発着を禁止しているため、出発が２３・３０となってホテルで待機していると、榎本武揚や福島中佐のことが思い出された。

ハバロフスクからアムール川を経由しシベリアを通過してロシア、ヨーロッパに行くには、１９世紀末にウラジオ～満州里経由のシベリア鉄道が貫通するまでは、日本人はアムール川を利用した。

著名な人としてロシアと千島・樺太交換条約を締結し、明治１１年に西から東へと船で此のルートを通って帰国した榎本武揚。明治２６年の冬、アムール川の氷上を騎馬で西から東へと旅をした福島中佐のことは有名で印象深いことであった。

白夜の影響を受けて２２・００にホテルを発つたバスは、白昼を通るような明るい街道を走った。珍しいことに木製の樽を造る工場が見えていた。昔のようにセメントを木樽に詰めるのか、或は禁酒節酒の酒を詰めるのだろうか。森林資源の豊富な此の地方では木製品の加工が盛んで、現在の日本では拝見出来ない木樽は奇異な物だ。

１５名の我々一行が乗車したバスに４名の青年が乗車した。彼等はブリキのようなバンドの腕時計をはめたアルバイト学生のようで、我々のトランクの積降しに同乗してきたのだった。一人で充分役に立つものを４名も就役させることは、労働力の過剰か就職難なのか。荷役設備のない空港は中国以下の感じがする。物珍しいことだが、双発のプロペラ機は定刻の２３・３０に飛翔してウラン・ウデに向かった。

7月2日 （日）晴 ウラン・ウデ （2頁地図参照）

１時間半の飛行の後、０時（時差の関係による）にバイカル湖の東のウラン・ウデ空港に着陸した。ハバロフスク～イルクーツク（バイカル湖西岸）間は約２時間の短距離に拘らず、此処で乗り換えることは一般に考えられないことだ。ソ連国内航空の貧弱と不便さを物語り、これでは先進国に仲間入りするのは遠い将来の事である。

外人用待合室に案内された揚句、イルクーツク便は何時になるか不明のため、仮眠するように告げられた。少々のことは仕方がないと諦めていたが、３時間を経過し５時間が過ぎても何の音沙汰もない。連絡の不誠意とサービス精神の欠如、虐待に似た無責任さは世界最低で、数多くの海外旅行でも初体験だ。全く航空行政が無いに等しいと言わなければならない。

熟睡できない仮眠はやがて空腹を訴えて眠るに眠れない状態が続いた。８時間もの間、待合室に釘付けにされて漸く茶の接待があったものの、未だ出発時間は不明だと言うばかりでなく、交渉相手のインツーリストの係員も不在だ。当然ホテルに案内して休憩させるべきである。共産圏の現状は斯くの如くで忿懣やる方なし。

１０時間を経過した午前１０時、添乗員の強硬な交渉の結果、簡単でお粗末な朝食が出されたが人命上当然だ。しかし依然として出発時間の案内はなく、外国人観光客を何と心得ているのか。声を大にして世界に訴えなければならない事件である。

待つに待つこと１３時間、漸くイルクーツク便は１４・００に出発すると告げられた。無告のまま延々１４時間にも及ぶ乗り継ぎ時間はギネス・ブックもので、ソ連という国は腑に落ちない謎の連続であつた。

ウラン・ウデの市街は空港からは全く見えないが、地図上ではバイカル湖の東岸に位置し、１６６６年にコザックの冬営地として創建され、旧名をヴェルフネ・ウディンスク（１９３４年まで）と称し、現在はブリヤート自治共和国の主都である。

ウラン・ウデで特記すべきことは、１０頁に記載したようにシベリア出兵の際に日本軍は此の地に進出して、傀儡政権（極東共和国）を作る野心のあった歴史があったことだ。私の身内の人もシベリア出兵に参加し、次ぎに出兵の概要を記す事にした。

シベリア出兵の概要

ロシアの社会主義革命を圧殺するため、１９１８年（大正７年）から数年間に渡り、日、英、米、仏の各国がシベリアに出兵して交戦した事件である。

英仏はロシア革命の成功の直後から、日本をシベリアからロシア革命に干渉させて圧殺すると共に、対ドイツ東部戦線で日本を旧ドイツに代わらせようとした。

しかし日本はロシアの混乱に乗じて東部シベリアを占領し、バイカル湖以東に傀儡政権を樹立し、それによって北満州と蒙古を勢力下に入れようとした。しかし日本は英米仏の同意なしにシベリアに出兵する自信はなく、北満州を根拠とする反革命ロシア人を援助し、１８年１月にはウラジオストクに軍艦２隻を派遣して情勢の熟するのを待った。

アメリカは対ソ干渉には積極的であったが、シベリア干渉の成果を日本に独占されるのを恐れて、当初は日本のシベリア出兵に反対した。しかし社会主義に対する共通の憎悪が諸国を妥協させ、日、英、米、仏は１８年７月、総兵力２４、８００人、うち日本軍１２、０００人の連合軍を極東シベリアに出兵する協定を結んだ。

８月２日、日本政府はアメリカの提議に応じ、シベリアにいるチエッコ軍の救援のために出兵すると宣言し、協定された兵力をウラジオストクに送った外、ザバイカル（バイカル湖南方）方面に２ケ師団を送り、その後も増兵して７３、０００人の日本軍が東部シベリアの全域を占領した。軍司令官は大谷大将である。

しかし１９年１月から極寒のシベリアで日本軍は、住民の激烈なパルチザン闘争に苦しめられ、交通の要地を死守するだけで安定した反革命政権の樹立は出来なかった。一方、アメリカ軍との現地における対立も増大して行った。

１９年秋には連合国が押し立てていた反革命のコルチャック政権は赤軍に破られ、干渉の失敗は明白になった。

又、アメリカ国内にも干渉反対の闘争が高まり、２０年１月、アメリカが先ずシベリア撤兵を声明し、同年６月までには日本以外の諸国はシベリアから撤兵した。

日本は居留民の保護、自衛、シベリアの交通の自由保障などの口実のもとに、反革命政権樹立に狂奔した。また２０年５月、ニコラエフスクで日本領事らがパルチザンとの休戦条約を破って殺され（尼港事件）、その報復と賠償の補償として北樺太を占領した。

１９２２年６月、日本政府はシベリア撤兵を声明したが、此の戦費は当時の金で１０億円、死者約３、０００人に及び、全軍の３分の１は凍傷にかかったという。時の首相は寺内正毅であった。

イルツーツク

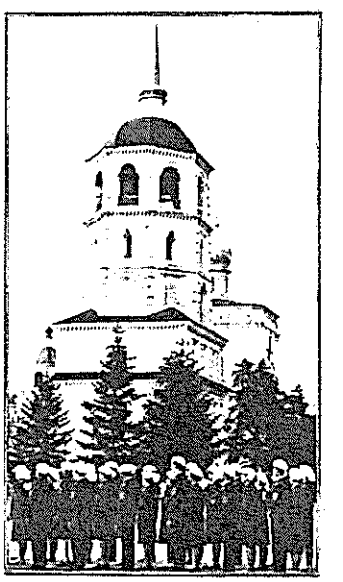
１４時間という不愉快な時間を浪費したウラン・ウデを１４・００に飛翔すると、古ぼけたプロペラ機の窓から澎湃としたバイカル湖が、山間に浮かぶように拡がっていた。湖に流れ込む数条の川が深い渓谷をつくり、平野のない湖畔は疲弊して豊かさが感じとれない。流刑地となっていたシベリアは今もなお其の面影を留め、漸くにして１４・５０にイルクーツク空港に降り立った。（気温は１９°Ｃ）

イルクーツク空港は工事のため昼間の発着は禁止と告げられていたが、真っ赤な嘘で愚弄するのも甚だしい。腹立だしいこと限りなく怒り心頭に達した揚句、眼鏡を機内のポケットに置き忘れてしまった。視力聴力の低下した今日、生活圏をますます狭くするが後悔先に立たずであった。

市街にに向かう街道は青葉の繁る並木で覆われ、珍しいことに樹木は全て「柳絮」の木であった。柳絮の綿の実が風になびいて宙に舞う姿は雪が舞うようで、風雅な景観は中国河南省以来のことである。河南省では４月頃が花盛りだったが、緯度の高い此処では今が盛り、水を得た魚のように漸く元気を取り戻した。

「柳絮の才」という言葉は女子の文才をほめる語となっている。中国の劉儀の慶世説に「白雪の紛々として降る状態は何に似ているか」と云う公の質問に対し、道蘊という女の子が「柳絮の実（綿状のもの）が風に舞うが如し」と答え、公が悦んだ故事に由来している。

バイカル湖から西へ６６㎞の此の町は人口約６１万、アンガラ川とイルクート川の合流点にある。この合流点を利用した人造湖に面し、風光明媚な湖畔にインツーリスト・ホテルが建っていた。



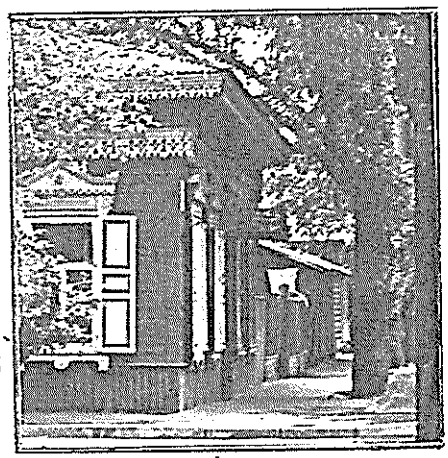
小休止の後、早速市内観光に移った。共産党本部のあるオロフスカヤ広場を通過して聖セビヤ寺院、エビパニ教会、カトリック教会、ズナメンスカヤ修道院、スパスカヤ教会と、外観を眺める教会巡りであった。

女子大学生アルバイトの英語通訳は簡単に説明するだけで、少しも大脳に反応せず、教会内部を案内しない観光は問題にならない。バスに乗った時間つぶしの申訳的な観光に過ぎなかった。

ソ連国中で見られる高校生の衛兵姿はエビパニ教会広場でも亦、拝見させられ、（右写真）帰路に赤色のピオニル・オペリスクに立ち寄って、忿懣の一日が終わった。

予定では本日バイカル湖の見学となっていたが時間がなく、踏んだり蹴ったりの目に遇わされて、お茶を濁されてしまつた。

7月3日 (月) 晴 愚弄されたイルクーツク



２４時に近い日没から午前４時前に夜が明ける白夜の床では深い眠りは望めない。朝の静寂を破る鳥の鳴き声に眼を覚まし、５時から市内の独り歩きに出掛けた。涼しい湖風にさらされながら柳絮の綿雪を頭にしてオロフスカヤ広場へと足を運んだ。

１６５２年に建設され、９８年に中国向けのロシア最初の隊商が出発したという市街は、古い町並みが続いて到る所に丸太組の家屋が軒をならべ、豊かな古都らしい情緒を漂わしていた。金沢市が姉妹都市に選んだことも宜なるかなである。

（右の写真は古い町並み）

１８０３年にシベリア総督府が置かれ、その後は政治犯の流刑地となったことでも有名な此の街は、１９１８年にチエッコ軍に援護された白系の白衛軍が占領している。

その後１９２０年にソビエト政権が成立し、その記念として広場に建立したレーニン像は、天に向かって右手を高く挙げていた。ロシア正教寺院の多いことも白衛軍の影響を残しているのであろうか。

流石に中心部のオロフスカヤ広場周辺は近代建築が並び、２条のトロリーバスが往き来して州都の威容を保ち、モスコ～ウラジオ間の要衝の街らしい感じがしていた。

散策が終わってホテル前の湖畔を望むベンチに腰を下ろすと、巨大な日輪がぽっかりと湖上に姿を現わしていた。神の手による創造の図を見ているようで、ソ連国内でも屈指といわれる透明度の高い空気を全身に吸い込んだ。

１９１８年に帰国するまで１１年間も此の街に居住していた都築小三治（写真家）の記事によると、日本語学校も開設されていたと書いてあったが、随分と古くから日本との交流があったようだ。

ロシアと千島・樺太交換条約を締結した榎本武揚や福島中佐の単騎シベリア横断でも、イルクーツクを通過していることは前記した通りだ。

ベンチに佇んでいると、１５歳前後の少年がドル・チェンジと声を掛けて来た。１５年前には時計との交換だったが、今ではドルや円との直接交換に変わっていた。交換レートはホテルや銀行の約３倍だ。少々の円を渡して交換するとペンダントまで提供するサービスぶりである。自国のルーブルは価格が下がる一方で、それだけインフレが進んでいる証拠であろう。

朝食後、午前の予定だったモンゴル行の便は午後４時に変更になったと告げられた。我が国の列車や航空便の正確さになれて生活をする我々には、腑に落ちないことの連続だ。結局は機数の絶対量が不足しているからである。

つれづれの暇潰しに一行は憤慨しながら街を遊歩した。早朝独り歩きした市街には見るべき所もなく、金魚の糞のように随行するのは辛いことであつた。しかしながら人生と云うものは人との出会いによって作られ、自分の歴史は自分が誰と出合ったか

によって綴られると思うと、勝手な振舞は許されないのである。
専ら市民の買物をする状態を視察することに重点を置き、独りでマーケットばかりを覗いてみた。並べてある商品は量も種類も少なく、食料品売場の長い行列はハバロフスクと変わらない。
市民たちには罪はなく誠に申し訳のない事だが、戦争末期に演じた濡れ手に粟のような、あくどいソ連政府の付けが、天の報いとなって現在の貧しい生活に現われている感じがする。苛酷な非人道行為は虎よりも猛しと言いたいのである。
昼食の時に添乗員は、午後のモンゴル行きの飛行機は欠航となったと告げ、望みの糸は切れてしまった。何んたる事であろうか。
荒唐無稽な出鱈目に怒りを発っした一行は喧々諤々の大騒ぎだ。ハバロフスクの出発の遅延、ウラン・ウデでは１４時間に及ぶ待ちぼうけ騒動、それにも増して本日の嘘八百の態度に業を煮やしたのは無理もない。
怒髪天を衝く勢いの有志が私の部屋に押し寄せて来た。インツーリスト及び此の旅行を企画した旅行社に対し、私が代表となって強硬に交渉してくれとの依頼だ。ソ連の不誠意と唯我独尊的な仕打ちに切歯扼腕する思いは、私も人後に落ちない心境だ。
然し乍ら冷静に考慮すると、インツーリストは学生アルバイトの通訳が連絡するだけで、右顧左眄するばかりだ。悪意に考えれば正社員では矢面に立たされるから、アルバイトを寄越したのであろう。
勿論、添乗員に抗議しても返答に苦しむばかりで、確答できる立場でもない。前回も体験したことだが、ソ連の縦割り行政では横の連絡は全くなく、木で鼻をくくったような返事しか望めず、挙げ句の果てには捨て台詞しか変え返ってこない現実だ。
ツアーの人達から抱腹絶倒するような珍案が続出し、飛行機の代わりに列車利用の案も飛び出した。寝台車の連結もなく所要時間４８時間では当然無理である。況してやバスの悪路２０００㎞の旅は同意出来ない。
旅行費用の一部返還と損害賠償を求める意見は全員の一致するところであった。しかし大学を出たばかりの若い女子添乗員では、旅行社を代表して確答する権限はなく、それは象が針の穴をくぐるような難事である。
結局、帰国する前に全員が協議を行うと共に、帰国後に旅行社と交渉するという案を述べ、熱り立つた一行諸君を納得させて隠忍自重を求めた。
忿懣やるかたない剣幕は一応沈静したものの、午後の時間を如何に過ごすかが問題となった。某氏の提案に応じて添乗員は湖上遊覧を交渉し、夕刻から船遊びとなった。
乗船してみると遊覧船ではなく、湖上に点在する島への連絡船に過ぎず、十数ケ所ばかりの船着場を回航するだけであったが、無聊を慰めるのには之しかないのだ。
大公望を楽しむ幾隻かの釣船、砂や砂利を採集、運搬する赤茶げたおんぼろ船、工場に隣接したアパート群の眺めは慰めとはならず、船上に戯れる幼児を抱きかかえる楽しみだけが、退屈を凌ぐ一時であった。
とっぷりと陽が西に沈み、街の灯火の灯油ランプがゆらゆらと揺れるように映る湖面も、旅の風情を味わう気分にはなれずに帰舘し、辟易する黒パンを噛って愚弄された一日は終わった。
誠意のないソ連よ、「奢る平家は久しからず」と云う日本の諺を参考に、大反省をすべきである。

7月4日 (火) 晴 歴史博物館 (イルクーツク)

今日は亡父の５９回目の正月命日であった。暁の湖畔に立ち東方に向かって合掌した。我が家では家族達が供養してくれているだろう。

朝食時の添乗員の説明では、イルクーツク空港の拡張工事（これは全くの嘘である）と、昨夜来の豪雨のためにウランバートル空港は発着に支障をきたし、本日の午後４時以降からしか使用できないと云うのであった。超乾燥地帯に豪雨がある筈はない。絶対機数の不足するソ連は沽券に拘ると思ったのか、出発延期の責任をモンゴルに転嫁した感じだ。

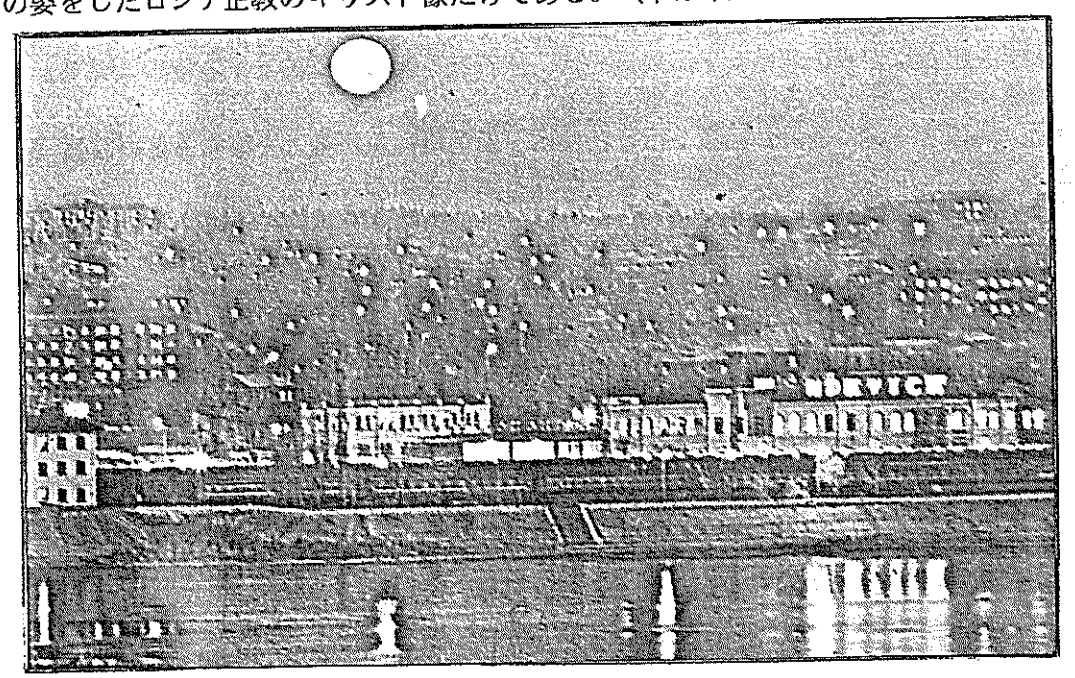
午前１０時から時間潰しのために、イルクーツク歴史博物館の見学に案内される事になった。封建時代から現今に到るまでの残忍性を残している陰気な町並み、過去と現在を同時に味あえる町並みを通過して博物館の前に立った。

玄関に向かったところ本日は休館だと称して見学を許さず、我々を小馬鹿にした態度であった。然し乍らソ連人の一団は堂々と入館していた。添乗員を通じて抗議すると、彼等一行は２日前から予約して許可されたのだと云う返答だ。

３日間にも亘る悲憤慷慨の虐待を続けておきながら、ソ連には臨機応変という言葉がないのか。アルバイトの女子大生の通訳では問題にならない。一事が万事、ソ連の人たちは働く意欲や融通性はなく、人間的な同情心も親切心の欠けらさえない。

喧々諤々の強硬な抗議に館長は漸く折れて、呉越同舟の形でソ連人一団の後に続いて入館した。

展示されたものは地方の博物館の域を出ず、当地出身者の絵画や彫刻、建築、出土品、鳥獣魚類、生活用具などが飾られ、私の網膜に残ったものは独ソ戦の絵と、独特の姿をしたロシア正教のキリスト像だけである。（下はイルクーツクの夜景）



イルクーツク～ウランバートル

昼食時に待望のウランバートル行が確定し、怒哮していた一行も漸く愁眉をひらいた。我々の今次旅行の目標はモンゴルであってソ連ではない。赤鬼や青鬼に見えたソ連に小突き廻され、イルクーツクに５２時間もの長時間、監禁同様の仕打ちを受けた恨みは骨髄に達し、筆舌に尽くせない開放感に浸っていた。

１８・４３に搭乗機は滑走路に進入してエンジンは全開し始めた。滑走路はコンクリートではなく砂利まじりの土の路面だが、プロペラ機の発着は可能だ。言を左右にした彼等の言い訳は飛行機の故障と推察され、工事をしている光景は全く眼に写らない。このことは前回も経験した時と同様に、旅客機の絶対量の問題で機数の不足が遅延の原因である。

飛翔すると眼下に巨大な堰堤が延びていた。第２次大戦後バイカル湖地域開発のために建設した水力発電所（出力６６万ＫＷ）である。バイカル湖から流れ出るただ一本のアンガラ川に１９５６年、湖尻から５８㎞下流にあるイルクーツク市に完成したもので、素早くカメラに収めた。

ソ連払い下げのモンゴル国営航空機のプロペラが撒き散らす騒音よりも、待ちに待ったモンゴルに憧れる胸の鼓動の方が強烈で、人生は天地の間を遠行する客のようだと感じていた。動物も草も木も大きく背伸びする季節を迎え、下界の放牧風景を瞰下する我が眼は応接に暇がない状態であった。

同じ血を分けた兄弟のような顔付をした隣席の人は、東京に留学するモンゴル人・国費留学生の「ツァガーチ・バークル・サイハン」君であった。昨日新潟を発って此の便に搭乗したことを聞くと、治まらないのはソ連インツーリストの不誠実だった。

笈を負って万里の道を遠しとせず遊学する彼と相好をくずして話し続けた。東京の日本語学校に一年間勉学して今春、東京電機通信大学に合格。両親と長兄は先生で次兄は技術者というモンゴルの知識階級の家庭に育った青年である。

流暢な日本語で語る中に、１３万円の支給額では生活が苦しいことを訴えていた。６畳一間の家賃が２３、０００円、食費も最低７万円というから大変だろう。我が国政府の一段の援助を望んで止まない。

日本に留学して先ず最初に感じたことは何かと尋ねたところ、間髪を入れず道路の狭いことだと答えた。日本の面積の４倍もあるモンゴルには、僅か２００万人しか住んでいない事を考えると当然のことで、大曠野のモンゴルでは凡てが道路と云ってよいだろう。

第２番目は人の多すぎることで、第３番目は教育水準の高いことだと答えた。日本の教育の成果は明治以来の１００年に亘る努力の結晶で、一朝一夕の事ではないと詳しく説明し、過去に栄光を輝かしたモンゴル人も、同じ東洋民族として再興を期待していると激励した。

会話が弾んで日本や中国の歴史から民族意識の高揚にまでも及んで熱が入り、久しぶりに若い青年と肌を接して快適な空の旅を続けた。

そして彼の読んでいたモンゴル新聞の第１面上段には、共産国らしく国章と革命の父と謂れる「スフバートル」の写真が掲載されていた。

赤い夕陽が照り映える大草原に細い短冊のような滑走路が見えてきた。嗚呼、とうとうモンゴルにやって来たのだ。知らない土地の生活が始まると思うと心臓の高鳴りは激しさを増し、旅は生きるために必要な活力を与える感動の源だと、全身の血で受け止めていた。

憧れ一杯のモンゴル、地平線に見えてくる遠景を小さな丸い窓から凝視しつつ、２０・０４に草原の滑走路に着陸した。

ウランバートル到着

古代中国で蛮夷戎狄と謂れた一つ、北狄の地に第一歩をしるすと、モンゴル国営旅行社の女性通訳（英語）「ナラ」さんが笑顔で迎えてくれ、日本人そっくりの蒙古人には温かい親しみを覚えるのであった。

草原の中の空港前にはコンクリート製の大きな国章が聳え、馬の群れが草を食み、草の上に子供が戯れ、長閑な光景は環境に変化が生じた感じがしていた。

草原に吹く風は驚くほど強かった。これを蒙古風と云うのだろうか。モンゴル高原の風を古来では「朔風（北風）」とか「胡砂吹き荒ぶ」などと描写され、黄塵は遠くハワイまでも飛んで行ったと言われている。何しろ６月に吹雪が吹き、８月に初雪が降るというから、我々では想像もできない気候だ。

黄塵万丈の蒙古風が吹き、日中でも不意に薄暮のような暗さになった北支那の戦場が思い出される。しかし大陸仕込みの私は老境に入っても大陸の生き方が好きである。蒸し暑い日本からみれば風は草の香りを運び、鼻から胸に吸い込むたびに心身が一新されるように、爽快な感じさえしてきた。

胸をときめかせて夢を馳せるようにマイクロバスは市街地へと疾走した。四方は緩やかに起伏した山に囲まれ、草原盆地の中を流れるトラ川の右岸に工場やアパート群が見えてきた。二千年の歴史をもつ海抜１３５１ｍの高原の此の町が、モンゴルの首都ウランバートルであった。

トラ川を渡った三叉路にはソ連軍戦車が高い台上に据えられ、睥睨するように威圧している光景に反感を覚えた。馬脚を現わす宗主国ソ連の衛星国に対する姿である。モンゴルに駐留する６５、０００人のソ連軍は近く４分の３を引き上げると声明したが、軍事は遊戯のような操り人形式であってはならない。

曠野の中に森閑とした市街のパノラマが拡がり、モンゴルの近代文化を集約した街に市民の姿が見えていた。我々と違った日常に生きてきた人達と出会い、彼等の新鮮な風を吸収したい喜びが体の中を走って行く。

「地の涯てから海の涯てまで旅を続ける旅は、危険と艱難に満ちているが、地上の珍奇な凡ての出来事が見られ、これほど自由で楽しいことはない。いつの世に生きても隊商を率いて世界を歩いてみたい」と誰が書いたか忘れたが、この旅心を思い出しながらバスは「バヤンガル・ホテル」に到着した。（本日の最高温度２０°Ｃ）

歴史を愛する者にしか歴史の美しさは判らない。モンゴルの各地を訪れる前に此の国の伝説や長い歴史の一端を私なりに纏めてみることにした。

蒼い狼の国モンゴルの伝説

「歴史は鑑なり」と謂れているが、有名な「元朝秘史」の冒頭にモンゴル民族の族祖伝承が次ぎのように記載されている。

【高天原に神命ありて、うまれたる「蒼き狼」ありき。その妻なる「白き牝鹿」ありき。大湖をわたり来ぬ。オノン川のみなもとのブルハン嶽に住いして、うまれたるバタチハンありき】と。

モンゴル民族の族祖は、蒼い狼と白い牝鹿から生まれたものと信じられたことは、此の民族にとっては大変な誇りであったらしい。

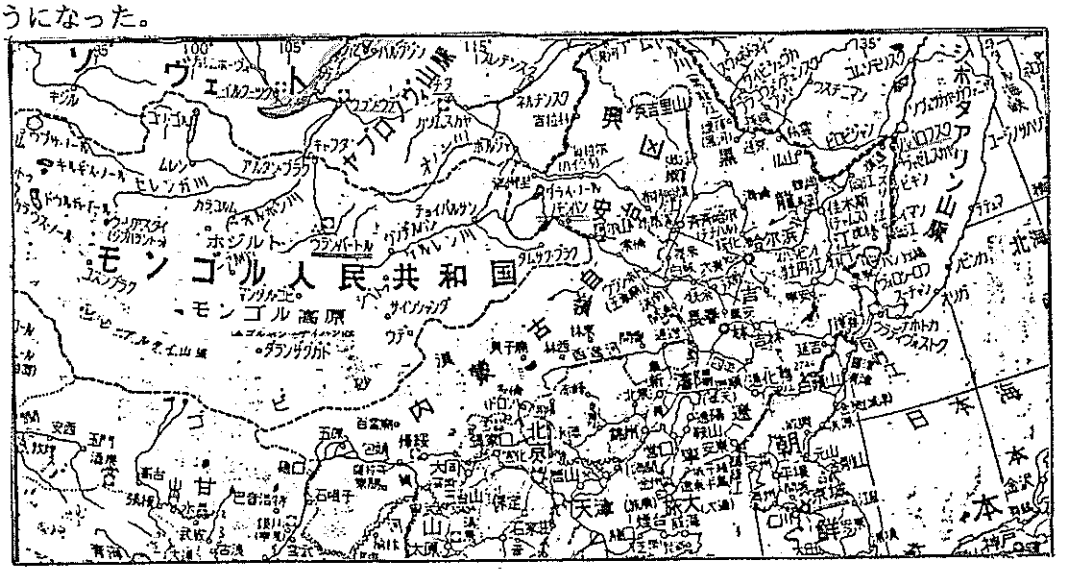
このようにモンゴル族は一体、何処から出現して来たのか、それは未だ定説を生むまでにはなっていないが、現在のシベリアのバイカル湖東部から、中国東北部の大興安嶺あたりにかけての大森林地帯に住み、半猟半牧の生活を営んでいたことは明らかなようで、中国史に登場する匈奴や突厥などの支配地域よりも、かなり北方にあって小部族をなしていたようだ。（下の地図参照）

蒙古の名称

もともと民族あるいは部族の名称であった。唐代の文献に「蒙兀」あるいは「萌古」などの名が見えているが、同じモンゴル系の契丹などに比べると、殆ど問題にならないほど軽く扱われていた。

そしてチンギス汗が出現するまでは、蒙古という名称は歴史上では余り知られていなかったのである。

地名としての蒙古地方は、中国では漠然と「北狄」と呼んだ諸民族が住んでいた所である。其の中にはモンゴル系もあり、トルコ系もあって、９世紀頃、ここにいたトルコ系の回鶻（ウイグル族）が西遷したので、モンゴル族の土地、地方と呼ばれるようになった。



モンゴルの歴史の概要

モンゴル高原はいわゆる内陸アジア、さらに広くいえば中央ユーラシアの東端をなす高原台地で、その中央に横たわるゴビ（モンゴル語で「沙漠」の意）によって内外蒙古に分けられている。この高原地域は天然の大牧地で、ここを中心として古くから多くの遊牧騎馬民族が遊牧国家を建設した。

遊牧民族は貧寒な草原に家畜を放牧して経済的に恵まれなかったが、騎射に巧みな騎馬民族として武力に優れていた。彼等は必需物資を入手するため農耕地域と交易を行い、或は農耕地域へ侵入、掠奪を展開し、また侵入地域に征服王朝を建設した。

モンゴル史と中国史との間の此のような複雑な絡み合いが、アジアの歴史の展開に大きく作用していた。さらにモンゴル高原の遊牧民族は周辺地域の文化を採り入れて之を東西に伝え、東西文化の交流に大きな役割を果たした。

このようなモンゴル高原に活躍した遊牧騎馬民族が、アジア或はユーラシアの歴史で果たした事を理解することは、蒙古人種（別称を黄色人種・アジア人種ともいう）の流れをくむ日本人として意義のあることである。

「古代遊牧諸国家の興亡」（前頁地図参照）

前３世紀頃の草原の歴史は陰山山脈（内蒙古から山西省）を中心に「匈奴（キョウド）」が遊牧していたが、その東に「東胡」が牧畜・農耕に従事し、また西方即ち西北モンゴル高原からタリム盆地（新疆省・天山山脈の南）にかけては「月氏」が、さらに北方には「キルギス（堅昆）」が遊牧していた。

１３世紀初頭、モンゴル族が歴史の舞台に躍り出る以前、モンゴル草原は多くの遊牧民族の興亡の場であった。前３世紀から後５世紀にかけて活躍したのは前記の通り匈奴に始まり、東胡、烏桓（ウガン）、鮮卑（センピ）、拓拔（タクバツ）（北魏）柔然（ジュウゼン）、突厥（トッケツ）、回鶻（カイグツ）、契丹（キッタン）（遼）など、トルコ系、モンゴル系、ツングース系諸族が盛衰を繰り広げた。

彼等はいつの時代にも対立抗争を繰り返し、周辺の群小部族を統合したものが草原の覇者となり、必ず南下して漢民族の農耕地帯に侵入するのが常であった。

秦の始皇帝は中国を統一すると（前２２１年）蒙恬（モウテン）を派遣して匈奴を攻撃させ、その勢力をオルドス（内蒙古南部から陝西省北部地方の名称）から駆逐して、西は甘粛省の臨洮（リントウ）から東は遼東に到るまで、万里の長城を修築して完成した。

然し漢時代に入って漢の高祖は娘の魯元公主（公主は内親王）を冒頓単于（ボクトツゼンウ）（単于は王・君主の意）の妻に送って（前２００年）和を結び、漢の元帝は前３３年に東匈奴の呼韓邪（コカンジャ）に後宮の王昭君を送って政略結婚するなど、匈奴の勢力におされて屈辱的な外交を結んだのは一例に過ぎず、北方騎馬民族の強力さを物語っている。

遊牧民族は東洋史の中でも常に悪者扱いにされているが、それは文字を持たなかった遊牧民族たちは、彼等自身の記録・歴史を一部の例外を除いて、書き残していないからである。

記録の全ては農耕漢民族によって遺されたものが正史として伝わり、一方的に掠奪されたと主張する立場、或は蛮族を征伐したという立場から書かれている以上、相手方の遊牧民の方が悪者扱いにされたのは必然である。

草原を舞台に興亡が伝えられた幾多の遊牧民が、その存在を自ら主張することが殆ど出来ない状態の中で、モンゴル民族が独立国家として民族の栄光を主張できたのは、チンギス・ハンによって統一され、画期的な帝国を築き上げた事であった。

チンギス汗を生んだモンゴル族は、オノン川とケルレン川（２１頁地図参照）両河の上流を遊牧地域とした小部族であった。チンギス汗は天才的な軍事統率力によって近隣諸部族を征服、統合した。それまで部族ごとに編成されていた戦闘集団を、能率的な機動軍団に改編したことは、彼の軍事的天才ぶりを如実に物語っている。

蒙古草原の制圧、統一からウイグル、西夏へと侵攻し、東西交易の隊商路を押え、長城を越えて中原に駒を進め、「金国」の首都であった燕京（北京）を陥落させるまでに１０年とかからなかった。（西夏は現在の寧夏回族自治区を中心とした地方）

再び中央アジアのホラズム王国（トルコ系王朝）を壊滅させ、帝国の基礎を揺らぎないものとした１２２７年の西夏遠征の帰途、甘粛省の酒泉の直ぐ東にある清水県で病死した。私も先年シルクロードを訪れた時に酒泉に宿泊し、チンギス・ハンの活躍を偲んだことが想い出される。

チンギス・ハンの孫で第５代の汗であった元のフビライは、２度にわたって我が国に来襲し、所謂、元寇の乱に就いては良く知られており、ここでは割愛する事にした。

「革命前のモンゴル」

元朝滅亡後のモンゴル族は各地に分散して統一以前の種族別に割拠した。時として我れこそはチンギス汗の栄光を継ぐ者とばかり、局地的に明朝に脅威を及ぼしたエセン汗、ダヤン汗、アルタン汗などの活躍もあったが、清朝の勃興期になると東部蒙古、内蒙古の順に清朝に服従していった。

残る外蒙古は西部オイラート蒙古族のガルダン汗と、外蒙古ハルハ族との抗争を巧妙に利用した清の康熙帝、乾隆帝の外蒙古親征によって、外蒙古は完全に清朝に制圧され、モンゴル族の遊牧帝国はその幕を閉じた。

その後は近代火器の発達とロシアのシベリア東進、清朝のラマ教優遇策を始めとする蒙古族の懐柔政策、漢人商業資本によって経済的に搾取された。

彼の勇猛を轟かしたモンゴル族も衰亡の一途をたどり、蒙古族自身も王侯貴族とラマ特権階級の搾取、清朝による異民族支配との二重苦のうちに、清朝崩壊から近代モンゴルへの誕生に向かって、陣痛の嵐の時代へと突入するのであった。

１９１１年の清朝倒壊はモンゴル民族にとっては、かっては自分等の先祖が服従した満州民族の清王室が崩壊したのであるから、服従以前の状態に戻ったと主張して外蒙古は逸早く独立を宣言した。（第１次独立宣言）

その後の１０年間は此の第１次モンゴル独立宣言国を支援する帝政ロシア、途中から赤色革命によって交替したソ連の影響、昔の通りに主権を主張して支配権の継承を実行しようとする漢民族の軍閥政権、既に満州に権益を確保して西隣の蒙古地帯の変革を好まない日本、革命直後のシベリアに干渉する反革命勢力（白系ロシアを支援する英米仏の外国勢力）などが取り巻いていた。

このような東アジアの国際環境の中で、独立したと主張する大蒙古帝国（皇帝は第８代チェツォンダンバ活仏）は、特に外蒙古支配を主張する中国軍閥の進出、巻き返しという混乱期を迎え、大きく揺れ動いた。

その間、民衆の信仰（ラマ教）の中心支柱として、いつの場合も何れの勢力からも利用擁立されていたのは活仏皇帝で、その皇帝の本質的体質は民衆への搾取を強めて行くばかりであった。（ラマ教・活仏に就いては後記する）

中国勢力の進出、後退、巻き返し、シベリアからの白色ロシア勢力の闖入など、其の混乱の都度、民衆への苛斂誅求という鐵寄せが激しくなり、モンゴル民族の独立の悲願が芽生えて浸透した。

この独立への秘かな動きは、二つの異なるグループからそれぞれ「スフバートル」、「チョイバルサン」という独立運動の指導者が頭角を顕わしてきた。

既にソ連の革命成功のニュースは、「ロシアが人民の国を作った」という単純化された形でモンゴル人に浸透し、極めて純粋に我々もソ連に援助を求めようという機運が醸成していった。

１９２１年３月、モンゴルの独立運動家たちが党を結成して名付けた名称は「モンゴル人民党」と云い、独立戦のために秘かに募集した軍を「モンゴル人民党義勇軍」と呼んだのである。

ソ連に要請した援助の返事を待つ暇もなく、１９２１年（大正１０年）３月１５日のキャフタ（売買城）に駐留する中国軍攻撃から独立戦争が始まり、４月にはソ連も正式援助を決定し、シベリアに闖入していた白色軍を破り、７月６日には庫倫（クーロン）（現在のウランバートル）に無血入城、７月１１日に独立を宣言した。

この時点でも依然として活仏皇帝を抹殺することは出来ず、新政府は「制限された君主」を持った旧封建勢力との共存という、苦しい妥協の新生モンゴル国を生み出したのである。

その事はとりも直さず、ラマ教を利用してモンゴル民族を支配操縦するという、清朝の歴史的政策の禍根の深さを物語るものであった。

「近代モンゴルの誕生」

モンゴルは日本の明治維新とも言うべき人民革命を１９２１年に経験した。この人民革命がモンゴル近代化の出発点であった。

日本の近代化は其の手本を欧米に求めたから欧米化の道を進んだが、モンゴルの近代化は誕生直後のソビエト政権に援助を求め、レーニンの指導を仰いだことからソビエト化を招いた事は必然的な帰結であった。

しかし民族性というものは一朝一夕に変わるものではなく、モンゴル人の伝統的な民族性や特質は不変で、近代都市の都会生活の中にも、或は草原の生活の中にも脈々として受け継がれていると信じている。

モンゴルの別名は「青い空の国」である。コバルト色の空は深く澄み渡り、草原の牧畜国家のモンゴル人民共和国は、近代化への力強い歩みを続けている。

それは何もなかった草原の後進的な封建社会から、資本主義の過程を経ずに一躍、社会主義の近代化国家建設への実験であったと言えるだろう。

「ソビエト・モンゴル同盟」

１９２４年モンゴルは、旧勢力との止むを得ない妥協として推戴していた活仏皇帝が死去すると、初めて本格的な社会主義体制作りに着手した。即ち１９２４年（大正１３年）１１月２６日に第１次憲法を採択して共和国宣言を行い、社会主義への移行を目指して反封建闘争を開始した。旧勢力の抵抗、内部粛清などのあったのは１９４０年（昭和１５年）にかけての事であった。

一方の中華民国は国内の騒乱に忙殺され、形式上は回復していたモンゴルに対する主権を行使できないまま１９３０年代に入り、３１年（昭和６年）には日本の満州への進入によって全く新しい情勢が現われた。

１９３４年１１月２７日（昭和９年）にソビエト・モンゴル同盟の協定が制定され、１９３６年３月１２日に同盟の条約がウランバートルで調印されて、ソビエト軍はモンゴル領域に進駐した。そして１９３７年（昭和１２年）には日本が中国へ進出したのであった。

ソビエト・モンゴル同盟は１９３９年５月（昭和１４年）、「ノモンハン」附近の国境線をめぐって日本軍と衝突し、同盟の効力を発揮したことは記憶に新しい事である。ソビエト・モンゴル同盟軍はジューコフ指揮の精鋭を擁し、主戦場をハルハ川の河畔に展開して９月１５日に停戦となった。私の原隊である札幌歩兵第２５聯隊の一部が此の戦闘に参加し、甚大な損失を蒙ったのである。（２１頁地図参照）

「独立宣言」

それ以降、ソ連のモンゴルにおける地位は確固たるものになり、其の立場は１９４５年２月１１日のヤルタ（黒海のクリミヤ半島）において英米に認められ、中国国民党も国民投票という面子を失わない方式で此の情勢を承認した。有権者の９８、４％が賛成投票を行い、反対票は１票も無かったという。４６年１月５日、中国国民党はモンゴルの独立を正式に承認し、２月２７日には新しいソビエト・モンゴル同盟が調印された。

１９５２年９月２８日、ツェデンバル首相は北京に入り、最初の公式訪問客として毛沢東に迎えられ、５４年７月３１日には周恩来首相がウランバートルを訪問したが、これも独立後最初の中国高官の訪問であった。

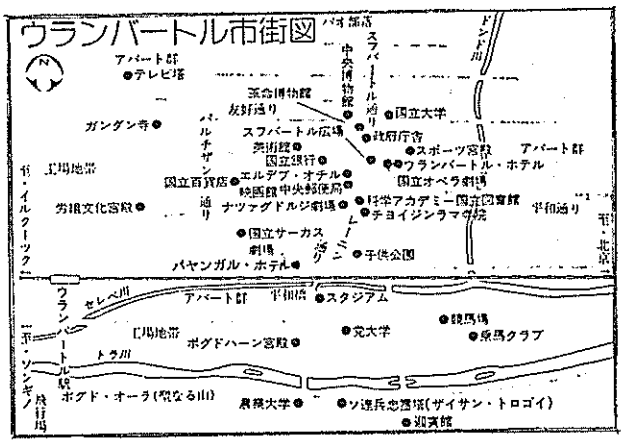
１９４０年に第２次憲法を採択し、続く１９６０年には第３次憲法を採択して現在に至っている。此の段階で社会主義建設の基本的終了を宣言し、共産主義建設の段階に入ったとしている。

この段階では従来認められていた生産手段の私有制は全廃され、社会主義的所有、即ち牧業、農業の協同組合または国営農場化が実施された。（資本主義の発生しなかったモンゴルでは工場は最初から国営である）

但し牧民に対しては家畜の私有制度も認められており、ゴビ地方では一世帯当り７０頭、ハンガイ地方では５０頭で、これらの私有家畜は国家総数の２０％だと云われている。

ソ連と中国との二大強国にはさまれながらも独立を達成したモンゴル人民共和国は、ソ連の伝統的な同盟関係を保持して１９６１年１０月に国連加盟が承認された。懸案の中ソの和解が成立し、次第に西欧化の波が押し寄せて行くだろう。

7月5日 (水) 晴　ウランバートル早朝の独歩



旅は昔から人間が持っている冒険心をかき立てるものだ。そして其の地方の風俗に溶け込むことが楽しみの一つでもある。

昨年末、マルセーユでの早朝の独り歩きで、思わぬ交通事故に遭遇したことも脳裏から離れ、取り返しのつかない事を忘れる者は幸せだと、市内に向かって独り散策に出掛けた。

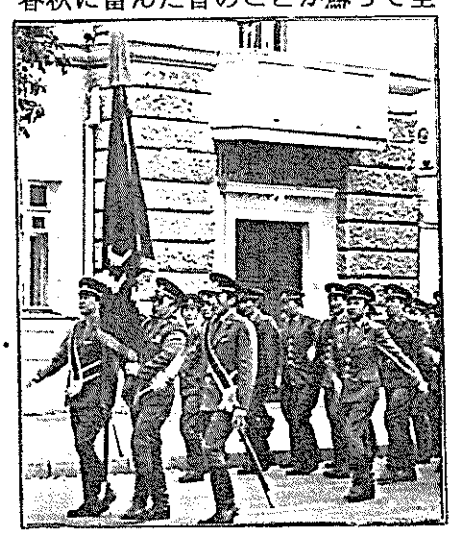
強風は遠くで奏でる軍楽隊の響きを運んで私を招いていた。気温１０°Ｃの爽やかな空気を吸い込みながら楽隊の音に引きずられ、心配は身の毒、寿命を縮めるとばかり脚を急がせた。

「犬も歩けば棒に当る」の諺の通り、モンゴル軍隊の行進する勇ましい光景が眼前に展開していた。１００名近い大軍楽隊の行進曲に歩調を合わせ、１ケ聯隊ばかりの歩兵部隊が隊伍堂々として分列行進中で、時計の針が逆回転して自分が閲兵台に立っているような感じで眺めていた。

旭に輝く軍旗を先頭に、略綬を着けた聯隊長は太い軍刀を腰に佩び、各隊の指揮官は「投げ刀」の敬礼をして行進し、兵隊は着剣した銃を垂直に立て、軍帽に黒の長靴の姿は凛々しいものであった。（下の写真は軍旗の行進）

彼等は国家の干城として其の烈々とした士気は天を衝き、軍旗のなびくところ一身を顧みず、塵と軽んじて弾雨の下をくぐり、墳墓の国を守らんとする気魄が私の肌に伝わってきた。

軍楽隊の奏曲に心は躍って骨髄の奥まで浸透し、春秋に富んだ昔のことが蘇って全身の毛穴が開いたような錯覚に陥ってしまった。



この広場が革命の父スフバートルの像が立っている「スフバートル広場」で、来たる７月１１日に行われるナーダム祭（革命記念日）のパレードの予行演習だったのである。当日のナーダム祭では此の光景を拝観することが出来なくなり、ツアーの中で私だけが目にしたことは僥倖の一語に尽きる。

広場の中央正面に中央政府、東にスポーツ宮殿・国立オペラ劇場・ホテル、西に国立銀行・中央郵便局等の石造りの近代建築が並び、南側には色彩鮮やかな円形の大国章の碑が建っている。

（上の地図参照）

これら石造りの建物の多くは、第２次大戦後にソ連に抑留された旧日本軍将兵の手によって建設されたもので、祖国の人柱となった惨禍の跡を見せつけられた慨嘆は、筆舌に尽くす事は出来ない。我々の過ごして来た時代に紛れもない無常を感じたのである。（ウランバートルに連行された日本軍俘虜は約１３、０００人という）

ウランバートル（烏蘭巴把）は旧名をクーロン（庫倫＝城壁の意）と呼んでいたから（欧米人はウルガと称した）、城壁がないかと闊歩して回ったが見当らず、モンゴル科学アカデミーの前に建つスターリン像にカメラを向けた。ソ連圏内でスターリン像の存在するのは此処だけで、彼はモンゴルの偉大な恩人だったのであろうか。

１６４９年、初代の活仏がラマ廟を建てたことに起因して、モンゴルのラマ教の本山所在地として栄えたウランバートル（赤い英雄の意）では、ラマ教寺院は永遠の力のように眼に映っていた。近くに見えたチョイジンラマ寺院（前頁地図参照）に立ち寄ったところ、閉門中で宗教活動が行われている形跡は全くない。

四通八達した舗装道路にソ連製やチェコ製の自動車が走り、ゲル（中国名は包（パオ））の姿を消した市街を歩く人達の中に、古い中国服に似た民族服「デール」を着用した人の姿も散見され、私に敬礼する人まで現われて心底から親しみを覚えた。早朝の独歩の印象は強く大きな収穫であった。（右は伝統的な冬の服装のデール）

テレジの見学　（ウランバートル郊外の部落名）

予定では本日はゴビ砂漠へ出発だったが、忿懣その極に達したイルクーツクの滞在がたたって飛行機の予約が取れず、１０時からウランバートル東方７５㎞のテレジ部落の見学となった。

古来から外蒙古の中心地であったウランバートルの市街を走行すると、予想に反してトラックの数が多いことに気が付く。全人口の４分の１にあたる５０万人が首都に集中し、国の殆どの工場が此処に建設されている関係から物資の輸送が激しいのだ。

工場群を眺めながら通訳は説明をつづけた。モンゴル人の平均所得は日本円にして１ケ月約２４、０００円で夫婦共稼ぎが多く、子供は大体２人（都会地）、生活程度はソ連のシベリア並みだという。

遠くの小高い山に囲まれた郊外は大平原の盆地の中にあり、草原の草を食む放牧風景は新彊のトルファンや北満州のチチハルを想起させ、夏草が真夏の陽にはえている中に火力発電所の煙突が高く聳えていた。

一方の荒野に一条の鉄道線路が地の果てまでも蜿蜒と延びている。ゴビの砂漠を縦断して中蒙国境の町・二連を通り北京に通じる鉄道で、週に３回、所要時間は急行で２４時間、普通で４０時間である。若ければ一度は乗ってみたいコースだ。

国営のアパート群と対照的に、実に貧困粗悪で小さな木造家屋が所狭しと群れをなしていた。誰かの言葉を引用すると兎小屋より数十段も下層の鼠小屋で、廃材を使用したような家屋である。

年間を通じて（１日の場合も）寒暖のの差が激しく、７、８月の平均気温は１５°前後、厳寒期では零下４０°までも下がる大陸的気候の中で、あのような荒屋で生活を送る蒙古人は自然に質実剛健な気風を身に付け、質素誠実は勇猛果敢を生み、あの大帝国を建設したのかも知れない。

木造家屋の中に極く僅かなゲル（包）が混じっていた。都会ではゲルは姿を消す運命のようだがが、建築費はゲルの方が高くつくのではないだろうか。このような異国の風俗習慣や生活を知ることは旅の楽しさ、旅をしている実感が身に染みてくる。

草原に放牧された家畜の群れは次第に其の数を増し、曠野の彼方にゲルと荒屋の混じった部落が見えていた。モンゴルでは普通の遊牧民の家畜保有数は約１５０頭、多いものでは７００頭と云われ、国民一人当りの家畜数は世界一を誇っている。

そのナーライという部落に近ずくにつれて、少しばかりの畑が耕作されていた。初めて眺める珍しい光景である。政府は農地の開拓に力を注いでいるものの遅々として進まず、モンゴルは依然として牧畜が主体だ。砂利まじりの草原の自然環境は農耕に適せず、第一は灌漑の問題であろう。しかし年間降雨量が２００～２５０ミリでは気が遠くなるばかりだ。

集落の反対側に汚い木造の兵舎が建っていた。モンゴル軍の兵舎か、それともソ連軍のものであろうか、兵士の顔付ではソ連兵のようである。中ソ国交の緊張時代の産物は、和解宣言の通りに一日も早く撤退を望んで止まない。

荒野の道路は自然の草原に残した車の轍（わだち）そのままで凹凸は激しく、マイクロバスの車軸が折れないかと心配するほどだ。振動に耐えられない状態が続いて見えるものは送電線のみであった。

「前橋（ゼンキョウ）つかんで澄まし顔」

モンゴル全土は８％の森林と２０％のゴビ砂漠を除けば、残る７２％は凡て草原である。何処までも拡がる荒野の中に２個のゲルとツーラ川が見え出し、車の上下左右の振動の疲労を癒すために休憩となった。

草原の丘の上に１０頭ばかりの馬を連れた家族の一団が、我々に好意を示して破顔一笑して迎えてくれた。放牧中であったのであろうか。モンゴル入りして初めての遊牧民との対面は理屈なしに近親感を覚え、ツアーの人達は間髪を入れずシャツターを切った。

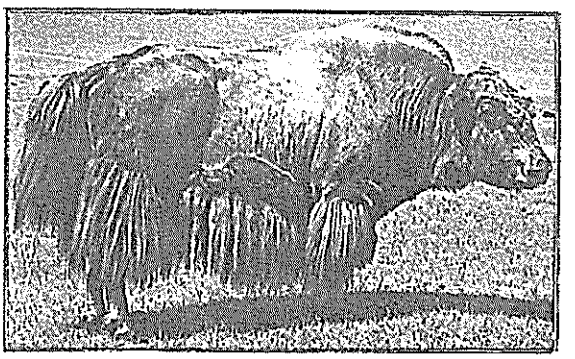
彼等特有の皮革の衣服や靴を眺めた一瞬、時代が遡ったように思ったものの、太陽族の彼等の一生は此のようにして日一日を送り、しかも楽天的な夢の生活に奇異を感じないのであった。（右の写真）

「人には添うて見よ、馬には乗って見よ」という日本の諺を思い出した。良いか悪いか見ただけでは判らず、早速、良さそうな一頭の馬に近ずいて鐙に足を掛け、鞍に手をやって飛び乗った途端、馬は周章狼狽して驚愕の余り私を降り落そうと飛び跳ねた。つまらない男を乗せてやるものかと癇癪を爆発させたのであろう。

不意を衝かれた瞬間、そこは昔とった杵柄だ。鞍の前橋(ゼンキョウ)をしっかりと掴んで膝を締め、澄まし顔であった。これ式で落馬しては沽券に拘るとばかり懸命に耐えていると、直ちに馬主は馬を宥めて漸く下馬した。ツアーの人達は一時は如何なるかと心配したらしく、その心には感謝しなければなるまい。

厳しい自然を耐え抜く強靭な精神の遊牧民たち、彼等は決して世に追い詰められたり、世をはかなんだりはしない明るさを持ち、彼等の生活の機微の一端に触れたことは旅の賜物で、別れれを惜しみながらバスに乗車した。

「テレジ」



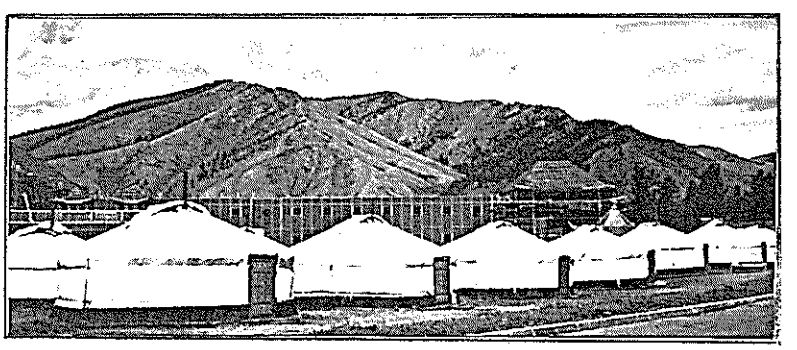
行けども平坦な草原を走るばかりであったが、全身の力でバスの振動に堪えなければならない悪路が続いていた。次第に荒野は狭まって岩山が突出し、中国の山西省を思い出す奇岩怪石の光景が展開して、其の間に「ヤク」の群れが草を食んでいた。（右の写真）

山間を抜けると再び草原が拡がり、６、７個のゲルが点々と見え出した。多分この一集団は一家族であろうか。彼等には眼に見えない縄張りがあり、相互に牧草地を侵さない定めがあるらしい。政府もモンゴル全体を自然保護地域に指定し、鳥獣類の捕獲を禁止して遊牧民の保護につとめている。

目睫の間に２０個ばかりのゲルが昏々として眠るように並び、其の向う側に石造りのレストランが陽に照り映えていた。ここがテレジ部落のツーリスト・キャンプで、満州で体験した包(ゲオ)（ゲル）を想起しながら昼食となった。

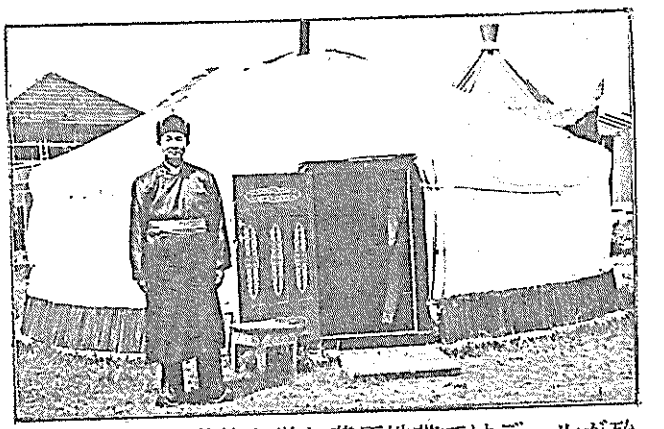
世界の到る所に人間も家畜も住んでいる。その起源は無限に過去に遡り、人間も馬も宇宙も其の始まりと云うものは知らず、「無始」だと言えるだろう。そして人生を生き抜く方法は多種多様で、古人は「生まれ育った星の下」を宿命と呼び運命と呼んだが、人間の思念を超越した摂理によるものとして大切にしなければならない。下の写真の景観や四周を眺望し、改めて此のことを痛感したのであった。

食事を終えてゲルの見学に移った。一杯の手づかずの大自然の中で暮らす美しい人達の棲家・ゲルは興味津々、早速中に入った。（下は整然と並ぶキャンプ）



観光用だけあって絢爛豪華の大きなものだ。目映いばかりの朱塗りの天井に扉、周りを囲む分厚い刺繍のフエルト、王侯貴族の使うような調度品は眼を見張るばかりであった。

これでは沓々とした茫漠の荒野に天恵のない暮らしをする蒙古人の実態は感じられない。しかし観光資源の乏しいモンゴルでは、外貨獲得の手段として致し方ないだろう。中に入って隅々まで覗いた。



通訳は一人一人に華麗な蒙古服のデールを着せ帽子をかぶせて、記念写真の撮影となった。ゆったりと体を包んで前を重ね合わせ、腰のあたりに帯をしめる衣服だ。現在の都会地では洋風が進んでいるが、伝統的な遊牧を営む草原地帯ではデールが殆どである。（上の写真はゲルの前に立つデール姿の私）

デールは本来、部族的な特徴をもち、服装を見れば何の地方の人か一目で判るようになっていた。今ではそうした特色はなくなり、都会風と草原風に分けられているだけのようだ。

草原風では身幅が広くて身丈が長く、両袖に大きな折り返しが付いている。袖の折り返しは手袋の代用となり、身幅、身丈の大きいのは乗馬と防寒に適して布団の代用にさえなる。まさに遊牧民の生活の知恵から発達したものであろう。（２７頁写真）都会風は乗馬しないから身幅も身丈も短い。（上の写真のもの）

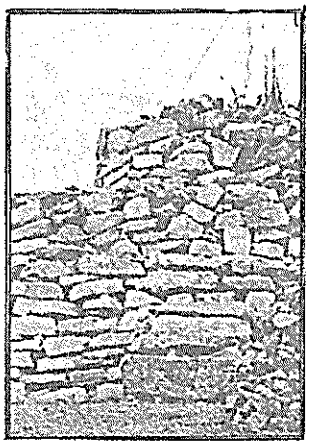
美しいデールを着用し中国皇帝のような帽子を被って蒙古姿に着替えると、チンギス・ハンになった気分がする。そして頭の中に中国や蒙古の歴史が彷彿と浮かんでいた。秦漢の時代から清朝に至るまで常に怖れられて来た蒙古の民族衣装に、ことのほか愛着を感じたのであった。

【遊牧民の使用するゲルもテレジのものと変わらず、平面は円形で８～１０畳ほどの広さがある。立体面では円筒形の壁体にドーム状の屋根をかぶせ、柳の枝などの骨組みに羊毛のフエルトを張り、移動の時には容易に分解・組立てができる。入口は一端に設けられて内部は草の上に敷物をしき、炉を囲んでベッドが据えられている】

一時であったがゲルの生活の一端にふれながら、モンゴル遊牧民の環境に即した生活法を偲んでいると、無常は無常、命は命と達観させるような感じが湧いてくる。此のゲルの生活こそ蒙古民族の誇りだと思いながらバスに乗車した。（右は民族服の切手）

草原の轍の上を馬群が行列を作って占領していた。別に馬たちは驚く様子もなく運転手は轍をよけて草の上を迂回した。荒野は全て道路となり、日本の喧騒の渦巻く渋滞は何処ふく風だ。

「聖地オボ」



道路（轍）の傍らに石を積み上げた三角形の「オボ」が見えていた。チベットのように白い布をつけた竿は立っていないが、ラマ教の影響が田舎まで浸透している。通訳の話では蒙古語でもチベットと同じく「オボ」という発音であった。（中国では鄂博）（右はオボの写真）

オボは中国東北、朝鮮、シベリア、蒙古、新疆省、チベットを結ぶユーラシア大陸の北部に広く分布している石堆文化で、形態は地方によって趣を異にしている。

蒙古やチベットでは礫・塊・石を円筒形に積み上げ、中に経文を埋める。オボの上に木枝を立てて布や紙片を結び、峠の頂上、村落の入口、道路の傍、牧地や村落の境界などに造られる場合が多い。

オボの位置はシャーマン（占い師）が定め、石堆が造られると聖地として信仰行事の対象または祭壇となり、オボに対する行事はラマ僧によりオボ教を読んで行われる。

昔、オボは神が降下して宿る神聖な場所とされ、強大な権力を誇ったラマ教と結びついた祭事の中心であった。夏にはオボの前で家畜のいけにえを捧げ（血祭り）、牛乳や馬乳酒を注ぎ（酒祭り）、火をたき（火祭り）、ラマ僧がお経をあげ、家族の安全を祈って周りを廻った。モンゴル族の祭「ナーダム」もこうして始まった。

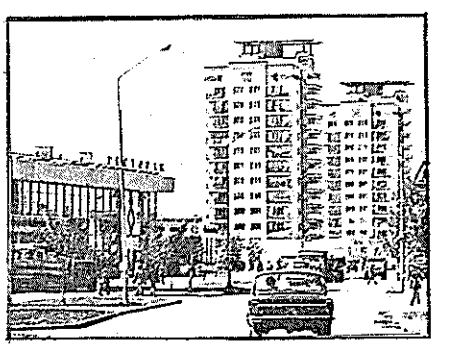
しかし通訳のナラさんに尋ねると墓だという返答であった。革命後、ラマ教のすたれたモンゴルの若い人達は全くオボやラマ教の知識がなく、宗教は麻薬だと宣言された共産国では当然かも知れない。

このような石堆を「オボ」と呼んでいるのは蒙古、チベット、新疆で、満州では「アオ」、朝鮮では「タン」と呼んでいる。

オボを通り過ぎ、往路にも見えていた４体のコンクリート製の恐竜を展示した草原で休憩した。テレジとウランバートルの中間地点で、観光客に対するサービスの景観造りである。しかしトイレの設備の無い点は至急に改善すべきである。

恐竜の草原から僅かの所に亀の形をした奇岩があった。雑阿含経に亀のことを「蔵六」と書いてあるが、ラマ教のモンゴルでも亀は尊敬の対象になっているのだろうか。蔵六とは手足と頭、尾の六つを甲羅の内側に仕舞い込むことから由来している。

ウランバートルに近づくにつれて小型のゲル造りが盛んに眼に写ってきた。彼等は遠路はるばるモンゴルの全土から首都のナーダム祭に集まった人達で、競馬や弓技、角力に出場する者から見物客に至るまで、数日間をゲルで暮らすのであった。（右は我々の宿泊したホテル）



獣皮をまとい、獣皮を張ったゲルの中に生活する彼等の肌は、羊皮のように強靭で温かいのであろうと想像を逞うしながら、１７時にホテルに帰着し初日を終わった。明日からのウランバートル観光に先立って市の概要を記述する。

ウランバートルの概要

北緯４８°、東経１０７°、標高１３５０ｍ。バイカル湖に注ぐ内陸河川のトラ川の上流に臨み、周囲を小高い山に囲まれた高原盆地にあり、気温は最暖月（７月）の平均１７°、最寒月（１月）の平均－２４°、年間雨量は２０６ミリ、年間を通じ晴天は平均２００～２５０日、人口は５０万人である。

この地はもとウルガ或はダ・クリイエと呼ばれ中国人は庫倫（クーロン）と呼んでいた。附近には水と草の豊富な高原草地があり、山の北側には森林も多く、遊牧と狩猟に好適である。

１７世紀中頃、ここに活仏（ラマ教の高僧の尊称）のラマ廟が完成した以降は、この地方の中心地となった。１８世紀後半から中国とロシアの接点となり、清朝は庫倫に弁事大臣２人を置き、ロシアとの境界問題や通商貿易関係を掌握させ、これに対しロシアも領事を駐屯させた。

同時に此の地方は清朝の北辺防衛の基地として、弁事大臣の指揮下に２０００余人の兵が駐屯していた。このようにウルガは名実ともにモンゴルの政治、経済、宗教の中心に成長し、清朝後期には人口３万の都市となり、壮麗な活仏の宮殿も建設された。

辛亥革命（１９１１）で清朝が倒れると、ウルガの活仏は外モンゴルの自治を宣言して急速にロシアに接近、翌１２年には事実上、外モンゴルをロシアの保護国にする条約を締結した。

しかし１次大戦中の１９１７年にロシア帝政が崩壊し、両国の関係は一時断絶した。１９年になって安福派軍団の領袖「徐樹錚」は６０００人の兵を率い、ウルガに進駐して独立を取り消させ、北京政府はモンゴルとロシアとの間に締結した一切の条約の無効を宣言した。

そこで２０年にはロシアの将軍フォン・ウンゲルン・シェテレンベルグが白系ロシア軍を従えて侵入し、翌２１年には中国軍を駆逐してウルガを占領した。しかし此の時すでにウルガでは完全独立、社会革命を目標とするスフバートルやチョイバルサンなどの率いる革命運動が進展しつつあった。ソビエト赤軍はスフバートル指揮下のモンゴル人部隊と共にシベリアから侵入し、白系軍を撃破してウルガに入城した。

このような相次ぐ戦乱はウランバートル（ウルガ）に荒廃をもたらしたが、その後、モンゴルとソ連との関係は緊密なものとなり、ソ連自身も革命後の困難な状況にありながら、ウランバートルの復興、近代化に対し協力を惜しまなかった。

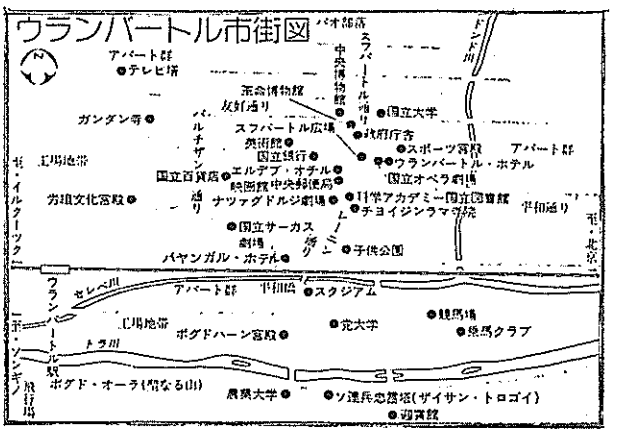
１９２４年、モンゴル人民会議は憲法を制定し、同時に人民革命の英雄スフバートルを記念して、ウルガをウランバートル（赤い英雄）と改称した。翌２５年にはソ連軍は撤退している。

ウランバートルはモンゴル総人口（２００万）の４分の１が集中している。第２次大戦で全面的にソ連に協力したモンゴルは、戦後はソ連の援助によって４次の５ケ年計画を遂行し、ウランバートルの近代都市化を進めた。

スフバートル広場を中心に巨大な新古典的な建築の中央官庁、劇場、博物館、ホテル、大学などがあり（２７頁に記述した通り、これらはソ連に抑留された同胞の手によるものである）、郊外には織物、製紙、製肉などの畜産加工のコンビナートがある。

7月6日 (木) 晴　ウランバートル市内観光

「ガンダン寺」



本日は一日中ウランバートルの市内観光となった。ホテル前のレーニン通りを北に進んでスフバートル広場を左折し、友好通りを西進するとモンゴル・ラマ教の総本山ガンダン寺であった。

モンゴル民族の最も古い宗教はシャーマニズム（巫術）で、男巫・女巫を通じて神霊の世界と交渉した。多数の神格があったが最も尊崇されたのは火神で、炉の火は常に清浄に保たれた。（位置は上の地図参照）

チンギス・ハンが晩年に西夏王国を滅ぼすと、この国に広まっていたラマ教（チベット仏教）がモンゴル人に伝わった。モンゴルのハン（汗）や元朝の皇帝たちは宗教的には寛容で、ラマ教に保護を加えた。（汗は王位を示す敬称で帝位は大汗と称す）

アルタン・ハン（１６世紀）の時代になって、都市の発達とともにラマ教特有の教団生活の基礎ができ、多くの修道院が建設された。またモンゴル人の僧侶による学術研究が始まり教育が普及したのである。

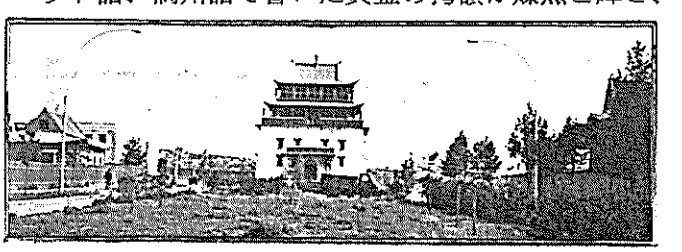
清朝時代には「旗」（群）ごとに必ず一つの修道院があり、それらの本山が外モンゴルではウランバートル（ウルガ）のガンデン寺であり、最も格式が高かった。ウランバートルの座主をジェブツンダンバと称し、代々転生して其の第８世が１９１１年の外モンゴル独立の中心人物（チェツオンダンバ活仏）であった。

ラマ教のガンデン寺の正面山門には精神風土を感じさす３層の大門が、威風堂々と聳えていた。１８３８年に建立したもので、モンゴル全土の大小９００余もあるラマ寺院の最高位の此の寺は、神がかり風な熱狂的崇拝の寺らしい風格を備えている。

高い塀をめぐらした寺院には、青い瑠璃瓦をのせた七堂伽藍が広大な境内に建ち、一行は正門の横手にある門をくぐって精舎の中に入った。参詣する信者たちと一緒に敬虔な気持で足を運ぶと、左手に７０００冊に及ぶ経典を収めた蔵経堂があった。経典はモンゴル語の他にチベット語、満州語で書かれていると云う。

蔵経堂の後方に建つ瑠璃瓦の上に金色の塔を頂いた本堂は、神気に満ちた浄域の中心であり、前庭には「五体投地」の拝礼を行う石の板が整然と並んでいた。

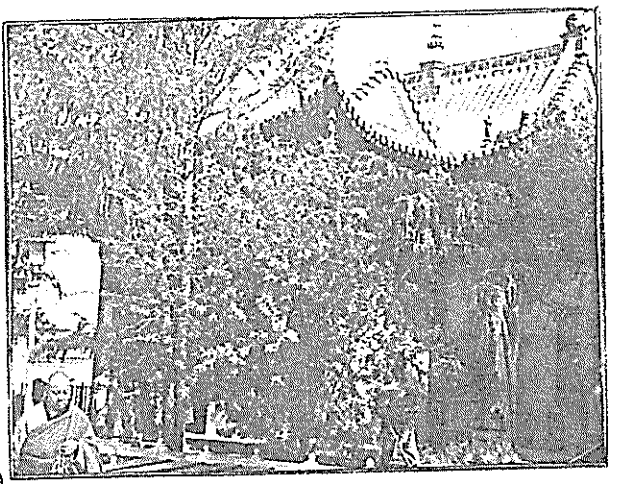
本堂の正面にはモンゴル語、チベット語、満州語で書いた黄金の掲額が燦然と輝き、扉もまた朱塗りの上に金箔の模様が描かれた絢爛豪華なものであった。（右は寺院の正門）



本堂の中では隠士のような面影を残した十数名の高僧達が、香煙縷々の間に読経中であった。

毎朝９時から１２時まで行われる観行は超俗の世界で、粗相があってはならないと左廻りに堂内をめぐり、信者の中には数珠を回しながら祈っている人も見受けられた。

本堂の正面陣内の奥深くには４体の金色の仏像が安置され、天井はラマ教の普遍的な原理、真理を描いた曼陀羅となつている。僧侶たちは読経で咽喉が渇くたびに、井茶碗に入った白い馬乳酒を口にし、観行を続ける光景は珍しい姿であった。



（右は本堂と僧侶、内部は撮影禁止）

本堂横にある蔵経堂には絹と紙に書かれた２２０巻の経典があり、其の後方に宗教学校も併設されていた。男子だけが入学を許可され、英語、満州語、モンゴル語の学習から哲学を専門に習得するそうで、総本山らしい雰囲気が漂っていた。

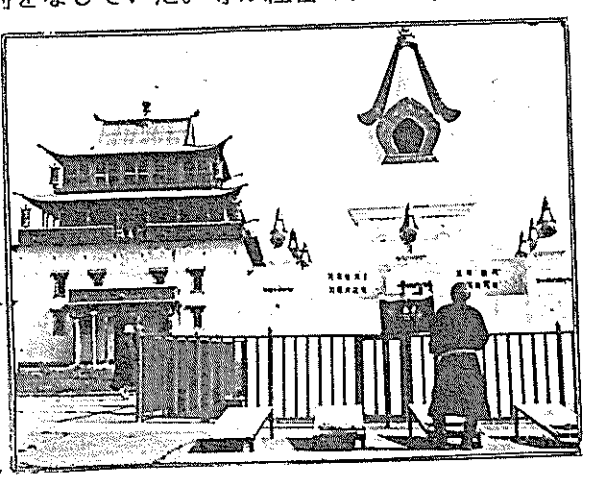
ガンデン寺には未だ活仏（上人、聖人といわれる高僧）がおられると聞いていたが、誰が活仏であるか判らずに巡拝している時、突然「鐃鉢（ニョウハツ）」（ドラのような楽器）が打ち鳴らされた。ラマ教は日本の仏教と同じく大乗仏教であるから、観行の儀式も良く似ているようである。

１８１８年にジャンライテックという高僧が建立した本堂は、蒙古のラマ教信者にとっては一生に一度は参詣しなければならない仏殿である。敬虔な祈りを捧げて巡礼する彼等には文字通りの聖なる時で、「人は一代の人にあらず、誰か死後を思わざるべけんや」と合掌する姿は咏嘆しなければならない。ナーダム祭と一緒に全国の門徒が参集する時期に出会し、人の波は続いていた。

恩徳の涌源である本堂を拝辞して、次ぎに建っていた殿宇は１９１２年の建立にかかる、黄金色の瓦を葺いた３層の寺院であった。中国では黄金色の瓦を使用できるのは皇帝のみであり、清朝はガンデン寺を最高の礼を以て待遇したのであろう。

裏側の小さな建物の前に信者達が行列をなしていた。寺が経営のために薬を売っているのかと覗いて見ると、無料で香を分配しているのであった。香は人々の信心を仏に伝える心の媒介で、一心に精進する信者に報いていたのである。

七堂伽藍を参拝して自門自答しながら正門広場に向かった。右の写真のように山門の前庭に純白の仏舎利塔が厳かな姿を現わし、其の前に五体投地の石板が並んでいた。（写真の手前）

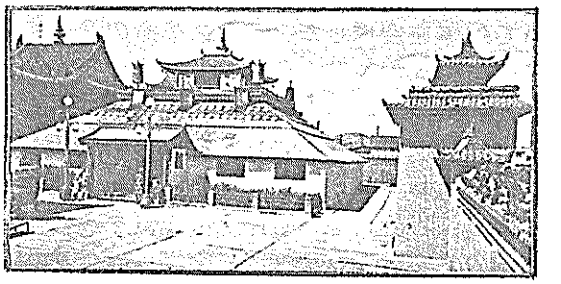


１５０人余のラマ僧や多くの信者が石板に身を投げて祈りを捧げ、梵我一如の境地に一歩でも近づかんと念願し、

仏舎利塔を拝むところであった。釈尊こそ最後の支えとして信仰から生まれた心の喜び、即ち法悦を感じさせる石板は自然に私の体を引き付けた。

郷に入れば郷に従えと云う通り、信仰はあくまで心の問題だと進んで石板に手をかけた。無視、無垢、超俗に触れたいと五体投地の祈りを捧げた時、「遁世の身とならば一筋に仏道修業のほか他事あるべからず」という親鸞の言葉が脳裏をかすめていた。

屋外に安置された結跏趺坐の金色の釈迦像に拝礼し、美麗豪華な建築の粋に見惚れながら通用門に進んだところ、其処にチベット風のラマ寺院が眼に写った。ガンダン寺に参詣してカトマンズの目玉寺を想い浮かべるとは夢にも思わず、これもラマ寺を巡拝した御利益だと信じなければならない。（右はチベット風寺院）



石の門を通って塀の外に出ると、子供連れの信者一家が参拝を終わって帰えるところに出会った。早速記念写真に収めたいとカメラを向け、善男善女は快く笑顔で承諾してくれた。（右の写真）

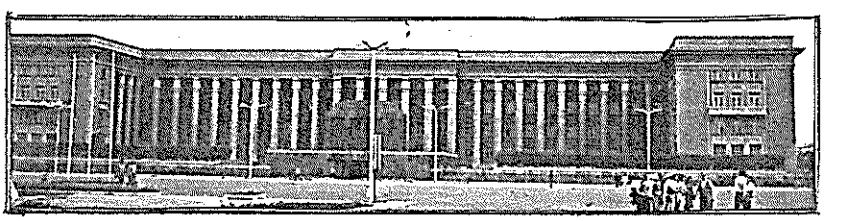
宗教は宇宙、世界、そして生命自体の説明の組織であろうか。だからこのように寺院に信者が参拝に集まるのに相違ないのだ。

祇園精舎の霊域を後にして、横門を出た所に石の囲いがあった。其の石柱の上にナーガ（蛇神で男根を表わすもの）が並んでいるのは異様である。

天地の活力の根源である男根はヒンズ教の根本原理で、アンコールワットは凡て此のナーガに基ずいて建造されていた。ラマ教にもヒンズ教のナーガの思想が流れているとは、新知識発見である。約１時間の拝観が終わってスフバートル広場へとバスは反転した。（３３頁地図参照）

「スフバートル広場」

昨日の早朝、分列行進の予行をしていた広場であって私には初めての場所ではない。正面は国会議事堂を含む政府庁舎で（右の写真）、モスコの赤の広場を模倣してスフバートルの遺体を収め



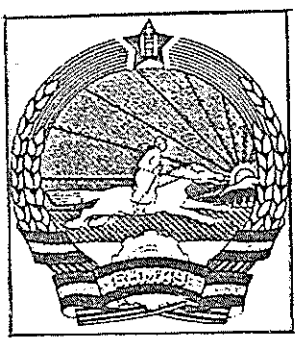
た赤石で造った廟がある。

広場の中央に立つ乗馬姿のスフバートル（１８９４～１９２３）の像は、今にも馬が飛び出しそうな見事なものだ。

革命とは「命を革め、天に順ひ、人に応ず」と易経に書いてあるが、天命が改まってスフバートルが政権を奪い、社会組織を急激に根本から変革させたのであった。本年は人民が国王に叛いて政体を変更したフランス革命の２００周年に当るが、ロシア革命のほかに此の革命も、彼等に革命の意義を高揚させたのかも知れない。（右の写真はスフバートル）

モンゴル国民は其れから６８年もの間、ソ連を模範として信仰的に従属して来たが、準ソ連人であってほしくないのだ。彼の偉大なチンギス・ハンに続き、世界に冠たる遠大な志気を再び蘇らせることを祈るばかりだ。

東側のスポーツ宮殿や国立劇場、西側の国立銀行や中央郵便局等は前記したとおり政庁舎を含め、我が日本人俘虜が死生契闊の間に建てたもので、我々には亡霊の墓石のように眼に描写されるのであった。しかし憎むべきはソ連であり、不思議にもモンゴル人には何の恨みも湧いて来ない。東洋民族の親しみが綿々と連っているのだ。

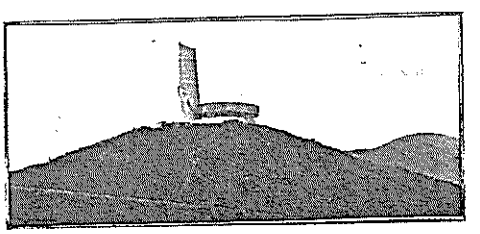


広場の南側（政府庁舎の反対正面）にはモンゴル人民共和国の大国章が建ち、民族の独立意識を促していた。社会主義国家にはどこも国章に国家の理想や発展の方向を示しているが、モンゴルも例外ではない。（右がモンゴル国章）

ブルーの空をバックに白馬に跨った牧民が太陽に向かって緑の草原を馳驅する図柄は、モンゴルが牧畜の国家であることを象徴し、外側の麦の穂は農業の発展を目指しており、基底部の歯車は工業の開発によって国家産業の発展を意図したものと思う。即ち工・農・牧の一体が目標である。

６８年前の革命当時、有史以来の原始的遊牧に依存していたモンゴルが、理想と描いた国家像は此の国章に端的に現われていた。

「ソ連兵忠霊塔」



「友は得難く失い易し」「朱に交われば赤くなる」と云うような諺を胸に浮かべていると、バスは南下して鉄道線路を通過し、セレベ川からトラ川を渡ってソ連兵忠霊塔の丘の下に停車した。（右はソ連兵忠霊塔）

通訳のナラさんは「モンゴルとソ連との友好記念碑」だと説明したが、地図（３３頁）では表記の名称となっており、敢えてソ連兵忠霊塔と書くことにした。恐らく日ソの関係は良好でないから、モンゴル国営旅行社では此の様に指導しているように勘繰られる。

６～７００段もある階段を青息吐息で登り、途中で腰を下ろして休憩しながら漸く丘の上に立った。写真のような円形のコンクリート製の輪があり、其の横に天空に聳える塔がたっている。

円形の輪の外面にはモンゴルの国章とクレムリン、それに数人のソ連軍高級将校の像が刻まれ、内面には着色したソ連軍の戦闘の場面が描かれていた。その中に日本軍の軍旗が降伏する画面もあり、憤然として抵抗を感じながら眺めていた。恐らく昭和１４年５月～９月のノモンハン（位置は２頁の地図参照）の戦闘の絵であろう。慚愧に耐えない。

血道をあげた戦闘画を忠霊塔に描くことは国情の違いとは云え、侵略主義、軍国主義を強調する以外なんの関係もなく、ソ連の馬脚を表わしてものと言わなければならない。

睥睨するように聳える塔はソ連軍兵士が基部を支える格好に造られ、これは完全にソ連兵忠霊塔であった。即ち塔も輪もソ連軍のためのもので、輪の一部にモンゴルの国章を刻んで誤魔化している。

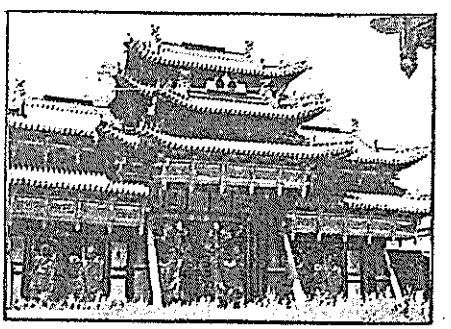
谷を隔てた西側のボクド・オーラ（聖なる山）の丘の斜面に、モンゴル国旗と革命記念６８周年と白い石で表示されていた。（３３頁地図の下方）京都の大文字焼に似て遠くから眺望できるように出来ている。

一望のもとにウランバートルの市街を俯瞰する丘を下りながら振り返って見ると、天を仰ぐように塔を立てた意義は宗教的な原型だと眼に写っていた。天を敬うことは人を愛すことに通じ、日本やドイツの捕虜を強制労働させて虐待し、多くの人命を奪った事は天に恥じる行為だ。当然ながら素直に懺悔しなければならない。

午前の市内観光は以上で終わりとなった。

「ボクド・ハン宮殿」

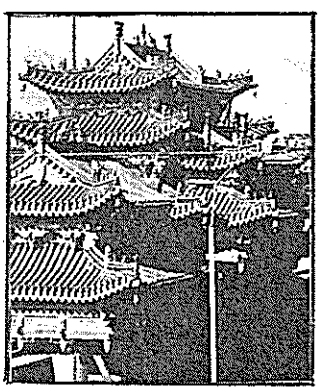
静かな首都には天地鳴動するような喧騒もなく、排気ガスのない美味しい空気が漂っていた。憧れだった午後の観光は２時から始まり、ボクド・ハン宮殿博物館の見学となった。



高原を照らす太陽の光は昔日の荒武者や駿馬の汗を感じさせ、バスは南に向かって疾走した。

１８９８年建立の宮殿は代々のラマの活仏が住み、ウランバートル最後の活仏であったボクド・ハンの居所でもあった。（右は宮殿の山門）

１９２１年７月、革命の父と呼ばれるスフバートルが独立を宣言したが、ラマ教に信仰の厚い民衆の感情を考慮して直ぐには人民共和国を宣言せず、ボクド・ハンを元首とする君主政体を宣言した。そしてモンゴル人民共和国を宣言したのは、ボクド・ハンが死去した１９２４年であった。



共和国宣言以来、激しい反宗教運動が行われた結果、今では宗教色は一掃されてガンダン寺のみが昔の面影を宿し、この宮殿も宗教色を消し博物館として現在に及んでいる。

正面に絢爛豪華な山門が建ち、横手にある通用門を進むと第２山門が青い瑠璃瓦をのせて、往時の権力の威容を誇示していた。（右が第２山門の豪華な屋根）

第２の山門の正面にはサンスクリット語、モンゴル語、中国語（広慧寺）満州語 で書いた黄金の掲額が燦然として輝いていた。（右は掲額）

第２山門の楼閣には他では絶対に拝見できない異様な姿をした、四天王の守護神の像が辺りを睥睨していた。赤青黄白の顔をした４体の守護神は、眼光炯々として足下に悪者を踏み付け、由緒ある活仏を警護するに相応しい姿であった。

宮殿は前の方がラマ教の寺院の形態をなし、後の方は歴代活仏の居所となっている。山門の直ぐ後にある左側の建物は三つの室に分かれ、それぞれ違った仏を祀る祭壇となっていた。シルクに刺繍した１９１９～２０年代の光絢な仏画ばかりで、一瞬、鬼気の迫るような荘厳さと眩美壮麗さに圧倒されたのであった。

正面の仏殿も３つの室に分かれ、中央の室には釈迦と医療を司るオトシアナという仏がが祀られ、左の室には珍しい３つ目の仏像や２４本の千手観音、右の室には角の生えた牛頭の仏像が祀られていた。

３つ目の仏像は過去、現在、未来を表わし、天国に行くか地獄に行くかを決める仏の姿だと謂れている。その他、富を司る仏を始めとして種々の仏像が並び、メモをとることも並大抵ではない。活仏たちが悪を退治して富を集め幸福を願った事が窺える。（右は３つ目の仏像）

次ぎの仏殿の絹布に描かれた千仏画はシルクロードの敦煌の壁画を彷彿させ、安産の仏像から未来像のマツリア像と、頭の中が混乱するほど祀られており、１０８の煩悩を退散させる仏様の展示場のようであった。

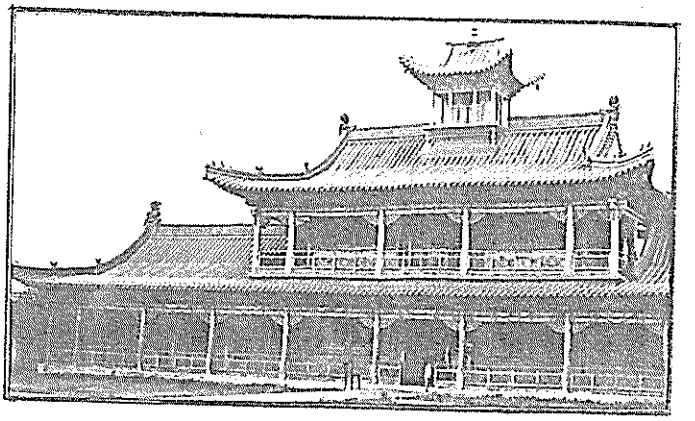
最後に釈迦の一代記を描いた大仏画が飾られていたが、古き良き時代の香りが寺院の到る所に漂っていた。

チベットに劣らない仏の数々に眼を見張りながら拝観したが、宗教活動のない寺院は気の抜けた感じで、ラマ教の歴史を想起しながら移動した。活仏といえども世は無常であったのである。

経典を収めた蔵経堂を通って活仏の居所へ案内されると、悠揚迫らず堂々とした気品のある、ボクド・ハンを始めとした活仏たちの像や、赤サンゴや真珠で刺繍した華美な着物、贅を尽くした調度品など数え切れず、世界の最高級品が陳列されていた。世俗と乖離した超俗の人らしい暮らしが、しみじみと肌に伝わっていた。

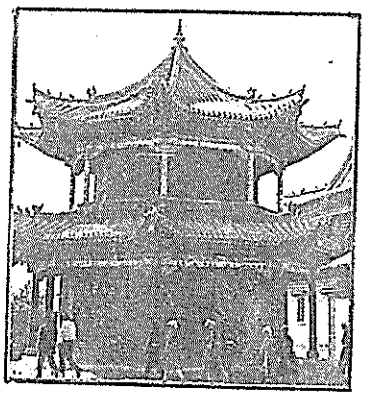
膨大な活仏の居所の到る所に、世界各地から寄贈された珍獣、珍鳥、珍魚から陶器

に到るまで所狭しと陳列され、栄耀をつくした錦衣玉食の生活が垣間見られた。悩みの多い世の中では宗教の力は想像以上だ。（右は活仏の居所）



特にキリン、大亀、豹、鰐、ライオン、極楽鳥、クジャクなどは遠い国の鳥獣は、ラマ教の絶大な力を誇示している。この辺境の高貴秀麗さと度肝も抜かれる数々の品に、三嘆を久しくされたのであった。

最後の拝観の場所となった部屋には、活仏が狩猟に出掛けた時に使用した豪華なゲル（包）があり、春夏秋冬の各季節ごとに暮らした活仏や夫婦の部屋は、小規模ながら中国皇帝に劣らない蓋世の天国の生活で、華胥の国に遊ぶような心地がしていた。（右は宮殿の一部）



モンゴルの革命は時代の趨勢であったが、この宮殿にも革命の芽を宿していたことを考えると、一抹の哀れを感じるのであった。一枚の蓮華の上に生を託し、死んで極楽の蓮華の上に生まれ代わる活仏の霊魂は、今なお此の宮殿に宿っているのだろうか。

私の肺腑に刻み込まれていた歴史を想い浮かべ、胸をときめかせ夢を馳せていたボクド・ハン宮殿の拝観も、瞬くうちに終わりを告げ、瑠璃瓦の屋根に後髪を引かれる感じで去ることになった。

「その他の市内観光」

バスはホテル近くのイヨイジン・ラマ寺院の前で停車した。昨日早朝に独り訪れた此の寺は宗教活動は全く行われず、一人の信者の影もない寂しさであった。ラマ教の衰退はペンペン草の生えた境内に古色を悄然とした建物を残すだけである。

続いてドルショップに立ち寄ったが、皮革製品と絨毯が主体で食指の動く物はない。次の国立百貨店は日用雑貨・食料品を買う超満員のモンゴル人で賑わっていた。四階建の石造りの外観は百貨店らしい感じだが、内容は日本の田舎のスーパ程度である。

今日は主としてラマ教に関係したガンダン寺やボクド・ハン宮殿を拝観したが、ここに「ラマ教とモンゴル」に就いて記述することは有意義であり、次に簡単に記載することにした。（下はドクド・ハン宮殿の屋根瓦の一部）

ラマ教とモンゴル

ラマ教は仏教のチベット化したもので、特に１３世紀から全チベット圏に強く根をはり、ダライ・ラマを宗教、政治の王として独特の政治、宗教組織を生み出した。

１２０７年、チンギス・ハンが西夏王国（寧夏回教自治区を中心とした地方で、チベット族の中のタングート族が主体）を攻略すると、中央チベットは攻撃を受ける前にモンゴルに降伏して朝貢を約束した。その後、１２３９年に初めてモンゴル軍が中央チベットに侵入している。

青海省地方に勢力を張っていたモンゴルの王子ゴーダンは、ラマ教のサキャ派寺院座主のパンディタと、その甥のパグパを青海省に招き、パンディタはハン（汗・王）に代わってチベット支配を認められた。しかしパンディタは１２５１年、蘭州（甘粛省の省都）で死去した。

１３世紀の半ばに「元」（１２６０～１３７０存続）が興り、元のフビライ・ハンは中央チベットの支配権をパグパ（上記）に授与して「帝師」の称号を与え、その後数百年にわたってチベットの強い宗教的な連帯の基礎が固まった。

元は漢民族を征服して「金」の国（満州女真族の王朝、１１２５～１２３４存続）、「宋」の国（北宋９６０～１１２６、南宋１１２７～１２７９）も滅ぼし、東ヨーロッパ、安南までも併合した。しかし元は何一つ文化というものを持たなかった。

武力ばかりでは本当の征服が出来ないことを知ったフビライ・ハンは、チベットのラマ教をモンゴルの文化として普及させたのであった。

一方、パグパに命じてチベット文字を模範にしたモンゴル文字を創定させ、フビライの在位期間は公用文字として使用させた。しかしフビライの没後は旧来のウイグル文字に戻っている。

フビライの影響であろうか。明時代になってからも漢民族が蒙古民族を抑えるためには、やはりラマ教を採り上げなければならなかった。即ち蒙古ばかりでなく、蒙古民族の居住する所は現在でもラマ教を信じている。その地域は広大なもので中国本部は勿論のこと、東は満州から北はシベリア、南はブータン、シッキム、ネパール、西はラダック地方に及び、広いラマ教圏を形成している。

日本と中国の仏教は唐代の僧、玄奘三蔵がインドの仏教を中国に伝えて発展させたもので、日本にも伝来された。しかしチベットの仏教はこれと異なり、インドで発展した仏教が直接チベットに入って来た仏教であった。

即ちラマ教はインドで生まれてインドで育った仏教で、中国を経由しないで直接に伝わったものだ。インドで発達した仏教は今ではラマ教以外には見られない。

ラマ教徒は自分が教えを受けた師匠に対して、最大の尊敬と絶対の服従心を持っている。自分の前に師の現われる以前には、仏も法もないというのが其の骨子となっている。

サンスクリット語（梵語）では師匠のことを「グル」というが、チベット語では「ラマ」と云う。「ラ」は「上」、「マ」は「人」のことで、ラマは「上人」或は「活仏」であり、広く先生或は師、師僧の意味を持っている。

ラマは仏以上、法以上のものだ。仏もラマによって存在するものとされている。仏

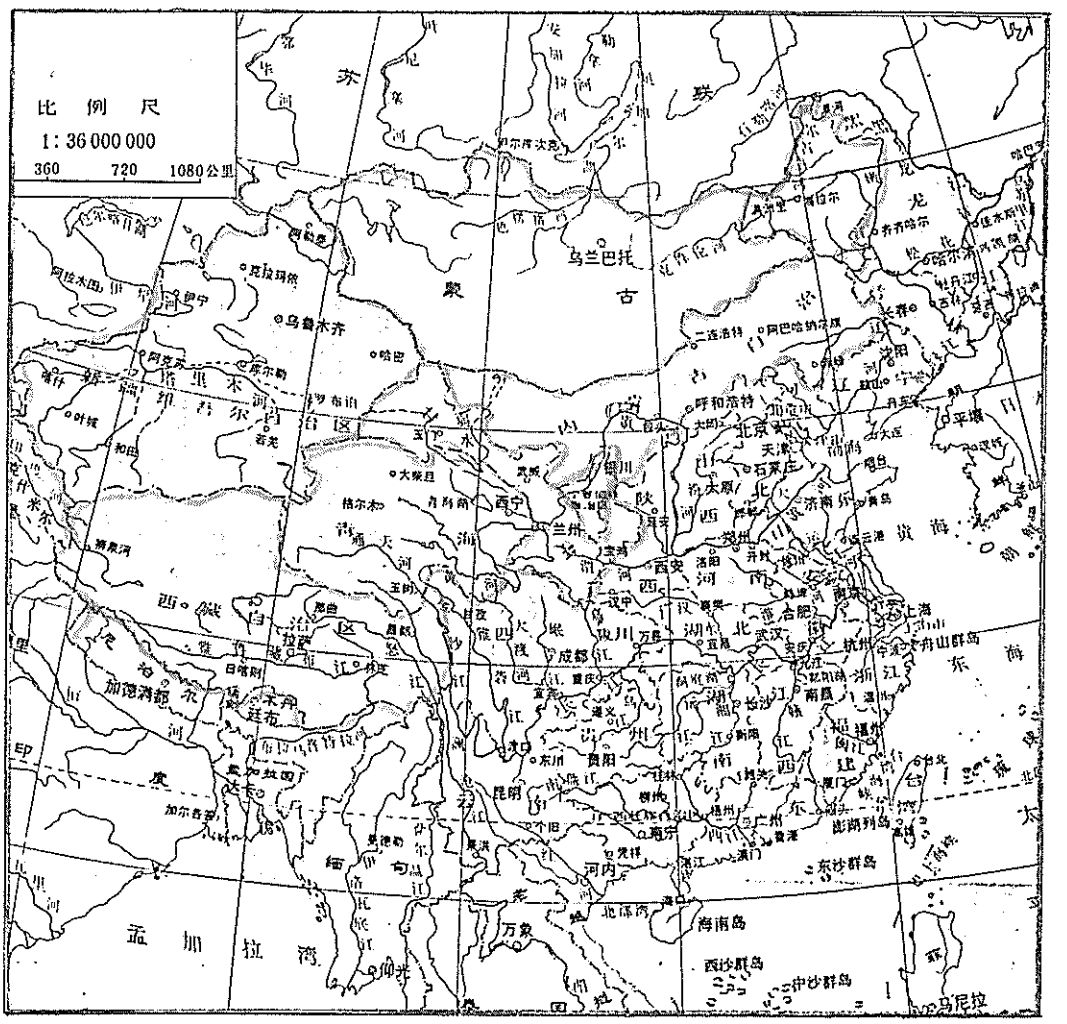
の存在も仏の教えもラマの導きによって知り、また行うのであるから、ラマこそが自分を仏道に入らしめる真実の導師であり、ラマの教えなくしては絶対に成仏が不可能とされている。この点は他の仏教と異なることであろう。

ラマ教は革命までのモンゴルの国家宗教であり、活仏（上人、聖人）は政教両界の指導者であった。これは清朝も快く思わなかったが、モンゴルの各王侯によって承認されていた。

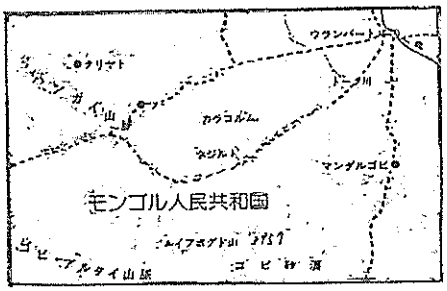
活仏は多数の弟子や農奴を持ち、２０世紀の初めには其の数は約１５万人にものぼった。即ち活仏と共に住民の約半数が直接、宗教会の管轄下にあった。しかし、この状態は１９２４年の活仏の入寂とともに一変した。

公的には信教の自由は保証されていたが、実際は２０世紀の半ばまではラマ教は制約、圧迫された。寺院の大半は破壊され、或は非宗教的用途に転用された。歴史的、美術的に価値のある２、３の旧寺院は博物館に変わり、ウランバートルのガンダン廟と其のほか４寺廟が寺院として再建された。

（下図は関係地図）



7月7日 （金）曇～晴 ホジルトへ



今日は牽牛・織女の二星が年に１回相見える七夕、この日にモンゴル帝国のカラコルム遺跡（右の地図参照）の見学に訪れることになり、先ずホジルトに向かって飛んだ。

珍しく小雨の降る中を６時にホテルを発ってウランバートル空港に到着したころには、東天は朝焼けが美しく空を染めていた。朝焼けは雨といわれるが、願わくば晴れるようにと祈るばかりであった。

ホジルト及びゴビ行の外国人観光客数十人が空港に集り、ゴビ行が先行して飛翔した。温度１０°Ｃ以下の降雨をついてプロペラ機は滑走路へと誘導路を進み、０７・１０に鵬翼は宙に浮かんだ。猛烈な寒さを予想して冬物を着用した感は的中である。

下界は蛇行する川の流れだけが視界に映り、ホジルトの天候を気にしているとき、西の雲間に明るみが見え出し、天気東遷の原則に一縷の望みをつないでいた。

この悪天候では七夕を待っていた孫達も、期待外れではないかと思いを馳せていたところ、丸坊主の赤茶げた丘の間に皺だらけの草原が開けていた。モンゴルの西北地方は森林が多く、その影響であろうか、ホジルトに近ずくにつれて大草原に変化した。

草が生えているから放牧が成り立って集落をつくり、自然現象は天の恵である。見えて来た小さな湖沼はホジルト接近を知らせるようで、雲の切れ間から漏れている陽光は部分的に山を照射し、雨の心配も薄らいできた。

家畜が懸命に草を食む草原に白いゲルが点々と見え、傾いた廃屋らしいゲルも交じっていた。草を求めて移動した跡かもしれない。寒暖の厳しい滄熱の気候を克服し、人類が無限に此の世に生まれてくるのは、草の蒼然と地上に生えるのと同じだ。人民のことを「蒼生」と呼んだのは草原から生まれた言葉であろうか。

０８・１２にホジルトの空港に到着。空港というものの草原の滑走路に小屋が一つあるだけで、マイクロバスは搭乗機に横付けであった。気温は９°Ｃ、風速１０ｍの体感温度は真冬なみの０°近く、地平線上に去来する雲を眺めながら胡散臭い道を通って、１０分後にゲルの中で旅装を解いだ。

ホジルトには外国人観光客用のベース・キャンプがある。ウランバートルの西南約４５０㎞、カラコルム遺跡の南方約６０㎞の地点に位置し、村には鉱泉の出る国民保養所も建設され、モンゴルの一大観光地（？）となっている。

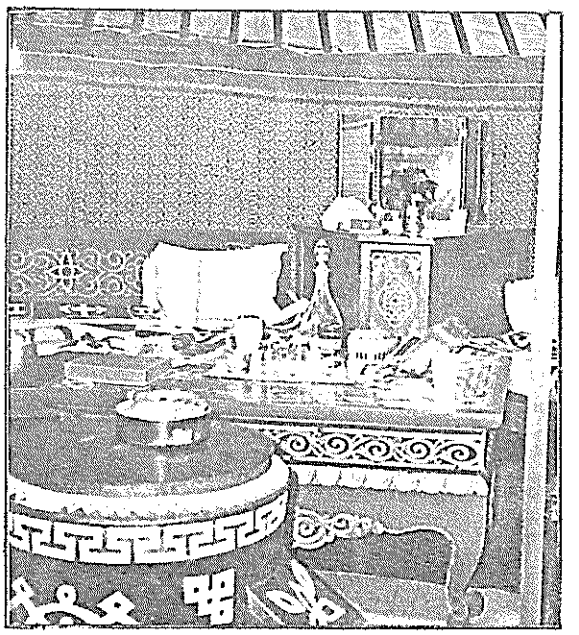
ベース・キャンプのゲル

我々外人用のゲルは３０個ばかり整然と並び、ゲルをつなぐ板敷きの道路が設けられている。割り当てられた私のゲルは３人用を２人で使用することになった。

ゲルの真中にある薪ストーブは赤々と燃え盛ってサービスは満点、電燈も生活に支障のないほどの明るさであった。朱塗りのテーブルにはお湯も準備され、酷寒の地の

行き届いた接待は居心地がよい。イルクーツクやハバロフスクのホテルよりも感じは良好で違和感は全くなし。

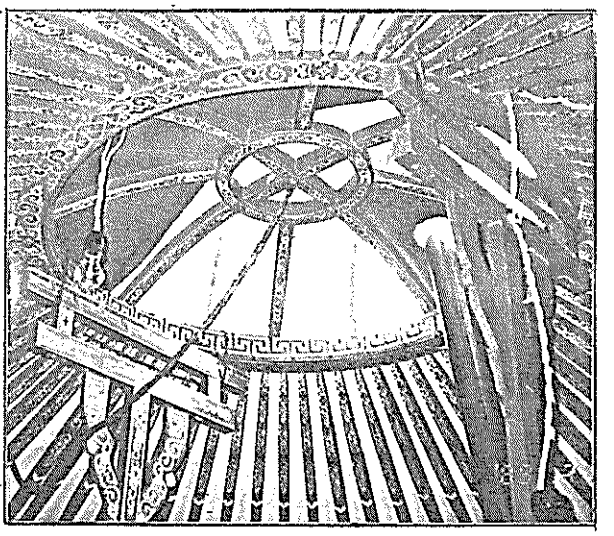
蒙古風が吹き曝して外は日本の寒中と同じような寒さだ。冬ジャンバをはおって冬装束に着替え、ツアーの中には冬物を持たず寒い寒いと連発する者もいたようだ。（右はゲルの内部）



早速持参してきた湯沸器で昆布茶をすすり、コーヒを飲んで一息いれた。これも春秋に富んだ時代の満州の体験が物を言ったのである。

ゲルは遊牧用のものと違って観光用の固定したゲルは豪華そのもの、中国各地の博物館に展示した「包」に近い立派なものであった。

朱塗りの角材を使用した天井、同じく朱塗りの寝台は王侯貴族のものに劣らず、テーブル上のガラス製の水差しにコップ、モンゴル特産の分厚い毛布、板敷きの上に純毛の絨毯、鏡に洋服掛けに手箱、モンゴル模様を描いたストーブなど、世界の田舎と予想した僻地に、よくもこれだけ整えたと驚くばかりであった。



白い茸のようなフエルトの天幕生活は、脳漿を絞った智恵から生まれた生活様式で、再び体験出来たことは幸福至極である。

蒙古の目まぐるしい戦乱と興亡、離合と集散、常なき軍閥抗争の時代を想起していると、地の果ての異国にきたという実感が湧いて来た。久しぶりに味わった旅の醍醐味の満足感であった。（上は天井の骨組）

茸のような白いフエルトの天幕の扉を開き、心おきなく胸一杯に深呼吸をした。それほどゲルの中は温かく、雪国の北陸の人間としても羨ましい感じがしていた。

キャンプには日本国有鉄道時代の貨車にそっくりな家があり、小さなドルショップとなっていた。初めて見た「嗅ぎタバコ」は実に珍しいものだ。ライターに似たケースの中に香料を詰め、其の粉を鼻の穴の中に塗り込むと良い香りがする。体臭の強い家畜の中では之が必要となるだ。実にモンゴルらしい雰囲気を煽っているようで、少々買い求めて御土産とした。

遊牧民を訪ねて

キャンプを１１時に発って遊牧民の生活を見学することになった。

荒野の草を喰い尽くした遊牧民は、新たに豊かな土地を求めて旅に出た。そして遥か彼方の水と草のありかを嗅ぎつけたのは馬だったと謂れている。この本当の姿に肌で接触できる楽しみは興味深い。

西に向かったバスの窓から、ゲルと木造家屋の入り交じったホジルトの村が見えていた。４㎞四方ほどの村は幾つかに分かれて板塀で囲み、人口は概ね４～５０００人程度であろう。ウランバートル以外では初めて眼にする集落で、分散した遊牧の世界では、これだけ集団化すれば大都会かも知れない。

曠野に蜿蜒と延びている赤土の道は人馬の通った跡にすぎない。交叉する車は自由に轍を離れて草地を走っていた。波状になった道はバスを上下右左に振動させ、全身の筋肉を硬直させて揺れと戦っていた。（上の写真は出迎えた子供とゲル）

目標になるものもない広大な原野を走ること小１時間、草原の中の２つのゲルに向かって進んだ。老夫婦に２人の男の子、お嫁さんと孫達全員が破顔一笑して歓迎してくれた。寄せては返す波のように静穏な夏と厳しい冬に翻弄されながら、逞しく生きなければならない生活は、彼等の背負って生まれた運命である。

予定のないように思われる人生に不安はないのだろうかと思いつつ、導かれるままにゲルの中に入った。予想に反した立派な生活に先ず驚かされた。正面に客用のベッド兼用の椅子があって仏壇も祀られ、両側に親兄弟たちのであろうか、写真が飾ってあった。（右は夫婦と私）

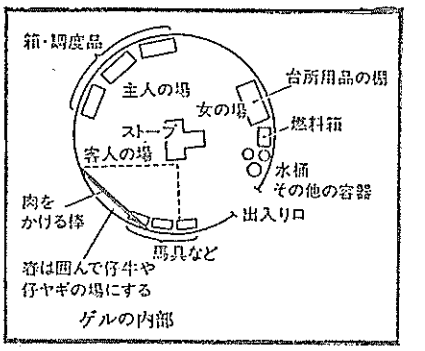
軍服を着用した青年時代の主人の写真が眼に止まった。眉目は清秀で気骨精悍な顔立ちをした彼は、第２次大戦でソ連軍に参加した勇士かも知れない。ラジオや携帯ミシン等の調度品よりも、彼の写真の方が格別な印象を与えていた。

美しい蒙古服を着た夫人は小さな茶碗に馬乳酒を注いでくれた。彼の有名な馬乳酒はヨーグルトの味がしてアルコール分はないようだ。誰かがアルコール分は３％位

だと云っていたが、酒に弱い私の顔も赤くならない程度であった。

引き続いて菓子が出された。遊牧民独特のものらしいチーズで作った菓子は風味満点。お嫁さんはストーブに燃料をくべていた。これは乾燥した家畜の糞で、箱の中に山盛りになって蓄えてある。

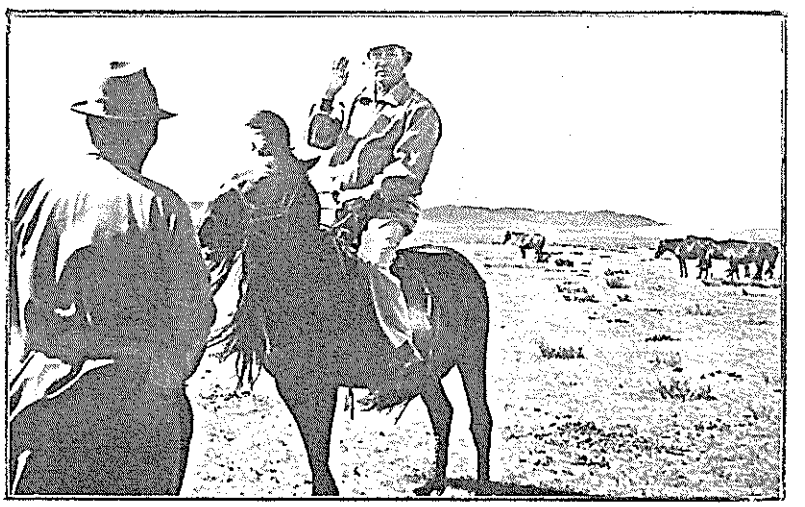
チーズを作る皮の袋を隅に吊るし、棒で掻き回す光景も興味深く、これらは凡て女性の仕事である。



ゲルの内部

国の数だけ習慣にも数がある。小さなゲルの中に何の不自由もなく暮らしている彼等は、天衣無縫、「一箪の食、一瓢の飲」という清貧な暮らしだ。一斑を見て全豹を知る例の通り、そこに古代蒙古の強さを感じたのであった。（上はゲル内部の見取図）

大自然の中に生きるモンゴル人の平均寿命は男子は６９歳、女子は６８歳と云われている。乱痴気騒ぎの喧騒の渦巻の中に文化生活だと威張っているよりも、天与の行雲流水の生活の方が余ほど長生きを感じ、炯眼のような気がするのだ。矢張り私は大陸向きである。



温かいゲルでの歓待を受けたのち、１００ｍばかり離れたステップの馬群の所に案内された。１歳ほどの仔馬が１０頭ほどロープに繋がれ、のんびりと腹這いになって寝そべっていた。

親馬たちは長かった冬のあとにやって来た夏（春は無いような感じがする）を楽しんで、懸命になって短い草を食べ、仔馬に与える馬乳作りに余念がない。

ステップの遠い場所に放牧された親馬たちは仔馬の哺乳を忘れず、乳房が一杯になると必ず仔馬の所に帰ってくる。母性本能を巧みに利用した一石二鳥の放牧姿を驚嘆の眼で見つめていた。

長男は馬の群れから一頭の馬を選んで連れて来た。ツアー人達は交互に乗馬して写真に収まり、或る者は和気靄々として家族達と微笑を浮かてベシャッターを切っていた。本当に笑いは人種を取り除く最善の策のようであった。

荒武者と駠馬の躍り上がるような光景を彷彿さにて飛び乗ってみた。一昨日の暴れ馬と違っておとなしく、手を上げながらポーズをとり、数々の手厚い歓待に感謝して彼等一家に別れを告げた。（上の写真は私の乗馬姿）

カラコルム遺跡

午後2時にキャンプを発ち、待ちに待ったカラコルム遺跡（ホジルト北方６０㎞）は今次旅行の最高の圧巻である。飛行場の草原を半周して北へ疾走したバスは、内臓が破裂しそうな物凄い振動であった。しかしモンゴル最大の遺跡への憧れはこれに勝り、進路上のラクダの群れまで我々の眼を楽しましていた。

時折、南の太陽は雲の切れ間から曠野を照らし、緑の中に混じった白い石が目立って来た。何時かの新聞によると地球観測衛星の撮影の結果、蒙古の砂漠化が進行していると報道していた。その原因は過剰な放牧だというのである。見れば見るほど草は短く、その上まばらであり、同情に耐えない乏しさだ。

多岐亡羊の道を走ること約１時間、小さい流れが網膜に写って一条の用水も水を流していた。其の周りの耕地に大豆を植え付け、柵を作って家畜から守っている貧しい光景は、部落の近いことを知らせていたのである。

彼方に見えた白い城壁に一行は注視した。世界を風靡した金城湯池の帝都は、今は孤城落日の悲哀を遺すのみだ。栄枯盛衰は世の常とは言いながら、虹のように美しかった都が、虹のようにはかないものになっていた。（下はカラコルム遺跡の城壁）

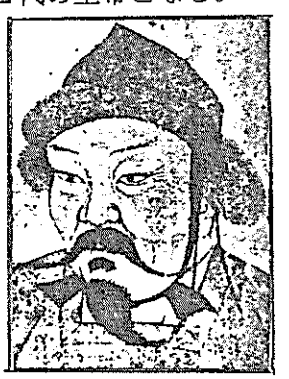
「カラコルムの歴史」

「カラコルム」（哈剌和林）は蒙古帝国の第２代皇帝・太宗（窩濶台）、第３代皇帝・定宗（貴由）、第４代皇帝・憲宗（蒙哥）、第５代皇帝・世祖（忽必烈）時代の約３０年間にわたる首都であった。（中国では哈剌和林を略して和林と書いた）

初代の太祖（成吉思汗）の時代には蒙古の首都というものは無かったが、太宗時代になって其の必要に迫られ、太宗の７年（１２３５年）に新都をカラコルムに定め、「万安宮」という宮殿を造営した。

【オゴダイ（１１８６～１２４１）】

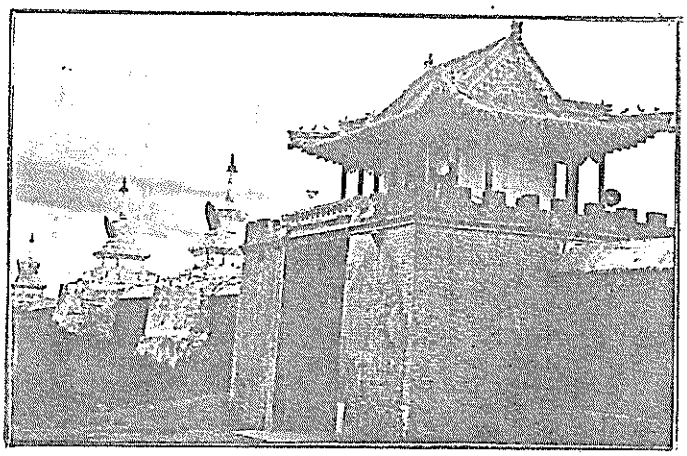
蒙古帝国第２代皇帝（在位１２２９～４１）、廟号は太宗、チンギス・ハンの第３子。１２２７年に父が死去し、その遺言によって第２代の皇帝となる。ホルホン河畔に帝国の首都カラコルム（和林）城を建設し、ここを中心にして各方面に多くの駅站を設け、帝国内の交通網を完備した。



対外的にもイラン、南ロシア征服のため諸将を派遣し、自らも金国の討滅を行い、その首都の汴京（河南省開封）を陥れ、南方では南宋、東方では高麗の征服、西方ではヨーロッパ方面の征服計画を決定し、ハンガリー、ポーランド各地を攻略した。（右はオゴダイ・ハン）

「遺跡の見学」

歴史と現在の遺跡の状態とを対比しかながら南門の前に立った。遺跡を囲む城壁の上には１０８の煩悩を表わした白い卒塔婆が並らび、４００ｍ四方の城壁は陽の光を一杯に浴びていた。（右の写真）



砂漠に埋もれた古代の夢が誘っている全貌を一瞥し、城門をくぐって中に入った。

夢幻の彼方にあった遺跡は廃虚のような悲哀を遺すだけだ。荒れ放題になった遠くの隅に数少ない寺院が見えていた。人々を微妙幽玄の世界に陥らしめた面影は消え、「創業は易く守成は難し」という古語を思い出させた。

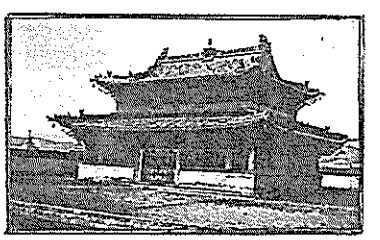
モンゴル帝国の宮殿は僅かに礎石が遺るだけである。１３８０年、明の侵入で破壊された遺物の石や瓦を利用して、１５８２年にアバタイ汗の命令で宮殿跡に建立した三つのラマ寺院「エルデニ寺」が、卒塔婆に囲まれた荒れ地の隅に建っていた。現在は宗教博物館として保存されている。

帝国が建設された当時は６０の寺院と１０００人のラマ僧が住んでいた。歴代の汗（王）達は「神仏を崇んで神仏に頼らず」という信念のもとに行動し、常に兵法の道から離れず、専ら生活即兵法だったのではないだろうか。

砂漠の蜃気楼のように出現して肩で世界の風を切り、竜車に立ち向かう螳螂を踏み倒して、海内無双の大帝国を建設したのは此処だった。此の地で計を帷幕のうちにめぐらし、勝を万理の外に制したのは戦略家として天晴れと云う外はない。蓋世の気、経国の大業の響きが聞こえて来るような錯覚に陥っていた。

先ず城内中央にある小さな石堂から参観が始まり、続いてエルデニ寺・東側の２層の殿宇に入った。１６世紀建立の此の寺院は、左の室に若年時代の仏陀の像（ハジャウス作）、真中の室も同じく仏陀の像（マッドレア作）で木の柱に竜を彫刻し、天井は曼陀羅、四周は刺繍した仏画で飾られていた。右の室は仏陀の生涯を描いた壁画で埋まり、ラマ寺院の重々しい威厳が漂っていた。

エルデニ寺の中央・２層の殿宇には真中に冠を被った仏陀、その左側が薬師如来、右側が法律を司る仏の像が祀られていた。（右は中央の寺院の全景）



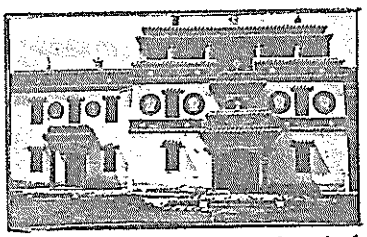
左右に立った守護神の像は、左は天邪鬼（アマ・ビンク）を踏み付けて破邪顕正を現わし、右の勇ましい乗馬の像は勇猛果敢を表現しているのか、ラマ教の加護によって世界制覇が出来たのだという印象を与えていた。

エルデニ寺の西の殿宇は１９６５年から僧侶が不在だという。東側の建物と同じく若い時代の仏陀の像が祀られ、１６世紀時代から祈願の場所として使用されていた寺院である。

上記したエルデニ寺の三殿宇は１６世紀のものだけに、古色蒼然とした静寂の中に感動を高揚させ、歴史と共に往時を偲ばせてくれたのである。

エルデニ寺の三殿宇の西側に建っている小さいホホズム堂（青い寺の意、１６世紀）は、宇の通りの青色の瑠璃瓦をのせて廃虚の中に一段と映えていた。

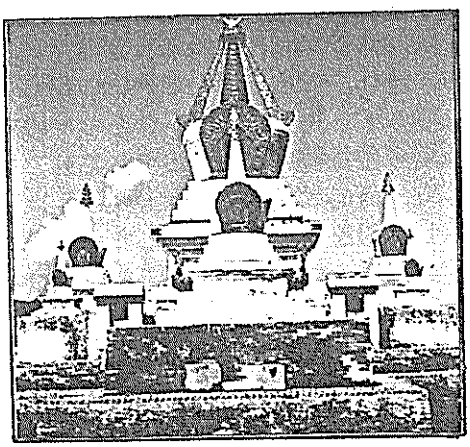
更に西に建っているジャナライク寺には、正面にジャムスラ（閻魔大王）が安置され、過去、現在、未来を表わす３つ目の仏像から、安産を祈願する仏画など種々の仏が祀られていた。



最も西の端にある白亜の殿宇はチベット寺であった。ラサ（チベットの省都）のポタラ宮殿やジョカン寺を模倣した此の寺は、その白壁が強く我々の目を刺激し、カラコルム遺跡の中で最も荘厳な祇園精舎の感じがしていた。

１６世紀建立の此の寺には現在のダライ・ラマの像を祀り、彼もここに参詣したという由緒ある寺院であった。（彼は現在インドへ亡命）

寺の正面にはブジサンフーパという高僧の像があり、その周りは仏画で埋め尽くされていた。院内の数々の仏像もチベットに因んだものであろうか、記憶出来ないほどである。２階には羅漢像に似た異様な顔をした仏像が並べられ、髭を生やしたものから太鼓を持ったものなど、物珍しい仏像ばかりであった。



チベット寺の北側に五基の白色の仏舎利塔が高く聳え、他は歯牙に懸くるに足らずとばかり、孤然としてラマ教のシンボルのように天を衝いていた。（右は仏舎利塔）

仏を崇拝する宗教意識は国家意識よりも強く、近代国家以前の状態が此の仏舎利塔であろう。

いよいよ終わりに近づいた。世界を牛耳って気焔を上げた遺跡を振り返って見ると、往時の闘争も文化現象の一つだったのかも知れない。孤独から文化は生まれないばかりか、闘争は創造の主体であったように思えてならない。

宇宙的な広がりも神話的な要素もない辺鄙な片田舎のカラコルム、世界に万丈の気を吐いた蒙古帝国の嚆矢となったカラコルム、その歴史はその時点の最善の選択であったと思いたい。

閃く剣光、轟く馬蹄、殺伐悲壮を極めた幾多の征戦の栄光は、蒙古民族の明察機眼と敢為勇往が掉尾の勇を振るったからだ。しかし存亡興敗は世の習い、時は無常の歳月を刻んで今や廃虚の姿となっていた。

粛然と襟を正して感銘を受けながら、栄枯の歴史を何時までも鮮明に思い起こし、見学時間も経過して離別することになった。

卵を割らないでオムレツは作れないのと同様に、老体に鞭打って万里の彼方・カラコルムを訪れたことは、私の歴史に輝く一頁を加えたと信じたい。

１７時に遺跡を出発したが蒙古の太陽は未だ高く、バスに揺られながら人間の価値を考えていた。死後生きていない者は生きていたとは言えない。死んで其の人の名も

忘れられるようでは、生前の彼は価値がなかったのだ。カラコルム遺跡に名をつらねた古人の名は永遠の歴史に残り、価値のある人生を送った人達である。

モンゴルの歴史の概要は２２頁に記載したが、我々に馴染の深いモンゴル帝国に就いても簡単に記載する。（本年はチンギス・ハン紀元７８４年）

モンゴル帝国

「帝国の起源と発展」

１２０６年という年は「鉄木真」がアムール河の支流のオノン河（２頁地図参照）において、部族連合の長「成吉思汗」として推戴された年で（太祖、１２２７まで在位）、モンゴル帝国の発端である。「チンギス」とはシャーマン教の「光の精霊」の名に由来している。(右はチンギス・ハン像)

モンゴル族の最初の攻撃は西夏王国で、次いで北中国に向けられ、金朝を破って１２１５年、北京が陥落して黄河以北はモンゴルの手に入った。金国は北方モンゴルと南方の南宋との間の緩衝国の役割に過ぎなくなった。（金は満州族）

別の遠征は中央アジアに向けられ、１２１８年に東トルキスタン（西遼）を侵してブハラ、サマルカンド等を占領し、続いて南ロシアへと進んでクリミヤ半島を攻撃、トルコ系のホラズム地方を領有した。

１２２７年にはモンゴルの版図は西はカスピ海から東は東支那海、北はシベリア、南はパミール、チベット、中国中央平野に及んだ。

歴史を繙いてみると、天から派遣された使者として世界を統治するという考えは、チンギス・ハンを始め彼の後継者も心に抱いていた。それは「一つの世界に一人の統治者」という思想が、長い伝統を持った中国の影響ではなかろうか。

草原に遊牧帝国を建設し、その支配を中央アジアの先進文明地帯にまで及ぼし、ひいては全世界に拡大しょうとした事は、恐らく陸上貿易路線を支配する戦略的意図だと推察できる。

一方、軍事的な成果の驚嘆すべき原因は、数的優勢というよりも優れた戦略・戦術であった。騎兵を主体としたモンゴル軍は高度な機動性を持ち、その戦術と装備は広大な平野、平坦地に適していた。

又、攻撃に先立ち、彼等は通例として自発的投降を求めた事も特徴であった。投降した部族民や兵士はモンゴル軍に編入され、同盟軍として扱われた。したがってモンゴル人は小量に過ぎず、諜報、宣伝、謀略を巧みに利用した戦術は驚嘆の至りだ。

「チンギス・ハン帝国の構造」

チンギス・ハンが創設した帝国は幾つもの文明を吸収したが、それらの文明は既に強力で統一され、組織された国家権力が発展していた。それに反してモンゴル族の社会は牧畜であり、分権制、父系制、部族・氏族制であった。

未開発社会と支配下の文明社会との間、又、比較的少数の異民族支配者と数的に強

大な被征服民との間には、対立関係が存在していたことは当然である。

征服の初期においては、モンゴル人は草原の社会構造を強制しょうとした。被征服部族を奴隷とし、その功績のあった軍事的指導者に個人的な属領を分賜するのが習慣であった。したがって強力な軍事的圧力のもとに容赦のない搾取が初期の特色で、１２３４年頃まで続いた。

中央権力はチンギス・ハンが握り、それを補佐する軍事上、政治上の顧問が存在した。顧問は国籍を問わず汗によって任命されたが、その影響力は大きかった。例えば嘗ての金朝の臣下で契丹人の「耶律楚材（ヤリツ・ソ・ツイ）」はチンギカ・ハンを説得し、北中国を牧場化することを止めさせている。

モンゴル帝国は未だ正常な意味での国家とは云えず、広大な領土は軍事的支配によって巨大になったに過ぎなかった。チンギス・ハンの死後、帝国が拡大しても同じであった。

元来、モンゴル人は国家観念がなかった。帝国は汗個人の財産ではなく、王族全体の財産とみなされていた。既にチンギス汗の生存中に４人の愛児に分与しており、次第に分権化が進行したようだ。

第１期は帝国の統一が比較的に保持されており、大汗が全家系の承認を得ていた時期であった。第２期は個々の諸帝国が殆ど完全に独立し、共通の歴史を持たなくなった時期である。

「チンギス汗以後の統一期」

チンギス汗の死後、新大汗（最高位の汗、皇帝）を選出するために貴族の集会が招集され、長子相続ではなく弟のオゴダイ（第２代、在位１２２９～４１）がなった。彼は中央部のホルホン河畔のカラコルムに構えて征服の戦闘を指揮した。その命令は全アジアをおおう駅伝制によって伝達されていた。

東アジアに於ては、北中国を支配した女真族（満州族）の金国の残存勢力に向かって戦いが始められた。当時、江南に逃避していた漢人王朝の南宋はモンゴルと同盟を結び、１２３４年に金都の汴京（ベン・キョウ）（河南省、北宋の都の開封）は、モンゴル軍と南宋軍の共同攻撃で陥落した。

敵を追撃するモンゴル騎兵

１２３６年には新しく西方遠征が開始された。その企図はロシアと更に東ヨーロッパの占領であった。（右は追撃するモンゴル騎兵）

３８年にブルガリア帝国を占領してロシア領に進出し、４０年にキエフが陥落、ポーランドからハンガリーに向かって破竹の勢いで進行して行った。

これに先立つ何年かにわたり、モンゴル軍はイラン及びグルジア、アルメニア（現ソ連領）にも進撃したが、４１年１２月のオゴダイ

大汗の死によって進出を中止している。若しもオゴダイ大汗の死去がなければ、ハンガリーはモンゴル領となっていただろう。

新大汗の選出は意見の一致が見られず、紆余曲折しながら定宗（第３代、１２４８まで在位）、憲宗（第４代、１２５９まで在位）と続き、アジア東方の四川省から大理国（雲南省）、安南（ベトナム）を攻撃していた「フビライ汗」が、第５代の新大汗の位についた。

フビライの即位した年は、モンゴル人が各地に建てた諸帝国の歴史の転機であった。理論的にはフビライは大汗として、東は中国、朝鮮から西はイラン、南ロシアにわたる大帝国の統治者であった。しかし占領地の地域差が次第に強く感じられてきた。

フビライは何よりも自分自身を中国皇帝とみなすようになった。そして他の領土も同様に次第にモンゴル的でない方向へと進み、他の宗教、主としてイスラムと仏教に改宗して行った。

フビライは首都を北京に移して中国文明に改宗し、モンゴル地方は此の帝国の真の中心でなく、フビライの領土の中心ですらなくなった。

「元朝」

フビライ汗はそれまでの中国では最も偉大な皇帝の一人であった。１２７９年に南宋を滅ぼして中国の統一を達成した。そしてモンゴルの支配を海外に拡大しょうとして、幾度も試みたが失敗している（我が国に来襲した元寇の乱を含む）。しかし彼の後継者で彼に及ぶ者は無かったと云えるだろう。

彼の次ぎの皇帝・成帝（在位１２９４～１３０７）以降は、血縁間の対立や宮廷内の陰謀が皇帝の権力を弱体化し、最後の皇帝・順帝（在位１３３３～６８）は１３歳で皇帝となった。

このように中国におけるモンゴルの権力は衰退し、漢民族の叛乱指導者・朱元璋によって１３６８年、北京から駆逐され、朱元璋は明の皇帝となって南京で即位した。

モンゴルの最後の皇帝テルムは北方の草原に逃れて１３７０年に死亡し、１世紀にわたるモンゴルの中国支配は終わりを告げたのである。

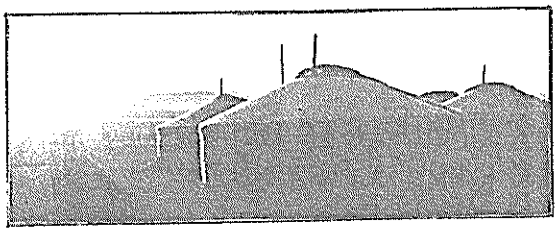
「元朝以後のモンゴル」

１３６８年から何世紀もの間、モンゴル族は草原の原住地に閉じ込められていた。しかし過去の栄光と中国支配の怨恨から失地回復の試みを繰り返したが、中国の遠征軍に撃退されてしまった。

東部モンゴル族は１６世紀には中国にとって脅威でなくなり、１７世紀に入って内モンゴルは満州族の好餌となって清朝に服従した。一方の西部モンゴル族はカスピ海北方の草原に移住したり、或は東トルキスタンのイリ川流域に定住したり、又はシベリアに逃亡しながら、あらゆるモンゴル族は外国勢力の臣下となった。

そして１９１２年に清朝が倒壊すると外モンゴルは独立を宣言したのであった。

7月8日 (土) 晴 ホジルト～ウランバートル



昨夕の茜色の夕焼けは実に神秘的、幻想的で蒙古ならではの景観であった。朝日に自分の影を長くひき、夕日にその影を踏み、三軍を叱咤した草原の戦いが夢のように描写されていた。

曠大な草原を覆う満天の夜空は輝く星群で一杯であった。天空の一惑星に過ぎない地球の上を、蟻のように這い廻る愚かな人間の歴史は、宿命とはいえ何と小さなものであろうかと、天を仰いで嘆息していた。

ゲルの煙突の火は赤々と煙を上げて露営の夢のようであった。別のゲルの連中を交えて昆布茶やカップヌードルを提供した。久しぶりの日本の味だ。美味とは食物そのものにあるのではなく、味わう舌にあるのだと笑いながら一時を楽しんでいた。

夜は深々と更けていく中を夜勤の者がストーブに薪をくべ、寝心地は極楽であった。然し乍ら「老眠は早く覚めて夜を残す」だ。老人の睡眠は短く眠りは何かに妨げられて早く目を覚ました。

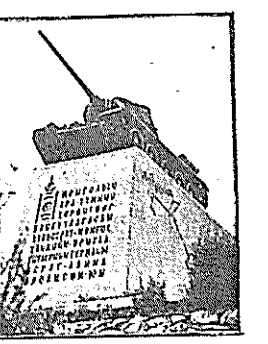
５時に起床してゲルの扉を開けると真っ白な霜が降っていた。標高１６００ｍの高原とはいえ、７月に霜が降るとは矢張り大陸だ。霜は軍営に満ちて秋気清しの川中島の思い出を夏に味わった。風に耳を向ければ凍傷にかかり、手袋が破れて指が腐る苛烈な環境は、強靭な人間をつくり出す風土であり、生き抜く執念を養っている。

平旦の気を胸一杯に吸い込むと吐く息は真冬のように白い。次第にキャンプの樹木に恵の光が明るさを広げ、胸のすくような今朝の爽やかさは理想に走る若者の気分であった。（上の写真は朝日に映えるゲル）

飛行機は０８・３０にウランバートルへと滑走を始めた。戦争中の前線基地の飛行場を彷彿させる草原を翔び上がり、昨日とは一変して快晴の空は荒野を覆っていた。

４０人乗りのプロペラ機はナーダム祭に訪れたフランス人と我々一行のみだったが、古代モンゴル帝国の遺跡が世界の観光名所に仲間入りしたことは実に素晴らしい。

１時間の空の旅を終えて０９・３０にウランバートル空港に到着。市内に向かう街道上に又もやソ連戦車が見えて来た。政権は銃口から生まれると言わんばかりの戦車は、平和を願うモンゴルには相応しくない存在で、全く展示した真意が判らない。（右はソ連戦車）



１９４５年のベルリン攻略戦ではモンゴルは８万人もの将兵を派遣させられ、多大な犠牲を蒙っている。僅か２００万人の小国に、これほどまでに協力を強要した唯我独尊的な残骸は、見たくもない存在で眼の毒だ。

ホテルの部屋の隅々まで陽が差し込み、幸いに疲労も覚えず、午前中の休憩をベッドの上に寝そべりながら、健康だから病気があり、幸せがあるから不幸があるのだと考えていた。つまらない旅の感傷である。

国立博物館

午後の見学は国立博物館から始まった。市街はナーダム祭の準備も進んで随所に赤旗が風になびき、小学生はマスゲームの猛練習中であった。

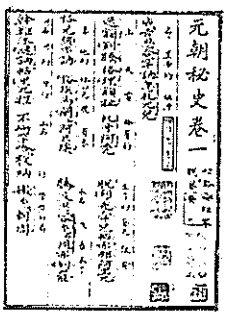
玄関正面には革命記念日に相応しい勝利の絵をかいた幔幕を吊るし、モンゴル最大の規模を誇る博物館は歴史、民族、学術、文化の諸部門にわたって展示していた。

１９４２年に建立した館の中央に国土の模型があった。最高はアルタイ山脈の４３７４ｍ、最低は５４０ｍ、平均高は１５２０ｍ。私の眼を引き付けたのはノモンハン、私の出身聯隊であった札幌歩兵第２５聯隊将兵の奮戦したハルハ川も表示されていた。

我国の４倍の面積を持ったモンゴルには、湖沼の数は３０００以上もあり、石類の展示室には大化石から珍しい貴石、獣類の室には白ラクダ、白熊、白馬（特産）、大きな角の羊や山羊、大鹿、狼、狐、白テン、山猫、豹、ビーバ、マングース、リス、ゴビトカゲ、サソリなど、魚類の展示も７６種類に及び、鳥類も大鷲、大鷹から無数の小鳥まで展示されていた。特に１２５００万年前の恐竜や１ｍほどの小恐竜、５０万年前の原始人の骨は流石に内陸の蒙古らしいものであった。

農産物に乏しい此の国では珍しい作物だろうか、大麦、小麦、燕麦、ヒマワリまでも展示し、食文化の発達した文明国の我々には考えられない事である。

私の最も興味を抱いたものは、蒙古の秘史を漢語で表現した「元朝秘史」であった。これはモンゴル民族の始祖伝承からチンギス汗の一代記を書いた書物で、古代蒙古の歴史を知る上では唯一の書であり、歴史を書き遺さなかった蒙古では貴重な物だ。（右は元朝秘史の写本）



２４頭の牛で牽引する皇帝用の移動ゲル（下に車が付いている）は絢爛豪華なもので、世界制覇時代の貫禄充分と云えるだろう。又、ウイグル文字からモンゴル文字に変化した過程も珍しい展示品の一つであった。

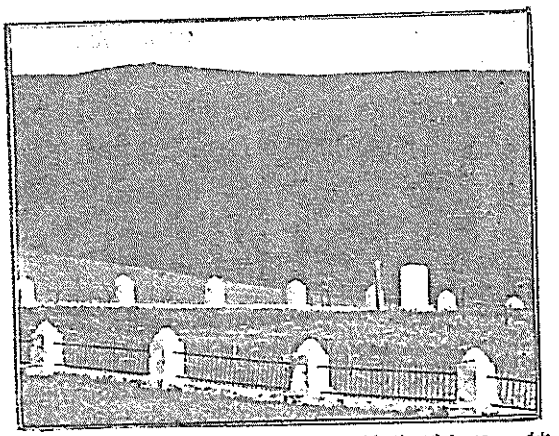
支配民族に対する被支配民族の怨恨の強さは、我々日本人には理解出来ないほど強烈であった。清朝の悪政を描いた数々の絵を、詳細に亘って説明する通訳の言葉にも窺えるのであった。然し乍ら元朝の漢民族支配の事は全く展示されていない。

蒙古民族には２０種類以上の民族があり、それぞれ違った生活習慣を持ち、その民族衣装が飾られていた。現在、モンゴル人民共和国の大部分を構成し（約２００万）、中国の内蒙古の約２０％（約４００万）を占め、東トルキスタン、青海省、チベット、旧満州地区、シベリア等に分布して、総数は凡そ７～８００万と云われている。（ソ連領の蒙古人をブリヤート族と呼ぶ）

モンゴル人民共和国では人口増加策しとて、８人以上の子供を産んだ母親には「国の母一等勲章」、５人以上は「二等勲章」を授与して賞金を出している。漢民族諸君の「一人っ子」政策の感想を聞きたいものだ。（少数民族は無制限）

蒙古の地勢、風土の中に培われて栄劫の光と燃えて興ったモンゴル民族、星霜は移って古人は去ったとは云え、好奇の瞳をやりながら参観した博物館には、燦然とした文化遺産が遺されていた。古今を通じて此の国の歴史を学んだ事は意義深い。

日本人墓地



モンゴル政府は我々の希望をいれて日本人墓地の参拝を許可した。政府の許可なしに慰霊することが出来ないと聞き、入国と同時に願い出た我等の赤誠が天に通じたのであった。

生首を担保にしたような私等の一徹な誠意に対し、政府は尊い人間愛の心で以て応えてくれた事に先ず感謝したい。

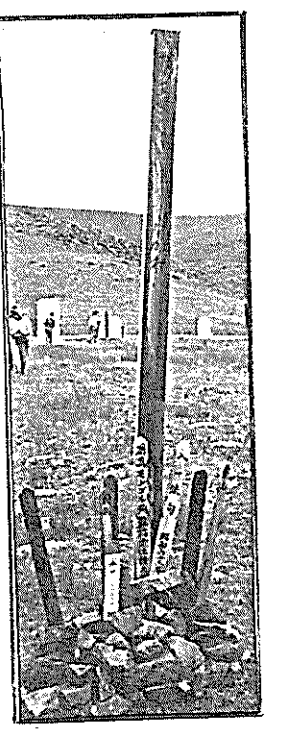
しかし戦後の抑留犠牲者の事を想起すると、記載する事にも苦痛を覚える。

異境の地で鬼籍に入られた同胞の慰霊は、所属した部隊の違いや戦争を知らない人達にも、日本人としての義務がある。特に盂蘭盆会の近づいた本日の慰霊は、誠に意義深いものがあったと言える。

熱意のあるところには必ず道が開けるものだと、政府の好意に感謝しながらバスは東へと走った。中心街を離れた郊外には、原始的なスラム街を思わせる貧弱な木造家屋が建ち並び、周囲の草原には羊の群が草を喰んでいた。

緩やかな緑の丘の下では少年少女たちの弓の練習をする風景が展開し、反対側の丘の裾野に白い一軒屋が建ち、丘の中腹から上にかけて白い柵が見えていた。此所が日本人墓地である。（上の写真は日本人墓地の墓石と柵）

英霊の静かに眠る丘は墓地に相応しい緑の青山であった。遠い地鳴りのような歴史の足音が響き渡り、声をあげて悲哭したい心境を誘うのである。



一軒屋の白い建物は墓守の家であった。我々一行１５名の姿を見つけて駈足で丘を登り、墓地の扉を開けてくれた。各人各様に金品を墓守り一家に渡して感謝の気持を吐露したが、戦争体験のない人達も快く共鳴してくれた心情に御礼を述べたい。

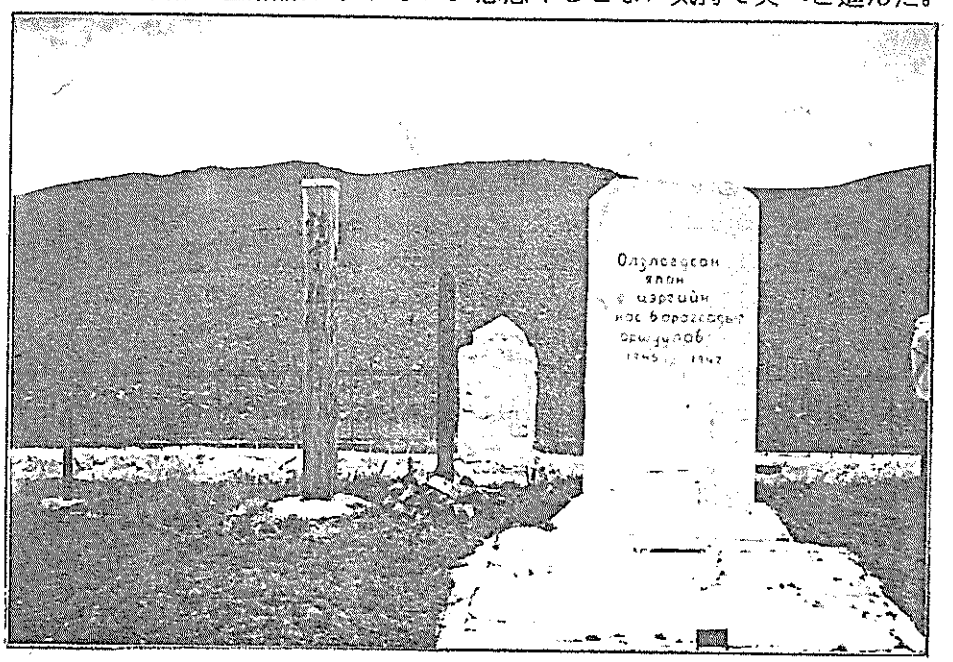
鉄の扉の鉄板には英霊の氏名、死亡年月日、出身県が刻まれ、モンゴル赤十字社及び日本モンゴル協会と記名されていた。一方の扉には「祖国の復興を報告し、御冥福を祈りつつ」の文と共に、松崎　陽氏ら代表者の氏名を刻み、墓地の埋葬図が細かく鉄板に刻まれていた。ステンレス鉄板の使用は永久保存のためであろう。

扉の内側にオボ（３１頁参照）のように石を積みあげ、その上に数本の卒塔婆が立っており、歳月は白かった墓標を黒く染めて燦々とした陽を浴びていた。（右は卒塔婆）

「草蒸すかばねとなるなかれ」（現物のまま）と書いた墨痕も薄く消えていた。側面に「慰霊３３年全モンゴル１６８４柱」と書いてあるのは、恐らく戦友達の慰霊団が３３回忌を記念して墓参した時に建てたのであろう。

小さな卒塔婆は各部隊毎のものであろうか、「入一法句」などと書いた１０本ばかりが立っていた。戦没者の琴線に触れて万斛の胸中に思いを遣りながら合掌した。

ソ連の赤魔の走狗らが衛星国を自ら援助する力量もなく、我が同胞を瓦礫と飢餓と極貧からの復興に使い、希望の灯火をモンゴル人の心の中に灯したのであった。元凶のソ連よ！その暴虐は金輪際わすれない。忿懣やるせない気持で奥へと進んだ。



丘の上にあるモンゴル文字で書いた白い墓石に額ずいて鬼哭啾々、襟を正して厳かに殉句の霊を弔うと、涙の雨に濡れるばかりであった。（上は墓石と墓標）

墓石の左に「モンゴル地域戦没者追悼之標」と書いた墓標が立ち、更に左の墓標正面には「諸士よ祖国日本は見事に復興しました。モンゴルに安らかに眠って下さい」と記し、裏面に「昭和４１年８月２５日　モンゴル会　長谷川」と刻まれていた。

墓石・墓標の前に立ち「安んじられよ靖国の友」と掌を合わせると、死生契闊の悲鳴が聞えるような心境に陥った。炎天下に一掬の水も与えず、極寒に暖を与えない常軌を逸した条件のもとで、生ける屍という惨鼻きわまる重労働の姿が脳裏を走った。

細胞が変るほどの体験記「黒パン俘虜記」もまた頭に浮かんで来た。最後の叫びが何時のまにか「暁に祈る」という悲しいものになった惨禍、其の響きを銘肌鏤骨して決して忘れてはならない。

前記した１６８４柱にはアムラルト、ホジルボラン以下００を除くと書いてある事から、その数は全モンゴルの正確な数字ではない。ウランバートルには２千人の収容所が１０ケ所も設置され、或る資料では２万人の収容者のうち４千人が死亡したと伝えている。（ドイツ人も同じく此処で強制労働させられている）

墓地の参拝記念にと、墓地に生えていた天然シャボテンを持参してバスに乗車した。草蒸す屍、その名は冥土で再会した感じを受け、千代に八千代に伝えたい一心である。今次大戦は「物の力」で敗れたが、今我々は「心の力」を忘れてはならない。モンゴルを訪れる日本人諸君は、必ず墓地に慰霊の誠を捧げてほしい。

7月9日 （日）晴　ゴビ砂漠の町 ダラン・サダガドへ

ソ連・インツーリストの怠慢からイルクーツクに２日間も釘付けされた事が祟り、ゴビ滞在が１日に短縮されていた。しかし昨夜、モンゴル国営旅行社の好意によって予定通り２日間と決定したとの連絡があり、一行は「手の舞い足の踏む所を知らず」と喜びの余り、思わず躍り上がるほどであった。

黎明を迎えた早朝の５時、大陸の大きな朝日は煌々として蒼天に昇り始め、宇宙の発電機のように広漠な草原を照らしていた。気温１０°Ｃの爽やかな朝の６時、ウランバートル南方６５０kmのゴビ砂漠の町、ダラン・サダガドへとホテルを出た。

７時にプロペラ機はコンクリートの滑走路を離陸した。各国の政府高官がナーダム祭に来訪するため、今日まで滑走路の大修理をしていたことは偽りではなかった。モンゴルはソ連のように嘘八百を言う国ではなく、嘘言はソ連の専売特許だったのだ。

４０名の乗客の中では白人達は子供のようにはしゃぎ、日本人や蒙古人の席は静まり返っていた。国民性の相違は機内を二分し、隣座席の蒙古の少女に飴を渡すと笑顔で黙礼してくれた。

ウランバートルの南方には湖沼が多く、一条のレールがゴビに向かって北京へと走っていた。蛇行する流れは広大な草原をつくり、放牧の群には貧富の差は見られず、静かな自然美は人の心を雄大にして長閑な景観の連続であった。

小１時間が経過した。遮るものもない大地は地平線だけが四周を囲い、天翔けて行く機の影だけが付きまとって、茫洋とした世界は気宇雄渾、ゴビ近しの歓喜は胸奥まで浸透して来た。（下図はダラン・サダガドとゴビ砂漠の位置図）

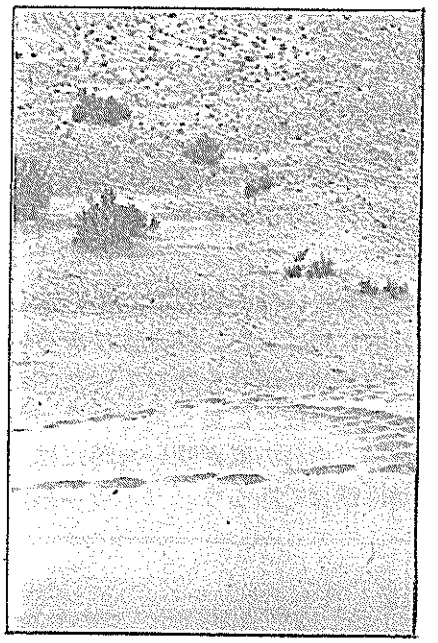
春秋に富んだ青春時代に唄った八紘一宇の歌詞「万里の長城で小便すれば、ゴビの砂漠に虹が立つ」の歌が懐かしい。人間臭い箱庭のような日本の風景とは違った天地、どこまでが果てか見分けが付かない地球は、円いことだけを知らせていた。

８時３０分、土煙をあげたプロペラ機は１６°Ｃの曠野の中に停止した。この一帯も亦、１００個ばかりの白いゲル以外は網膜に映らず、憧れのゴビの町ダラン・サダガドのベース・キャンプに到着を知らせたのであった。

文化もなければ呼吸もない渺茫とした大草原は語っていた。人生は夢、浮き世は夢だと。蜿蜒と拡がる大地は人間の一生の短命を嘲笑していた。年老いた今日、邯鄲の夢枕の物語りを感じている上に、ゴビは更に其の感じを深めさせていた。

蒙古の風雲が告げたころ、万騎が走駆して血腥い風を吹かせ、運命の神は残酷、無慈悲な悪戯をしたことだろう。再び戻る事もない屍となって、古里の草原に悲しみの挽歌が響き渡った事もあろう。昏々として死んだように眠っているゴビは多くの歴史を遺し、感慨無量であった。

ゴビの意味



ゴビは荒涼とした不毛の砂漠と同一視されがちだが、そういうところではない。

砂礫性の土壌で降雨量は年間５０ミリの超乾燥地帯である。しかしアルタイ山脈（前頁参照）から流れる地下水もあり、密生とはいえないが草も疎らに生えており、家畜を放牧して人間はどうにか生活できる所である。（右は疎らな草の状態）

ゴビ（中国では戈壁）は蒙古語（ターラ）では「草の成育が悪い荒れ地」の意味で、砂地とか砂丘地帯という意味は含まれていない。

高原の表面は平坦で、粘土や小石からできている場合が多い。ゴビを中国語の「沙漠」、日本語の砂漠と考えると誤解を招き、砂質や砂丘地帯は小地域に限られている。

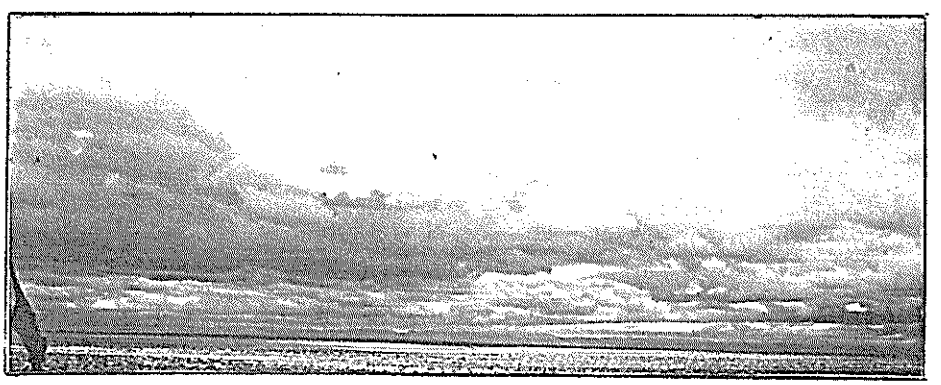
ゴビは南北５００～１０００km、東西１６００kmにも達しているから、地域によっては多少の差はあるが、上記したことが一般的な解釈だ。

先年シルクロードの酒泉・敦煌のゴビ砂漠も見たが、此のダラン・サダガド附近のゴビ砂漠よりも大きい石砂漠であった。一方、北満州チチハル周辺の大曠野の地形、地質とも完全に異なっていた。

ゴビには堆積岩の露頭も見られ（明日の観光地）、モンゴルきっての化石の出土地でもある。このことは過去に湿潤気候の時期のあったことを示している。又、いくつかの文化遺跡も発見され、原石器や旧石器以来の各時代の文化も識別されている。

１９世紀末からゴビの奥地へ多くの探検家が入った調査の結果、タリム盆地のタクラマカン砂漠（天山山脈の南で私も訪れている）のような大砂漠地帯は発見されず、奥地でも一般に草原からなっている事が判明した。

モンゴル調査隊は、モンゴル縦断鉄道に沿ったところに油田を発見し、西部ゴビでも１９５０年に油田が開発された。（下の写真は大砂漠の地形）



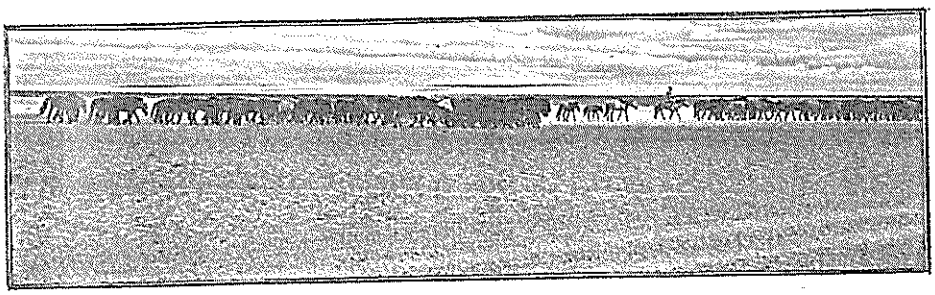
ゴビ砂漠のホルホン砂丘

ベースキャンプのゲルはホジルトよりも稍々劣っていた。しかし一条の地平線のみがキャンプを取り巻き、焔のように陽炎が揺れている光景は、他に比類のない素晴らしい眺望であった。人間臭から逃避した無限の世界に立つと、死の荒野も亦、桃源郷ようである。

体力の杞憂も忘れ「旅は心身の鍛錬の良策」だと、１０・３０からホルホン砂丘の見学へとバスは疾駆する。何処も同じく緑の少ない灰色草原の道は、幾本となく分れて轍は迷路のように交叉していた。（下の写真の右下に轍「ワダチ」が見える）

数え切れない轍の道を運転手は迷うことなく、鹿を追う猟師は山を見ない譬のように一目散に飛ばした。浮き世はあるにまかせろと言わんばかりだ。

一頭の快馬が曠野を駆けていた。一人の若者に誘導された数百頭の馬の群れは、地平線と間違うほどに長く尾をひき、ゴビの勇壮な景観を提供していた。渺々と続く砂漠に黄砂、白砂の風が吹いた時には、どうなるのかと取り越し苦労をしていたが、そこは餅は餅屋であろう。（下の写真は数百頭の馬群の移動）



何処に草が生えているのか判らない砂利砂漠の中に、ひとりラクダ草だけが伸びている。トゲのあるラクダ草は他の家畜は喰うことが出来ず、我がもの顔をして生き生きとして成育していた。（前頁の上の写真はラクダ草）

一望千里のゴビの砂漠を進軍した騎馬軍団は、何を目標にして駒を進めたのであろうか。磁石の発達していない時代には太陽と月だけが頼りの綱で、彼等の感の鋭さは驚嘆するばかりだ。

遮蔽物の全くない砂漠で戦ったノモンハン事件は、私の脳裏から離れることはない。今更ながら愚にも付かないことだが、ゴビは自然にあの悲惨な状況を想起させるのだ。「無知によって過ち、過ちによって学ぶ」という古語の通りであったが、小さな砂が断末魔の悲鳴を何時までも伝えていた。少々の学問は危険なもの、生兵法は知らぬに劣ると言わなければならない。

天然資源の天府に乏しい砂漠を疾走すること１時間半、眼の前に小さな砂山が見えていた。これが目的地のホルホン砂丘だ。鳥取の砂丘や敦煌の鳴沙山とは比較にならない小さい砂丘は、石砂漠のゴビでは珍しい存在らしい。（固定砂漠）

砂丘の裾には痩せこけた雑草が子孫繁栄のために花を咲かせ、人馬も顔負けの強靭な忍耐力で生きていた。秋も終わって自然の凍結と共に消え、春（夏）の自然の温もりと共に花を咲かせる無言の生きもの、それは人間の想像以上のものであった。

一行は五里霧中で胸つき八丁の砂の斜面に足を踏み込んだ。足が砂地にもぐってもつれるばかり、腰がふらついて一気には登れない。腰を下ろして手に付いた砂を見ると実に細かく、砂よりも人間の方が非力のようであった。

獅子奮迅の力を振り絞り、四つん這いになって頂上を極めると、ゴビの眺望は極点に達したような感じがする。「上に飛鳥なく下に走獣なし」と記した法顕和尚の実感が湧いて来た。（タクラマカン沙漠に於ての詩）

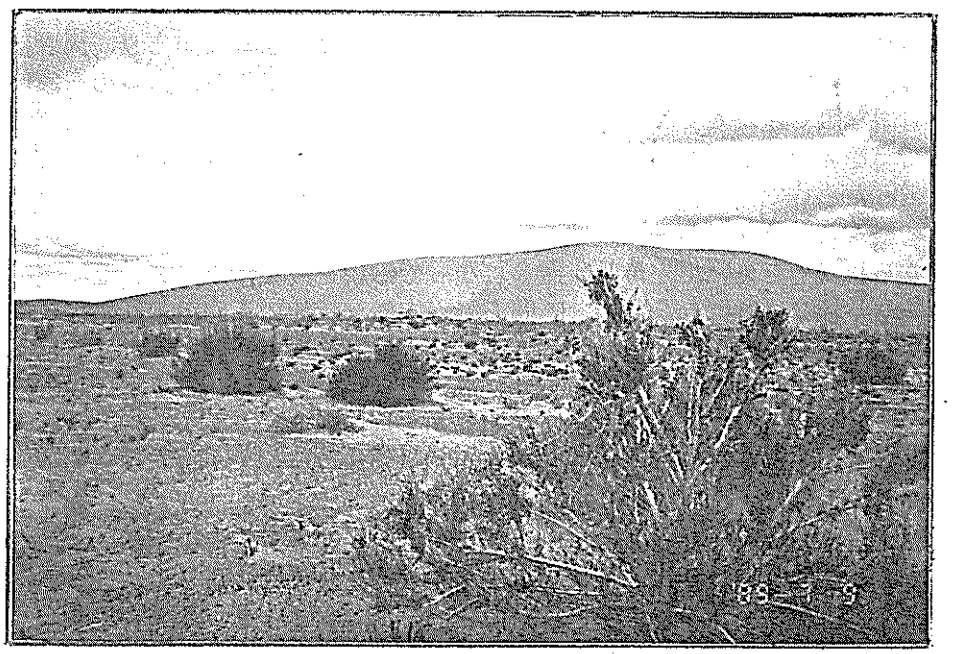
風紋が美しい砂の曼陀羅を描いて見惚れていると、生死無常の此の世の糸が切れて西方浄土が見えるような幻想に陥り、しばらく心の砂漠に迷い込んでいた。どちらが幻か此の世か、あの世だろうかと。

砂丘の頂上を衾に仮の夢だと寝そべった。砂の温もりを感じながら澄んだ青空をじっと眺めていると、細かい砂粒はこれが無私の心境だと教えていた。

いろんな冥想に耽っているとき「八荒」という文句が脳中に閃いた。昔の中国から見ればゴビの四方八方は荒れ果てた遠い土地であった。このことが「八荒を併合する」即ち天下という意味になったのではないだろうか。本当に古語は素晴らしい発想だ。

辺境の地にあった砂丘は電流のように歴史の記憶を蘇らせ、想像させて私に若さを取り戻してくれた。これからも更にゴビの印象を味わいたいと楽しみながら、ホルホン砂丘を去ったのであった。

（下の写真はホルホン砂丘と砂礫の荒野）



遊牧民を訪ねて

居は気を移すと言って人の気分を変えるものだ。ゆったりと開放感を満喫できるゲルで休憩をとり、午後の８時にキャンプを発って遊牧民を訪問することになった。

陽の高いうちは離散家族のように家畜たちは草原に散らばり、夕暮のせまる頃、親は母乳を飲ますために子供達のいるゲルの所に帰ってくる。最も家畜の集まる其の時間を選んだ一行は荒野の彼方へと疾駆した。

バスは相変らずの多岐亡羊の道を走ると、砂漠の色が地球の色だと表現したい曠野に、暮色蒼然とした夕闇が迫り、なんとなく世界が終わるような感じがしていた。その無聊を慰めてくれたのはラクダの姿であった。（下はラクダ草を喰むラクダ）

二つ瘤のラクダの群れが草を喰んでいた近くに停車した。驚いたラクダは裂帛の気合いと云うか、大きな奇声をあげて逃げ出した。反対側にいた１００頭近い羊の群れは、平然と砂利混じりの草原で疎らな短草を喰んでいた。

何ら束縛されない自由な空間にひびく羊の鳴き声は物寂しい感じがする。命が此の世から消えていくように聞こえて、哀れな挽歌の悲しみを誘うのであった。

前方に潭々とした沼が見えていた。水のある所には人間や家畜が集まり、天恵に浴しているのだ。沼の向うに４個のゲルと数十頭のラクダの姿が映り、遊牧の一家は手を振って青眼な眼で迎えてくれた。

東洋的で有徳の士のような顔付の主人を始め太陽族の彼等は、同じ地球という星の同胞だと云った感じで歯を見せていた。人種を超越した美しい笑顔は将に太陽である。

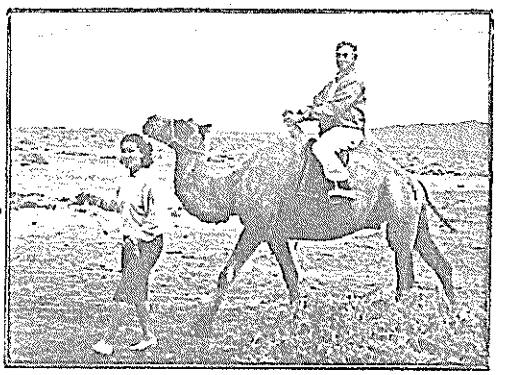
ロープに繋がれたラクダの子供達は、長い首を伸ばして母親の帰りを待っていた。数多い中から我が子を見い出す母親、懸命になって母親を捜す仔ラクダ、その親子の情愛は人間も学ばなければならない。新聞を騒がす酸欠状態の人間の親たちよ、底知れない温もりを持ったラクダにも劣り、人面獣心以下だと云いたい。

親子の間に独特の乳臭があるのだろうか。母親を見つけた小さいラクダは狂気乱舞して乳房を吸った。母ラクダの我が子を舐めまわす母性愛は、生命の連続と尊さを感じさせて、これを「舐犢（シトク）の愛」と言うのである。

遊牧の家族たちは我々をゲルに誘った。大家族の彼等は夫婦別のゲルに住み、主人のゲルでは馬乳酒と菓子（チーズで作ったもの）の接待を受けた。歌の文句ではないが、狭いながらも楽しい我が家、如何に見すぼらしくも我が家に優るものはない、という雰囲気が漂っていた。王様であろうと遊牧の生活であろうと、家族の平和を見い出す者が最も幸福な人間である。オワシスのような温かい家庭を築いてほしいと、一行は和気靄々のうちに写真を撮っていた。

明るい伸び伸びとした家族の人達からラクダに乗れと催促され、ツアーの連中は代る代る試乗した。乗りにくいラクダの背に丹田に力を込めて跨ると、上を向いた瘤は

実に堅い。脂肪が少なくなった冬から春にかけては瘤は倒れ、草を食べて充分な栄養を蓄積した夏秋には瘤は上を向くそうだ。瘤は即ち脂肪の塊である。瘤の脂肪を消費するだけでも１ケ月は歩くことは可能、だから砂漠のキャラバンには絶対的に不可欠な動物である。（右はヨクダに乗った私）

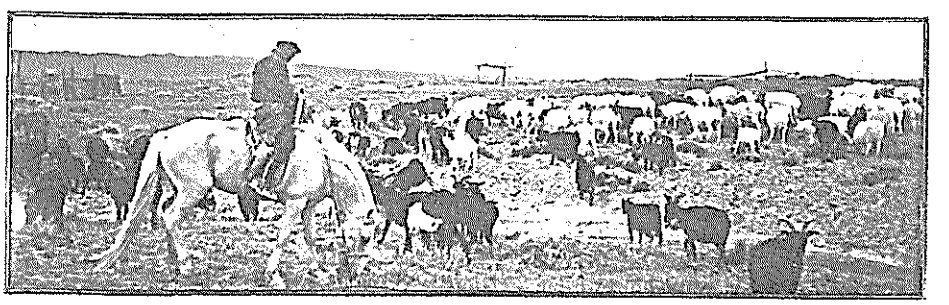


人間万事塞翁が馬だといった顔をして、淡々と鞭を使った青年の羊を追う乗馬姿は魅力的、これこそ砂漠の俳優である。鉄線で囲った柵の中に追い込む最中に、カチンカチンと大きな音が聞こえて来た。場所の取り争いであろうか、牡羊が角を突き合わせる音であった。

一方、闘争の音にまじって聞こえる羊の鳴き声は哀愁を感じさせ、屠場に曳かれる「羊の歩み」の経文を思い出すのであった。

一生を托した曠野で家畜を追いながら数奇な生涯の幕を閉じて行く彼等に、必ず飛躍する日の来ることを期待して止まない。もの云わぬ仔ラクダたちも早く大きくなれよと、一家の人達に満腔の謝意を表して離別した。（下は羊の追い込み風景）

何本にも分れた多岐亡羊の帰路を走るバスを追い越し、珍しい若者の乗ったオートバイが前を飛ばしていた。迷路のオートバイレースの開拓者のようであった。



「多岐亡羊」

上記は、学問には知識の集積と理論の分析が必要な事は云うまでもないが、いたずらに枝葉末節に陥って本筋を見失うのは愚かだという寓話で、「列子」にある故事だ。

揚子という人の隣人の羊が逃げた。其の隣人は一家総動員で羊捜しに出掛ける騒ぎとなった。揚子が「たった一匹の羊になんで多勢で追いかけるのか」と尋ねると、「逃げた方向には岐れ道が多いからだ」という返答であつた。

やがて連中は疲労困憊して帰り、「岐路の中に岐路があって羊が何処に逃げたか判らない」と言う。其の話を聞いた揚子はふさぎ込んでしまった。

他日、賢い弟子の一人が此の事に就いて揚子と問答した結果、目標が一匹の羊であっても、岐れ道に迷い込んで追求するようでは、結局それを見失ってしまうのだ。

学問の道もそのようなもので、帰一する大事なポイントを見失うような追求の仕方は、無意味だと悟ったと言うのである。

学問に志す人は心すべきことで、要は本当の目標をしっかりと把握する事が肝要である。否、学問ばかりでなく、人間の生き方に就いて深い示唆を与えた故事である。

満天の星が輝く草原の夜空

今夕は渇き切った砂漠が水を吸い込むように、草原に暮らす遊牧民の知識を吸い込むことが出来た。そして何時までもラクダの母性愛は忘れられない。

ゴビの日が暮れて悠々と落日の太陽が水平線に寄せていた。明るさを増してきた詩的な半月は杳々とした曠野に淡い光を放ち、野辺に妖魔が躍るような感じだ。

堪生の宿であるゲルの我が家も住めば都、幕天席地の広大な思いがしている。牛は牛づれ馬は馬づれというのか、ツアーの似た者同志は同気相求むというように我がゲルに集まって来た。

ホジルトよりは温かい此のキャンプでは、ストーブは焚かず煙突の火も見えず、火の気のない暖炉を囲んだ家庭的な雰囲気の中で、老若男女の和気靄々とした会話が続いていた。人間は誰しも年齢よりも若いと信じているようで、若者と一緒な旅は老化防止の妙薬である。

露営の夢を偲び南阿の夢でも見たいとベッドの中に入った。砂漠の真中にあるキャンプは寝静まって音もなく、悄然とした荒野に糸を引くように霧雨が降っていた。

「老眠は早く覚めて夜を残す」の通り、夜中に眼を覚ましてしまった。ゲルの扉を開けて見上げると晴れた空には満天の星だ。ゴビ砂漠の冷たい大陸の月光が、白いフエルトを斜めに照らして、他は何一つ見えるものはない。

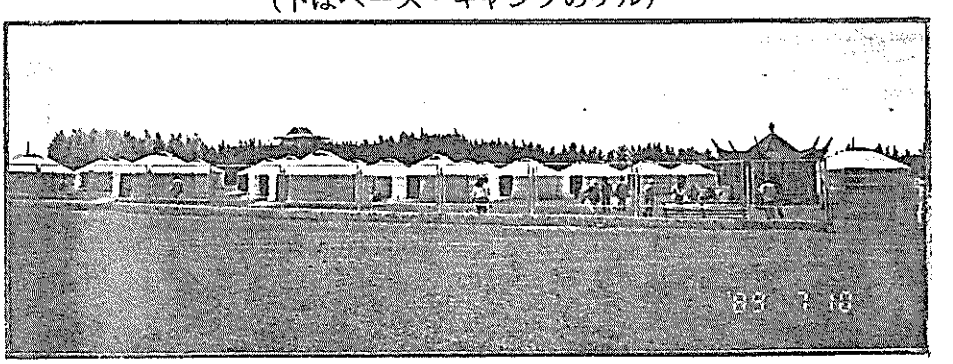
夏空というのに秋のように澄んだ空が天を覆い、青い大きな星が地球を取り巻いてきらめいていた。まるで我が身が宙に在るような心地だ。数ある星の中に流星が瞬間尾を曳きながら運命にまかせて流れた。人の一生も流星の運命と同様だと感傷していると、宗教は宇宙、そして生命の説明の組織だと気付くのであった。

此の世もまた星と同じく関係から成り立っている。その関係はすべて相対的で、あらゆる価値も相対的である。長は短により、難は易により、広は狭によると説いた老子の言葉までが浮かんで来た。ゴビの星空はいろんな事を想起させ、空想させる素晴らしい世界を展開し、星を眺めるだけでもゴビ紀行の価値があるだろう。

冷たい透き通った夜の空気の底で、果てしないゴビの大地は眠りつづけ、私も再び床に潜り込んで朝を迎えた。地の涯から徐々に明けて来た。白くぼんやりと明けると見る間に広い曠野を照らし出し、名画のような景観は飽きることのない眺めであった。

無二の別天地であったベース・キャンプの一夜は実に感慨無量である。

(下はベース・キャンプのゲル)



7月10日 (月) 晴 イリヨン・アム氷河

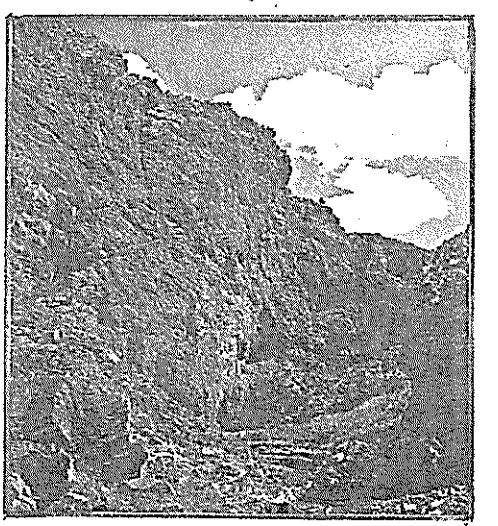
ゴルハン・サイハン山（５６頁地図参照）

昨夜半の霧雨も直ぐに晴れ上り、満天の星は精魂を込めて舞うように奇麗であった。あの星群の天国が忘れられない想いで０９・３０にキャンプを発った。標高１６００ｍの今朝の温度は８°Ｃ。多岐亡羊の轍を黄色い土煙を上げて西のゴルハン・サイハン山へと疾走した。

相変らずのバスの振動は骨身にこたえ、腸が捻じれるような悪路もゴビの想い出だ。道路標識もない草原では無謀運転の罰則もなく、途中、白人を乗せたバスを猛スピードで追い越した。通過していく波状した地形はゼットコスターの急上昇、急下降を思わせ、車内から悲鳴が上がるほどであった。

水無川のステップの川底を走るにつれて、岩肌の温かい陽を浴びた夏風は至って涼しく、辺りの色彩が刻一刻と微妙に変化していく光景は神秘的である。

無聊を慰めてくれたのは乱舞する小鳥と野鼠であった。果たして彼女等が生きて行くための餌があるのだろうか。山脚に無数の穴が見えていたのは野鼠の棲家であった。バスの接近に驚いて穴に潜り込む光景はゴビならではであろう。



突然、川底の道路でバスは停車した。ドライバーは鋸の歯のような山頂を移動する野生の鹿を指差した。天空を通した天辺を動く群れは肉眼でも明瞭に捉えられたが、初めて眺める幻のような感じがしていた。標高２０００ｍ近い高山は湿度があるのか草丈も長く、岸壁の斜面の一部に緑りが見えていた。

鉄棒を立てたゲートは進路を閉鎖していたが、早速、少女が鎖を外して通してくれた。此処にはイリヨン・アム氷河一帯を管理する事務所（博物館兼用）が設けられて、無許可入山は禁止のようだ。（右は野生の鹿の山）

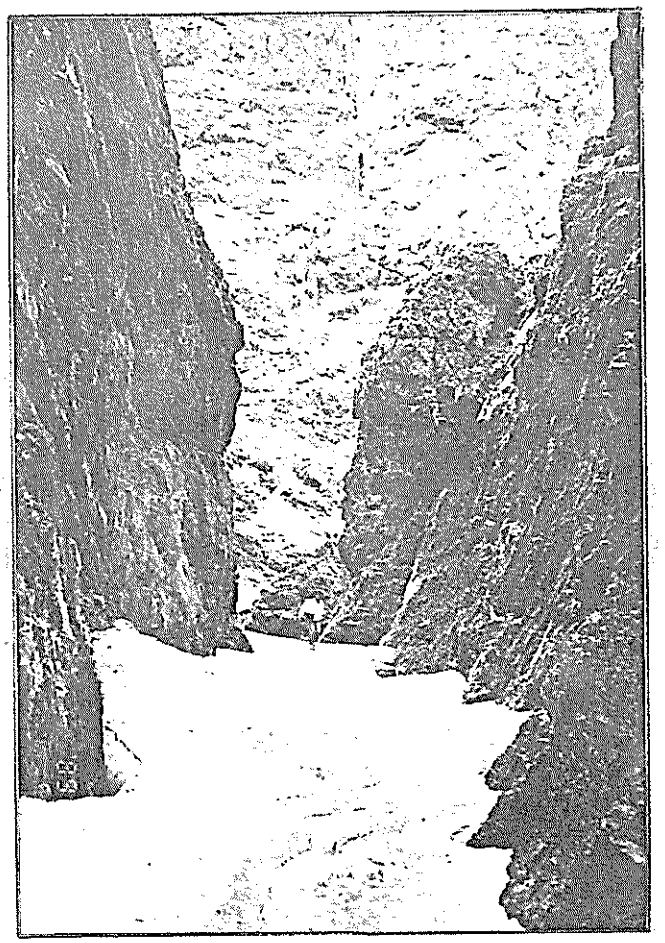
ゲートを過ぎた所の山の斜面にヤクの群れが草を喰んでいた。ヤクは１５００ｍ以上に棲んでいる高山動物で、モンゴルでは黒又は黒白だが、ペルーのクスコで見たのは茶褐色だったと記憶している。（下の写真）

容姿を変幻自在に変える峨々とした峰は幾重にも重畳し、或は奇岩が列立じた山は幾多の歴史を遺しているのかも知れない。胸を突き上げるような坂道を更に進むと巨大な怪石が全山を覆い、漸く佳境に入った感じがしてきた。

バスは左右に分かれた谷間の分岐点で停車した。此の奥には轍の道は見えず、多少開けている平地があって分水嶺を形成していた。停車地点から左の谷を下った彼方が本日の目的地、イリヨン・アム氷河で「鷲の谷」とも呼ばれる所だ。

神仙の棲むような巍峨雄壮の峰々は断崖をつくり、その直下の谷間は高山植物の花盛りであった。変化していく谷底から万丈の鋭峰や千仞の谷に眼を注ぐと、明浩清幽というか清高飄逸な山の空気が漂ひ、世俗の塵埃から超越した感じだ。

細い渓流の中にある飛び石を踏んでは渡り、山河襟帯の景観を眺めながら下って行くと、千古の雪が岩壁の裾に帯のように延びていた。此処から下流は急激に峰が狭まって懸崖が迫り、上は多姿多彩な峻嶺が覆って下は幾千年の氷河の流れだ。大山脈の上部に残った氷河の標高は１９７４ｍ、いよいよ秀抜な氷河の佳境に入ったのである。



よろめく足もとに力を込めて蹌踉の体で氷上を歩いた。蛇行する峡谷を埋め尽くした氷河は延々と続き、屈曲した地点の一部分が氷解しているのが見えていた。（右が氷河、下の部分）

氷の隙間を流れる解けた水の音が爽やかに響き、はっきりと水の冷たさが肌に伝わる谷底は、無粋な私の心を洗う泉のようであった。

「足を万里の流れに濯ぐ」というような心地で覗いて見ると、氷の厚さは１ｍ以上もあり、両岸の切り立った峰は「一夫関に当るや万夫も開くなし」と形容する弾劾絶壁だ。この眺めは将に壮快、豪快、雄快、奇快の何れであろうか。

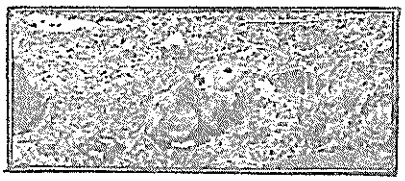
見飽きることのない氷河と別れて帰路についた。反転した一行の人達は感激の記念にと、渓谷の石の捜索に余念がない。

花の命は短いが奇麗な花は摘まれるものだと、私は高山植物の採集に血眼になっている時、ふと傍らに蒼翠色をした手頃な石が網膜に映った。僥倖というのか労せずして拾った貴石は、比類のない記念の品となった。

辺り一帯の穴から穴へと駈け廻っていた野鼠たちは、五感を澄ませて枯渇した岩と草の中に生きていた。疑い深い性質の野鼠は廻りを窺いながら一進一退して、容易に進退を決めない。この状態を「首鼠両端」と云うのだろう。どちらとも決めず猶予することや、ひよりみ、洞ケ峠の意味だ。

山岳生活を送る野鼠の一生は照る日、曇る日、嵐の日の繰り返しだが、彼女らの英知と努力によって生活の軌道に生きているのだろうか。それとも他から与えられた不思議な力ではないだろうか。立ち止まって巣穴に注目していた。

全神経を耳目に集中して野鼠の鳴き声を聞きながら、長い間、巣穴の後方に立って様子を窺い、シャッター・チャンスを待っていた。不屈の熱意が功を奏したのか、これまた僥倖にも巣穴から一進した瞬間を捉えて、撮影することが出来た。（右の中央）



コバルト色の空は青く、深く、透明で、その美しい鮮やかな自然の中で浩然の気を養いながら、昼食はバーベーキューの食事となった。半世紀も前に北京の軍司令部で食べたチンギス・カン料理の夜宴が懐かしく思い出されていた。

視線を皿の上に向けて箸を手にしていると、我々の２ｍ近くまで寄ってきた小鳥は餌を催促して一向に逃げようとしない。可愛いい小鳥はなれなれしく、一羽が二羽三羽となって投げた餌に喰い付き、蒙古料理の味に味を添えていた。

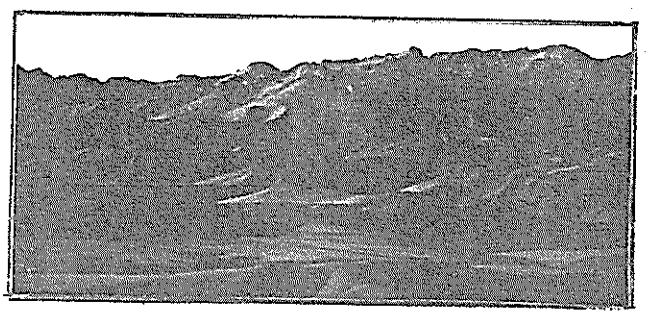
食は庶民の広い層を取り込む最先端の文化だ。料理は「理を料（はか）る」と書く。この合理性の追求こそ料理の心、その粋は深淵な哲学を秘めているのではないだろうか。このように野宴の味覚に期待したものの、負傷のために総入歯となった現在では、真の味覚を味えず不運は誠に残念至極だ。

午後２時にゴルハン・サイハン山を去って連峰を振り返って見ると、背中になった山々は映画の黒いセットのような景観を呈していた。帰路は速く感じるのか途中、博物館の見学を終えた一行は、はや曠野を疾走していた。

平坦な茫々とした砂漠の遠くにキャンプのゲルが見えてきた。ドライバーは車を停めて蜃気楼だとゲルを指差した。初めて見る神秘的な蜃気楼現象に暫く陶酔していたが、実に幸運と云わなければならない。

蜃気楼は大気中の上層と下層の温度差が大きいと大気層の密度が変わり、光線は直進せずに屈折して、砂漠や草原では遠方のものが近くにあるように見える現象で、宇宙の神秘さをゴビで眺めたことは特筆すべき事であった。

（下の写真はゴルハン・サイハン山の風景）



ゴビの想い出

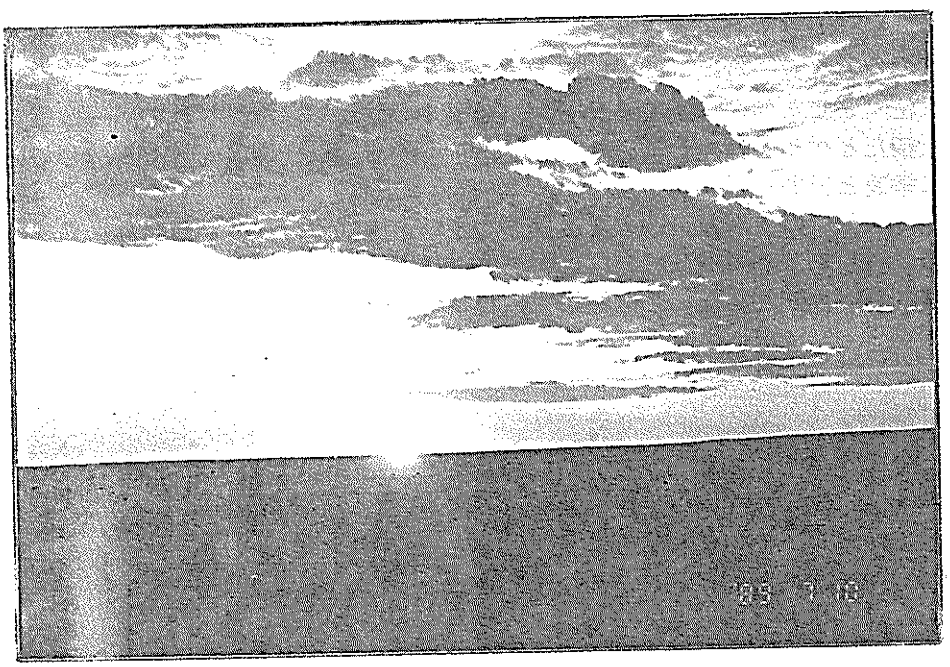
日本の美しい自然は古来、緑の濃い樹木と清い水によって表わされたが、本日のように石と水の自然も霊力を高め、あなどり難いものであった。京都の竜安寺の枯山水を眺めているのと同様、石と水の美は空間の美しさで動かない不動の力となっている。

２日間のゴビの観光に稍々疲労を覚えたが、これは老いが原因だ。そしてこれを認知しないことも老いの特徴である。老いて行くのは生きることを止める為の準備期間だと思うと、無常もそれほど感じなくなって健康になると信じたい。

午後８時からゴビの宣伝映画の観賞となった。我々はゴビの九牛の一毛を見たに過ぎず、この映画から奥深いゴビの知識を得ることが出来た。映画の終わりかけた頃、燦然とした金色の太陽は西に傾き始め、円形をした地平線の一角に沈んで行く落日は、荘厳の中にゆらゆらと揺らいでいた。

悲愁に満ちたゴビの落日をキャツチしたいと早速、待ち構えていると、まるで夜見の国へ吸い込まれるような感じがしていた。（下の写真は２１・４５撮影）

（下はゴビの落日と地平線、太陽の左下に蜃気楼現象の太陽が赤く写っている）



戦いすんで日がくれて・・・軍歌の歌詞が脳裏にひらめいた。落日はその上、老いと死の思いを考えさせ、「いろは」の歌まで浮かんで来た。「色は匂えど散りぬるを、わが世誰ぞ常ならむ、有為の奥山今日越えて、あさき夢見し酔いもせず」。世の無常の見事な表現ではないか。

太陽が沈み半月が昇って次第に星群の中に月光が輝き、星辰の位置は正しく周って夜の更けるのを告げていた。政治不信の声が盛んな日本の政治家諸君よ、かくあるべしとゴビの砂漠まで教えているのである。

一面に銀の砂を撒いたような星群の中に今夜も亦、流星を見た。成（生）をうけて成長し、やがて凋落して流星のように終わるのは、無常ではなく自然の法則だろう。

万感こもごもおこったゴビは、人生はいろいろな旅の連なりだと理解させて満足させてくれた。老子は「足るを知る者は富む」と教えたが、広大なゴビは心まで富ませてくれた。実に人間回帰の旅だったと言えるのだ。

「天を崇拝する遊牧の民」

ゴビは夏から秋の３、４ケ月を除いて１年の大半は乾燥し、冬は零下４０度にも下がる寒さの厳しい自然環境下におかれている。家畜は僅かに残った枯草をあさって痩せ衰え、家畜の死は即ち人間の死につながっている。そして人間の眼に映るものは凍りついた大地と、大地を覆う「天」だけである。

遊牧民は此の苛酷な自然の脅威になす術もなく、ただ畏れ、祈り、その怒りの解けるのを待つだけであろう。そして遊牧民にとって最も畏敬する自然とは「天」だったと思う。

彼等の頭上を、ゴビの世界を覆う「天」を絶対支配者と考え、「天」に優る神の存在を想定しなかったらしい。

「天」の崇拝はモンゴルにラマ教が隆盛を極めた清朝以降も、又、社会主義に移った現在でも、信仰の根本的なものとして深く根付いている。彼のチンギス・ハンも亦、「天」の命を受けて地上に降りた狼の子孫だと信じているのであった。

「日本人の郷愁」

日本人の体の中にもモンゴル系の血が流れている事は、紛れもない事実とされている。同じ血の性かモンゴルを訪れた日本人の大部分は、口で言えない親近感を彼等に抱き、重症軽症の差はあるものの、例外なく一種のモンゴル病に罹ることも確かなようだ。特にゴビは其の感を強く抱かせたのであった。

高度に情報化、能率化された社会に毎日、時間に追われて生きている日本人が、全く違う風土、生活環境に生きているモンゴル人に何故、親しみを感じ心が引かれるのだろうか。

広大な草原に大自然と家畜を相手に暮らす遊牧民の気質は、純朴、誠実で客人を手厚くもてなす習慣があり、礼儀正しく、万事が控え目で口数も少ない。反面、呑気でずぼらな点があるかも知れないが、我々が接触した彼等には見受けなかった。

モンゴル全般に言える事だが、何にもまして目に付くことは彼等は高い民族的な誇りを持っていることだ。このような性格は嘗て日本人がもっていた最も基本的なものではなかったか。

いろんな人達と接触した結果、彼等に親しみと郷愁を覚えるのであった。

7月11日 (火) 晴 ナーダム祭 ゴビ～ウランバートル

凛烈な気候風土のモンゴル・ゴビはたっぷりと醍醐味を堪能させてくれた。２日間キャンプでお世話になった中年の接待さんに寸志を渡し、後髪を引かれるようにゲルを離れると、搭乗機は０９・２５にプロペラを回転させて空中に浮揚した。

今朝８時の気温は１５°Ｃと稍々上昇して、ウランバートルのナーダム祭の天候は心配なさそうであった。広大な大草原と紺碧の大空にはさまれた大空間を飛行して、６５０㎞北方のウランバートル空港に１０・４５に着陸した。

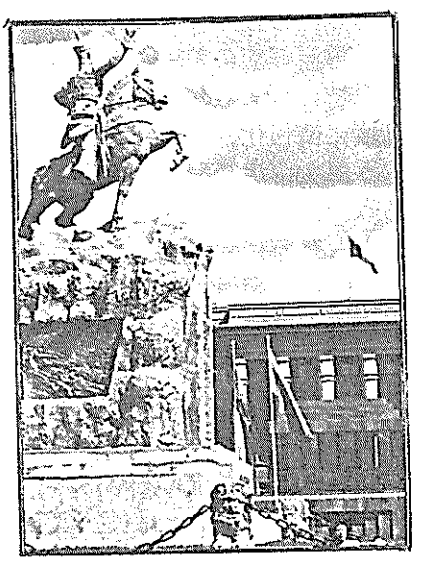
予想した通りの透き通った蒼空はナーダム晴とでも云うのか、革命６８年の記念日に相応しい好天候である。空港ターミナル広場の草原では我々を歓迎するように馬の群れが草を喰み、多彩な旗が林立して祭りの雰囲気を煽っていた。

顔馴染みとなっている運転手は愛想よく出迎え、見慣れた街道にも祝賀の旗が風になびき、歓迎ゲートは一段と美しく飾られていた。一方の草原には全国各地から見物に上京してきた人達のゲルが建ち並び、アパートもまた赤い垂れ幕を吊るしていた。

スフバートル広場に足を運ぶ少女たちはモンゴル風のリボンを頭に付け、バス停は黒山の群衆ではみ出し、珍しく撒水車が道路を清掃している。国をあげての最大の行事・ナーダム祭は、我々外国人までも子供のように興奮させていた。

ナーダムとは蒙古語で「人が集まる」という意味で、全国各地で行われている。（首都ウランバートルでは革命記念日の７月１１日）中国語では「那辺慕」という。

スフバートル広場



懐かしいホテルに荷物を卸してスフバートル広場へと急行した。多分、本朝はやくから花火の音が響き渡って祝砲が轟き、市民達は新しい晴れ着に着換え、旗を持って広場に集まったことだろう。陽気で明るい市民の列は延々と続き、我々も其の中に吸収されながら類は友を呼ぶように足を運んでいた。（右は広場のスフバートル像と廟、及び政府庁舎）

然し乍ら、十数の写真屋が着飾った人達の注文に応じているだけで、パレードは既に終了して群衆は解散していた。本番のパレードを参観できなかった原因は、総てイルクーツクでの無意味な２日の滞在で、憎たらしいソ連の不誠意が何処までも祟っていた。５日の早朝のパレードの練習風景を拝見できたことは、私にとっては僥倖である。

午後１時からホテルで昼食をとり、各種競技の行われるスタジアムにバスは疾駆した。会場周辺は群衆の人波と車で長蛇の列をなし、蝟集してゲートに向かう中に独特の衣装を着て意気軒昂として歩く力士の姿に見惚れていた。恰も国技館前のような光景である。（次頁の写真は堂々と入場する力士）

（市内の配置　図は３３頁の地図参照）

スタジアム　開会式・角力・マスゲーム

我々外国人は大統領席の左隣に設けられた貴賓席に陣取った。衣装は人を作るという通り馬子にも衣装、蒼空のスタンドに居並ぶ今日の彼等は見違うほど着飾り、明眸皓歯のモンゴル美人も見えていた。

華美ではないが全周のスタンドに林立した旗の波は民族意識を高揚し、立錐の余地もない観衆は胸を躍らせて開会を待っていた。

午後２時丁度、大統領は正面高所の席に就き「一鳴驚人」の大声で開会を宣言した。全員起立する中に国歌を吹奏し、国旗の掲揚となった。天空に昇った国旗は燦々と陽に輝き、居並ぶ群衆の間には咳一つ無く、海内無比の世界制覇を成し遂げた民族の祭典が始まった。

スタンドから五臓六腑に響く万雷の拍手が湧き起り、我々外国人も祭典を祝って唱和した。蒙古の人の喜びを我が事のように喜ぶ随喜心は、日本人の血の中に蒙古人種系の血が流れているからであろうか。

十頭ばかりの騎馬が旗をなびかせ、戛々（カツ）とした馬蹄の響きを上げながら、トラックを疾走して競技の開始を告げた。往時の代々木の観兵式で近衛騎兵が先陣を切った光景に似ている。（右はスタジアムに入場する力士）

一番奥のフイルドでは力士達の予選角力が開始された。民族の血液の中に受け継がれた精悍な角力競技が、伝統行事の最初であることは人気の高い証拠だろう。

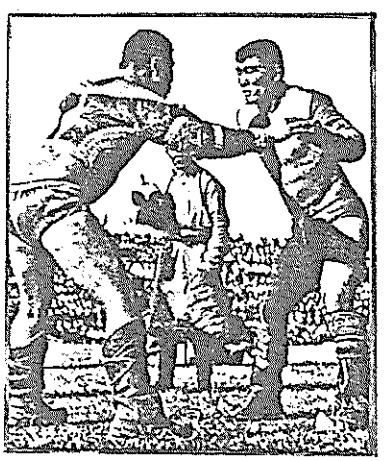
予選が終ると女子小学生のマスゲームがフイルド一杯に拡がり、群衆注視の中で幼い明るさを振り撒いた。赤青黄の色彩豊かな旗を持った子供たちは、洋の東西を問わず可愛いいものである。。先日から市中で見受けた練習は今日の佳き日の為であったのだ。子供は国の宝、民族の栄える力を大いに伸ばせと拍手を送り続けていた。

角力

鷹のような鋭い眼をした力士達はフイルドの中央に移って試合に挑んだ。虚々実々の駆け引きをする分厚い胸板、丹田に力を込めて眼を怒らせて睨む顔、古代からの伝統を受け継ぐ壮観な絵巻物を見ているようだ。

モンゴル人を沸かせる角力は体重制限も時間制限もなく、草原の角力らしく土俵もない。力士は伝統的な帽子をかぶり、頑丈なブーツ風の蒙古靴を履き、腰衣に背中と腕だけを覆う独特の上衣をつけ、大鷹のように羽ばたきながら両腕を大きく広げて登場する。

（右は角力の試合風景）



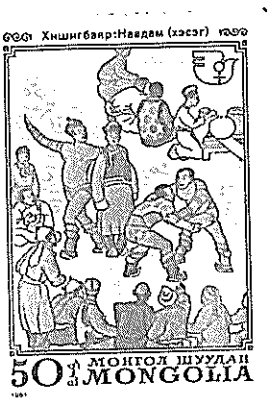
力士は介添人に帽子を預け、片手を介添人の肩に置いて先ず紹介を受ける。勝負は一組ごとではなく数組

が彼方此方で行われて準々決勝、準決勝と進んでいく。

勝負は相手を地面に倒した時に決まり、手をついた程度では判定を下さない。２、３秒で決まる勝負があるかと思うと、５分以上も取っ組み合う場合もあったようだ。

敗者は上衣の紐を解いて勝者の拡げた腕の下をくぐって降伏を表現し、勝者は帽子をかぶって両手をあげ、驕りたかぶったように舞いながら、旗竿の周りを廻っていた。

観客の熱気の湧き返る中に勝者の名が放送されると、ひいきの群衆は狂喜して喝采を送り、国技らしい雰囲気が会場に溢れていた。（右は角力を描いた切手）



勝ち抜いた力士には名誉な称号が与えられる。各地から選抜された此の中央大会で４回以上優勝すると無敵大巨人、３回以上は大巨人、２回は巨人、初優勝は獅子、２位は象、３位は鷹という称号である。

力士は全てアマで、誰でも参加できる日本の草相撲に似ており、小中学校の体育の授業にも取り入れられていると云うから、日本の相撲熱以上ではないだろうか。

一つの波が波の波を呼び、次ぎの波を起こす大観衆の喝采を後にして、次ぎの弓技会場へ移ることになった。その時、胸一杯に勲章・徽章を佩びた老人に出会し、彼の誇る偉大な功績を称賛したい気持で、素早く写真に収めたのであった。

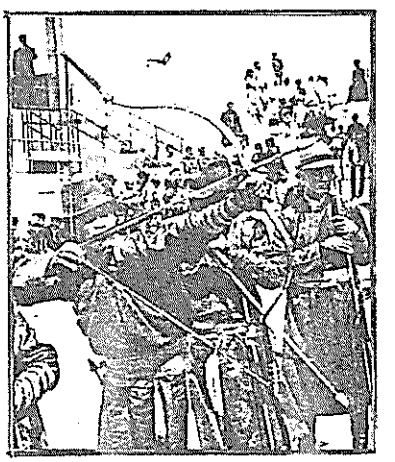
弓技

スタジアムの隣の会場で弓技が開始された。

モンゴル人は古来、弓の名手であったことは良く知られている。見事な騎馬戦術と共に「石に立つ矢」と云われるまでに弓勢が抜群であった。だからこそ世界制覇が出来たのである。

軍閥興亡時代、天地の間に枕して死生を矢弾の中に曝した事が想い出される。鉄砲の出現から戦闘方式が一変したものの、弓は尚武の意味で親しまれて来た。先日の日本人墓地に参拝した時に見られた通りだ。

１３世紀中頃、モンゴルを訪れたマルコ・ポーロの記録に、当時の蒙古戦士の名弓術ぶりが記録されている。（右は弓を射る選手）



現存する最古の資料「チンギス汗石」と呼ばれる石碑は、チンギス汗の甥イスゲンが３３５アルダ（１アルダは１尋、約５００ｍとなる）の的を射当てた事を称えている。此の石碑はイスゲンの驚嘆する弓術ばかりでなく、当時の蒙古人が如何に弓技を重んじたかを示している。

こうした伝統を踏まえ、古式に則って弓技が行われていた。角力は男だけ、競馬は子供だけの競技だが、弓は８歳以上の老若男女が参加できる特徴がある。

大人の男性は４５弓身の距離、即ち約７５ｍの標的を射って勝敗を争う。女性は６０ｍ、８～１７歳までの子供は１歳当たり４ｍ（女子は３ｍ）ずつ標的を近ずけると云うことであった。

標的は革を円筒状（直経・高さ共に８ｍ）に編み、それを草原に積み重ねたもので、筒は１００個以上もあるだろうか、２段以上に積み重ねてあった。（右上は標的と審判）

射手は２０本ずつの矢を角度を上向きにして放ち、矢は弧を描いて標的に当る。当った標的の筒を取り除いて、残った標的の数で勝負を決めることになっている。

標的のそばには４、５人の審判員が立っていて、命中すると両手を大きく拡げ、ゆっくりとした独特の「当り歌」を歌っていた。（右は弓技の切手）

矢を番えて構える動作、満を引いて矢を放ち弧を描いて飛ぶ矢、審判員の歌う当り歌など、全てが悠長で草原の遊びの感じが表現されていた。

弓は「一分八間」と云われる通り、手元の一分の差は標的では八間の差がある心技体一致の武術だ。私も旧制中学生時代に経験があり、興味深く眺めていた。

那須の与一が弓技に出場したら面白い勝負になっただろうと思いながら、午後４時頃にゴールインする予定の競馬会場へとバスに乗車した。

競馬

決勝点のある空港東側の草原に急行すると、曠野を取り巻く観客は随分遠くに見えていた。蕩々乎とした荒野の上空には数個の落下傘が順風にゆらゆらと浮かび、疾駆長駆の騎馬の到着近しと盛り立てていた。

蒙古の競馬は２歳馬は１５㎞、３歳馬は２０㎞、４歳馬は２５㎞、５歳馬は２８㎞、６歳馬は３０㎞と競争は別々に３日間にわたって行われる。馬は去勢された牡馬で牝馬は乗ることが出来ない。騎手は６歳から１２歳までの少年少女というのは、騎馬民族の子孫に相応しい。

本日のレースは何歳馬のレースか判らない。コースは自然の草原を走るばかりか、標高１５００～２０.０００ｍ級の山を越えなければならず、３００頭近い馬が競う長距離レースである。

遥か彼方の小高い丘に微かに砂煙が見えてくると、我れを忘れて怒濤のような声援と歓呼の声を送りたい心地で待ち焦がれていた。馬蹄は雲を起こすように砂塵をあげて近づき、その中から黒い点が一つ二つ、そして間もなく黒い点の塊が団子状を作り、幾つも見え出してきた。

その黒点は徐々に接近して、やがて疾駆する馬の姿もはっきりと見え、恰も千軍万馬の来襲のような光景であった。見物の大観衆の中に風発叱咤する騎手独特の奇声と、鉄蹄の強く地を蹴る音が響いてきた。

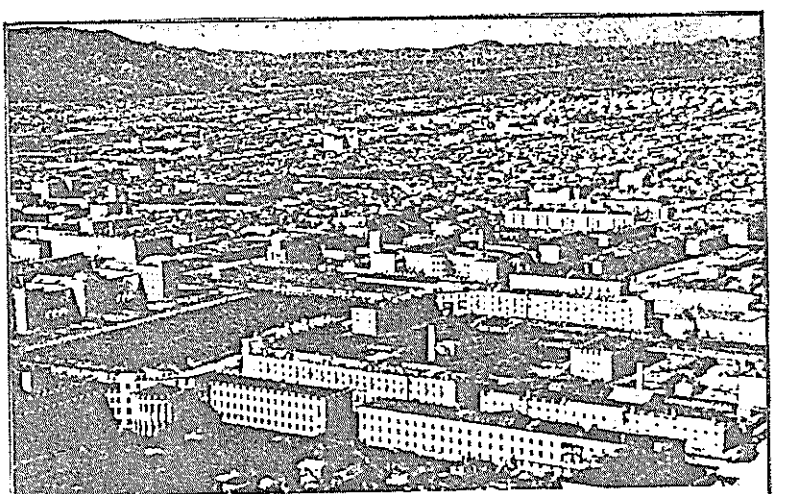
３０㎞の長丁場を一気に駆け抜けてきた先頭馬が眼前を通り、続いて後続馬が２、３頭、また続いて十数頭が群れになってゴールに疾走して行った。将に剛健、進取、敢闘の雄姿だった。

「鞍上人無く鞍下馬無し」、騎手と馬が一体となって驀進する名操縦ぶりは、モンゴル民族が騎馬民族であることを、改めて想い起こさせてくれた。

優勝の賞品はテレビ１台で１０着までは賞品が授与され、騎手が落馬しても馬がゴールすれば番数に入ると云う。又、最後尾にも賞品が出るのも面白いレースだ。

余韻嫋々とする中を名残を惜しんで競馬場を離れバスに乗車した。戎衣をまとって生と死の境を戦いながら天運あって生き延びた私にとって、此の尚武のナーダム祭を眼にできたことは数奇な運命であり、感無量であったと言わなければならない。

（下はゴール直前で優勝を争うレース風景）



草原の中に新しくよみがえるモンゴル人民共和国の首都ウラーンバートル

広く美しい心のモンゴルの人達へ

各種競技の見学が終わって最後の晩餐会は最高級のウランバートル・ホテルで行われた。久方ぶりの酒池肉林の豪奢な料理に舌鼓を打ち、宿舎のバヤンガル・ホテルに戻って振り返って見る時、この旅ほど自然と人間の機微に接した旅はなかったと、モンゴルの人達に感謝の心で一杯であった。

鳥道千里の７泊８日の旅は夢のように過ぎ去り、この国この人達と離別しなければならない離魂は、愛着を感じて渺々とした想いは尽きることがない。澄み切った空気と紺碧の蒼空に星空、際限のない茫漠広大な草原、ゲルに棲む遊牧の太陽族と家畜の群、度量が広くて親切な心の人達、私は之をモンゴルの四美と称賛したいのだ。

然し乍ら、逢うは別れの始めとか、明朝は早く出発しなければならない。

魅力的で刺激的であった彼等の生活の一端を見聞したことは、金では買えない私の貴重な財産となったモンゴル。

大草原を展望して大自然に触れた神秘的とも云える数々は、私の生き甲斐を新たにする充電の機会を与えてくれたモンゴル。

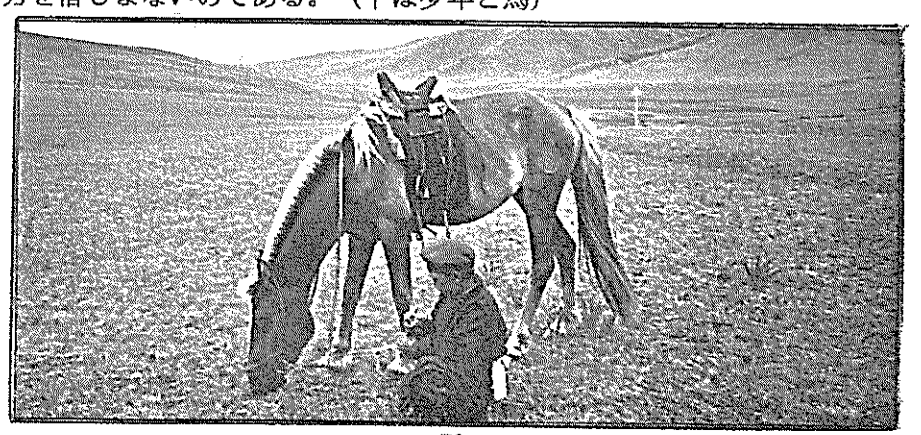
その日その地の想い出は其の度毎に記載したが、鳥瞰的、俯瞰的に眺めて２、３の愚見をモンゴルの人達に訴える。

輝く祖先の血を享けた世界に誇る蒙古の人達よ。何れの日にか蛟竜雲雨を得る時が来ることを信じている。人は心によって栄え物によって滅びる諺の通り「有志章成」（後漢書）、志のある者は必ず成功すると云う言葉を贈りたい。

ナーダム祭の競技の性格は競争の原理である。賢明なモンゴルの人達も政治や経済にも此の競争の原理を採り入れたら如何だろうか。冷静に将来を展望して国際的視野に立ち、世界の変化に対応することが繁栄の道であろう

「外面如菩薩、内面如夜叉」の国に対し総てに同和することなく、鵜の真似をする烏になる勿れ。過去の戦争は小国が血を流して大国が肥った歴史を思うと、誹謗中傷の国家戦略では生活文化の向上は決して望めない。

中国の古典に「我が公田に雨ふり、遂に我が利に及ぶ」と書いてあるが、全世界に利があって其れが自分に及ぶ時、人間の生活に幸福が来るのだという心を語った言葉を想起し、久遠の平和の為に思想の枠を越えて世界人となって欲しい。恐らく日本人も協力を惜しまないのである。（下は少年と馬）



7月12日 (水) 晴 バイカル湖 ウランバートル～イルクーツク

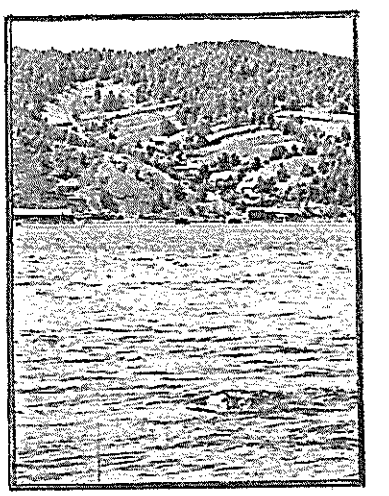
住み馴れた懐かしいバヤンガル・ホテルを発った早朝の５時半、漸く黎明期を迎えた草原には数百頭の馬が放牧され、トラ川の水を飲む１群も見えていた。人間が家畜を飼育しているのか、それとも家畜に人間が振り回されているのだろうか。このような大自然を相手にした光景も見納めであった。

首都の国際空港というものの、シベリア各地の空港と同じく閑散として免税店もなく、荷物の検査だけは徹底して行われていた。双発のプロペラ機は万感の想いを残して、０７・１５に紺青の空へ飛翔し、疲労が重なり緊張感も緩んで前後不覚に眠り続け、０８・４５にイルクーツク空港に到着して漸く眼を覚ました。

ホテルに旅装を解いた昼食後の１３時から、イルクーツク東方７０㎞のバイカル湖に向かって疾走した。街道の柳絮の綿の実は早や姿を消し、はかない花の命は本当に短いものだと感傷に耽っていた。帝政ロシア時代の哀れさを遺した古い町並みを通り、緑の茂る松林の中を通過すると活力を与えるような感じがして来た。広大な砂漠に見慣れた我々には無理もない。

真っ直ぐな道を覆う樹間から、冷々としたバイカルの湖水が澎湃として展開し、重々しい大木に年輪の隔たりを感じながら、再び樹海の中を突っ走った。街道沿いの静かな湖畔で停車したバスから茫洋とした湖面に眼を移し、心地よい眩しさに唖然として息を呑んでいた。

通訳はバイカルの水に両手をつけると５年、顔を洗うと１０年、飛び込むと２５年も長生きするのだと説明していたが、水の冷たさを言い表すためであろう。早速、湖水で顔を濡らして見ると実に冷たい。真夏でも８°Ｃ以上に上昇する事はないらしい。反面、冬期は完全に凍結して氷上道路が開通し、自動車も運行可能ということだ。



湖の向う岸近くの小さな岩に視線が釘付けされた。

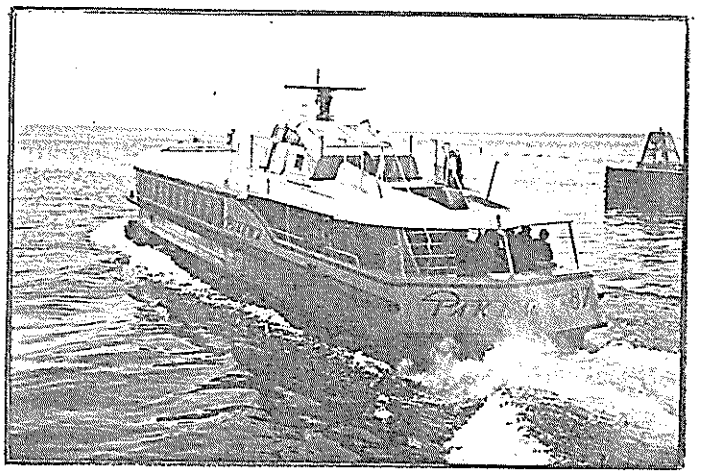
伝説によると、バイカルという名の父親に６３６人の娘があり、その一人の娘のアンガラがエニセという男に恋をした。しかし父親はエニセを嫌った揚句、娘は逃亡してしまった。

怒った父親は彼女に石を投げ付けて着物まで破ってしまった。そのために娘はアンガラ川に入水したと云う筋書きで、父親の姿が湖面に小さく見える岩になったのだと云う。伝説は何処にもある話で、通訳の話した名前はソ連の河川の名称として残っていることは確かである。（右の写真の下の方に小岩が見えている）

滄海の一粟というか大湖の一滴のような小岩は、貴重な湖面に浮かぶ唯一の存在で、自然美の中の紅一点に違いはない。しかし何時かは侵食されて水面下に沈没する運命にあるだろう。

断層によって形成された湖岸を更に進み遊覧船の桟橋の所で停車した。２５年長生きしたいのか、３人の東ドイツの青年が湖水に飛び込んだものの、冷たい水に面食らって直ぐ上陸し、観光客から喝采を浴びながら震えていた。

一行を乗せた遊覧船は世界第８位の面積をもつ沖に向って、天翔ける鴻のように水上を滑った。琵琶湖の約５０倍もある湖には神秘的な香りが漂い、４０mという世界有数の透明度をもつた湖面は、波風の立たない鏡のような静寂な世界であった。



新鮮な空気を吸う大気浴、森林の樹木の精気を浴びる森林浴、それに加えた湖水浴と共に、燦然と降り注ぐ日光浴を浴びながら、心が洗われるような感じで遊覧を楽しんでいた。（上は遊覧船）

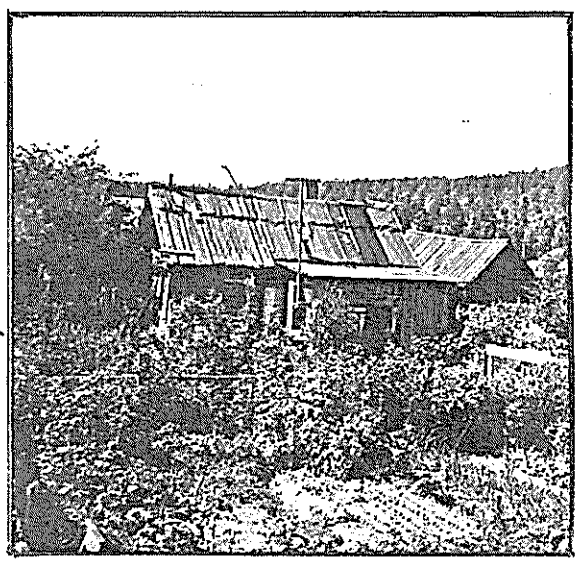
遠くからの眺めも奇麗であったが、接近して見ると更に美しいバイカル湖畔は、シベリア鉄道のレールが見えたかと思うと、緑の繁茂した山と森が現われ、奇岩怪石を交えた景観は頗る東洋的な眺望であった。

最深部が１７４１mにも及ぶ世界第１位の深湖は、蒼い水平線が限りなく蜿蜒と拡がり、陽を一杯に反射する湖面は眩しくて直視できない。眼の悪い私は眼をつむっていると自然に浅い眠りに誘い込まれていた。

高速艇に乗船したバイカル湖遊覧を終えて上陸すると、着ぶくれした子供達が戯れている一方、悠々と数頭の乳牛が街道を漫歩していた。湖に面した寂れた寒村には店屋もなく、共産圏の観光地は我々には想像外の状態であった。

沿岸の住民達はロシア革命から１９１８年以降に移住してきたコザック兵か、コザック農民の住み着いた村落だろうか。水と木の精が彼等を慰めている以外は枯れてしまった僻地で、中央から見捨てられた感じがしていた。

帰路に立ち寄った寒村も亦、豊富な森林資源がありながら貧弱な木造家屋ばかりであった。私有財産を認めない此の国では立木一本も自由にならず、自由諸国を見たこともない彼等は知らぬが仏だ。（右は湖畔の村落風景）



村落の中を歩いてみたものの人気がなく、空家のように静まり返った村の外れに、生き飽きたような老人が一人、無愛想な顔をして歩いていた。これが本当のシベリア住民の実態であろう。

午後５時半にホテルに帰って夜半の出発に備えたが、モンゴルの強烈な印象ばかりが頭に浮かび、バイカル湖遊覧は霞んだ存在となっていた。

7月13日 （木）晴　イルクーツク～ウラン・ウデ～ハバロフスク

夜中の０１・３０に起床して０２・００にホテルを発ち、湖畔の水面に揺らぐ街灯の明かりを眺めながら空港に向かった。早朝の４時の出発に拘らずプロペラ機はソ連人で満席の状態である。機上から望む白夜の太陽は地球を茜色に染め、バイカル湖畔の貧村の灯火は疎らに霞んで見えていた。

０４・４５に怨恨の深いウラン・ウデ空港に到着して又もや仮眠となり、０７・３０発のハバロフスク行に乗り継いだ。提供された機内食は紅茶とビスケットだけの世界最低の粗悪なもので、彼等は我慢できても我々には通用するものではない。軍事の最優先は機内食にまで影響を及ぼし、どこに世界の大国の威厳があるのだろうか。世界の顔となっている旅客機も、バイカル湖畔の寒村と全く同じだと云わなければならない。

１１・３０（時差の関係でハバロフスク時間は１３・３０）、２週間ぶりにハバロフスク空港に着陸した。然し乍ら今度は我々一行の荷物が着いていないと告げられた。２度あることは３度あると言われているが出鱈目にも程があり、開いた口が塞がらない。堪忍袋の緒が切れるばかりの憤りに対し、多分ウラン・ウデ空港に積み残したという無責任な返答だ。致し方ないと諦めた一行は馴染のホテルへと向かった。

夕食時にソ連の通訳は荷物が有ったと飛んで来た。シベリア各地の空港にはベルトコンベアの設備がなく、荷物運搬人の程度も悪くて何処か別の所に運んだらしい。とにかく設備の悪さが全ての原因である。

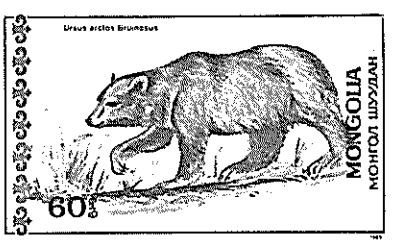
明日、荷物と一緒に帰国できる喜びは一入であったが、若い女性添乗員の心痛は並大抵ではなかっただろうと同情したい。

ソ連通過の旅程は我々に悪い心証を抱かせた事は紛れもない事実であった。特に私のように戦闘に身を投じた者にとっては、過去の非道極まるソ連の行動は許し難く、北方四島を占領する赤魔の辛辣に対しても怨み骨髄に達している。敗戦後の腑甲斐なかった当時を回顧して現在を見る時、敗れて勝ったのだと云う強い感慨が胸を締め付けた事も事実であった。

7月14日 （金）晴　ハバロフスク～新潟

大草原のモンゴルに心を引かれた悠遊の旅は遂に終わった。豊かな心の人との触れ合い、何時も好奇心に駆られて挑戦する心、万感交々の感慨を抱きながら１３・５０ハバロフスク空港を飛び立った。

枯れていく我を知りながら、これからも遊び心をもって老いを愉しみたいと思いつつ１４・００に新潟空港に着陸し、１９・３０には我が家に帰着した。



２１世紀の民族開放運動

ソ連、モンゴルを紀行（ソ連は２回目）して感じたことは、２１世紀に向かった民族開放運動であった。ソ連、西欧諸国の世界征服の歴史は、５頁に記載した「西欧、ソ連の覇権侵略の過程」で其の概要を述べた通りである。

ゴルバチョフが政権を掌握し、言を大にしてペレストロイカ政策をを掲げ、諸外国との融和政策に乗りだして世界注視の的となっている。

然し乍ら一向に経済面では成績は向上せず、今次旅行で私の視野に入った名物の買物行列でも全く１５年前と変わっていない。最近ではソ連のマスコミまでが非難していると聞いている。

ゴルバチョフ改革の副産物として、皮肉なことに各地では民族開放運動が活発化し、目下無気味な盛り上がりを見せている点は注目すべきことだ。殊にドイツがポーランドに侵攻した第２次大戦前夜のドサクサに乗じ、ソ連が弾圧併合したエストニア、ラトビヤ、リトアニアのバルト海に面した三国の祖国回復運動（独立運動）では、絶え間なく暴動やデモが続いている。（本年は丁度５０年目に当る）

バルト三国や東欧諸国の反革命分子をスターリンは４００万人もシベリアに送り、今日に至るまで帰国させていないと云う。去る３月１５日のデモは、シベリアに送られた同胞を偲ぶ記念の大衆デモであった。歴史は将に伝承と云わなければならない。

一方、地震のあったアルメニア共和国を始め、南方のイスラム圏諸国の民族主義運動も前者に呼応する形で暴動を繰り返し、いつ爆発しても不思議ではない状況だ。この地方にも訪れた事があるが、数次の露土（土＝トルコ）戦争の結果、割譲させられた因縁の地である。彼等の反ロシア思想は根強く、日露戦争の日本の大勝利を羨望していた事が、訪れた当時の記憶として私の脳裏に残っている。それに加えてポーランド然り、ブルガリア然りだ。

中国に於けるチベットの民族独立闘争も衆知の通りで、人種、文化、言語、文字、宗教、習慣等が凡て異なり、長く独立した立場にあった民族の独立に対する願望は想像以上だ。特に１３０万人もの人達が抹殺された上に、２８００近くの寺院までが破壊され、政教の中心であるダライ・ラマのインド亡命は彼等の許せない事であろう。

数例をあげたに過ぎないが以上のことから、２１世紀は嵐のように民族開放の世紀になるのではないだろうか。日露戦争で幕を開けた２０世紀は第１次、第２次の世界大戦を経て、英・米・仏・独・オランダ・スペイン・ポルトガル等の自由主義圏内にあった白人支配の植民地は、悉く開放されて独立を達成した。

今や世界の独立国は１６７ケ国に及び、南アを除く外は人種平等、人種差別撤廃の思想が普及し、残るところは共産主義諸国のソ連・中共のかかえる少数民族の異民族統治だけである。（モンゴルは良い機会を捉えて独立したと云える）

「独立は一民族のためならず」とはインドネシア独立の父「スカルノ」の言葉だが、いかなる民族も独立を獲得したいという願望は、赤子が母親の乳房を求めるように民族の本能に根ざすものだ。いかなる力もこれを阻止する事は不可能である。

２１世紀に向けて残されている諸民族の開放独立運動が、どのように展開して行くか、北方四島の返還問題と睨み合わせて世界的に興味のある問題だと言えよう。

あとがき

「人皆生を楽しまざるは死を恐れざるが故なり」とは徒然草の兼行の言葉である。生死を超越して身を以て死戦を体験した私は幾度となく死んでいた。九死に一生を得た貴重な命だからこそ、余生を楽しまなければならないと云う心境に陥り旅を続けている。そこに若干、兼行との心境は違っても理解できる辞である。

歳月は人を待たず、今日のあとには今日はない。有限の人生という時間は余りにも早く流れて二度と帰らない。それだけに時を刻々と意義ある生き方で過ごしたいものだ。昨今、齢を重ねる度に時間ほど貴重なものはないと感じている。

老後生活の単調な繰り返しは退屈なもので、退屈の継続は耄碌へと進んでいくものだ。老いは長い（或は短く感じる）人生を歩んだ後にやって来る実地を踏んだ歴史家、その人生観は千差万別であろう。

又、過去にこだわる事も老化を徒進させる。常に未来に眼を向ける事は大切だ。その未来を私は旅に求めた。旅は心の若返りの泉、心を遊ばせることが旅の魅力である。

涯りのある身で涯りのない欲望を追求するには心身の危険が伴う。それを承知で引きずられるのも自然の髄順、大草原のモンゴル行も馬鹿の一芸だったかも知れない。

栄光の蒙古は消え去った。しかし紛々とした戦乱の中に世界制覇を成し遂げた祖先の血は今もなお流れ、偉大な歴史の跡は歴然と遺っていた。青く澄んだ無限に拡がる大空、一望果てしのない草原、悠々と草を喰む家畜の群、ゴビの砂漠、それらは私の空想的な異郷へのロマンを掻き立ててくれた。

チンギス汗時代のモンゴルが世界に比類のない大帝国を築いた要因に、馬を駆った機動性と馬上からの弓射術の巧みさ、そして勇敢さが挙げられる。その伝統的な競技がナーダム祭（7月１１日の革命記念日）で見ることが出来た。そして彼等がチンギス汗の末裔であることを思い起したのである。

青く澄み渡った空の下で無限の草原を土俵にした「角力」、勇壮に羽搏く力士達の敢闘は、ユーラシアに伝わる格闘技の源流を思わせた。

広大な大地を疾駆する「競馬」の群、地平線の彼方に砂煙を上げる馬蹄の響きを聞きながら、チンギス汗時代にタイムスリップしたような幻想にとらわれた。

嘗て大陸を席捲した騎馬民族にとって最も強力な武器は「弓矢」であった。民族の威厳を象徴する民族衣装に盛装した老若男女、この弓矢は最も誇り高い競技である。

「丈夫（マスラオ）の三競技」と云われた上記の競技は、嘗て祭神に奉納する神事として、或は寺院の祭に行われたのであった。其の伝統が我が国にも伝承されたのではないかと、モンゴル民族に近親感を覚えたのは私だけではないだろう。

モンゴルの旅が終わり、再び人生の価値はどこに在るのかと考えた。この繰り返しが即ち人生である。人生には締切があり、各人の持ち時間は有限だ。金は使えば減り、肉体は年をとれば衰えて何時かは臨終となる。何時でも出来ると思うことも出来なくなるのが人生の姿だ。

決心の速さで人生を送ってきた私は時間の空費を最も恐れる。才劣り識浅い我が身は財を遺し名を残す能力は無いが、「泣いて暮すも一生、笑って暮すも一生」だと、その笑いを旅に求めたい。我が死は終わりでなく此の蛙鳴蝉噪な拙文が私に代わり、永久に旅の醍醐味を伝えてくれるだろう。

（古代蒙古の正装）

石川県加賀市山代温泉神明町７の３

寺　前　信　次

ＴＥＬ　０７６１７～６～０３２１